2019 年度
第 6 回

アクサ ユネスコ協会
減災教育プログラム

助成校 35 校

実践活動報告書

2020 年 3 月

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

アクサ生命

～目　次～

【小学校】

〇青森県　平川市立竹館小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.4
〇宮城県　気仙沼市立面瀬小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.8
〇埼玉県　新座市立片山小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.12
〇岐阜県　山県市立高富小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.14
〇静岡県　函南町立東小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.20
〇静岡県　浜松市立富塚小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.22
〇大阪府　大阪市立堀江小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.26
〇大阪府　八尾市立北山本小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.28
〇奈良県　奈良市立鶴舞小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.32
〇広島県　熊野町立熊野第一小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.38
〇広島県　府中町立府中北小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.48
〇山口県　周南市立三丘小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.54
〇熊本県　大津町立大津小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.56
〇大分県　中津市立下郷小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.62

【中学校】

〇宮城県　角田市立角田中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.68
〇宮城県　石巻市立河北中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.76
〇神奈川県　横須賀市立浦賀中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.82
〇富山県　富山市立楡原中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.84
〇岐阜県　羽島市立中島中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.86
〇静岡県　袋井市立袋井中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.92
〇愛知県　名古屋市立丸の内中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.96
〇広島県　熊野町立熊野中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.98
〇山口県　山口市立平川中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.102
〇福岡県　福岡市立城西中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.104
〇福岡県　大牟田市立橘中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.108
〇熊本県　南阿蘇村立南阿蘇中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.112
〇大分県　日田市立東部中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.116

【高等学校】

〇茨城県　茨城県立鬼怒商業高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.118
〇千葉県　千葉県立館山総合高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.120
〇東京都　東京都立浅草高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.122
〇神奈川県　横浜市立東高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.126
〇大阪府　大阪府立堺工科高等学校定時制の課程・・・・・・・・・・・・・・P.128
〇広島県　広島県立廿日市高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.134
〇山口県　山口県立田布施農工高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.138
〇高知県　高知県立大方高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.142

学校名	平川市立竹館小学校
担当教員名	千葉　光帆

活動のテーマ	「忘れない」を合い言葉に！～科学的思考と慌てない心構えで２次災害を防ごう～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間、理科、社会）
活動に参加した児童生徒数	１～６学年（　９６人　）
活動に携わった教員数	１５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２０　人【保護者・地域住民】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年６月１日　～　２０２０年２月２９日
想定する災害	地震・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

停電は、あらゆる災害に付随して発生しうる２次災害である。しかし、現代社会に於いて停電によって絶対必須のライフラインが途絶する事態は災害そのものであるとも言える。事実、当地でも東日本大震災により３日間にわたる停電で照明、暖房、情報を失い心理的な不安、身体的影響を受けた。また、昨年度の修学旅行では北海道胆振東部地震に遭遇しブラックアウトを経験した。この機会を捉えて、万一停電に見舞われても冷静に振る舞うための確かな知識を身につけ、停電に備えるための学習を推進することは重要な意味を持つ。震災の記憶を風化させることなく「自然災害でなぜ電気が失われるのか」について筋道を立てて考察させる中で、「自分の身を守るための判断と行動の在り方」を見出させたい。更には、子供達へ「科学的な知識は身を守る」という科学の有用性を実感させるとともに人類が直面している課題を乗り越えるための創造力を醸成する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①各児童が各家庭で東日本大震災による停電時の状況や対応などを聞き取り、聞き取った内容を各学級で発表し合い、それぞれの情報を共有した。(6 月～)

②大地震の発生を想定した避難訓練を実施。地震によって停電が起こる理由を学ぶとともに、停電が発生した場合の対応法について学習した。(9 月 3 日)

③弘前大学から長南幸安教授を招聘し、バンデグラフを用いた実験を行い「電気の正体」について学んだ。落雷の実験では、鳥カゴや自動車の中に入ると雷の影響を受けないことを学習することができた。（１２月１３日）

④マッチやろうそくの安全な使い方の指導（寒冷期の停電に備えての防寒対応）（各学級で１月～）

⑤日本科学技術振興財団から加藤太一研究員を招聘し、種々の発電方法のメリットとデメリットを整理し、電気エネルギーを確保することとベストミックスの重要性について確認した。（１月２９日）

⑤活動の成果を平川市の「青少年健全育成市民会議」で発表した。減災教育の重要性について保護者や地域住民へ広く啓蒙する機会となった。（２月１６日）

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・気仙沼市での研修会では、衝撃的な状況を呈している被災地を目の当たりにすることができた。従って、自然災害のすさまじい脅威をより具体的に迫力をもって子供たちへ伝えることができるようになった。

・階上小中学校の先進的な実践例をお手本にした防災学習を展開できるようになった。
・外部から講師を招聘することで、より効果的な実験や体験を折り混ぜながら、より専門的な見識を踏まえて子供たちを指導することが可能になった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・手回し発電機を用いて子供たちに交流電流をつくり出す実験に取り組ませるとともに、風力発電の仕組みや電気エネルギーを光や熱、動力に変換できることを体験的に学習させることができた。子供たちは普段の生活で何気なく使っている電気をつくるために意外と大きな労力が必要であることを実感した様子であった。また、エネルギーを変換する技術が自分たちの生活を支えている事実を理解できたようである。
・今回の学びを生かし、日本教育新聞社主催の「小学生･中学生によるエネルギー環境問題アイデアコンテスト」や資源エネルギー庁主催の「私たちの暮らしとエネルギー、壁新聞コンテスト」へ応募する児童が大幅に増加したことは大きな喜びであった。

②児童にとって具体的にどのような学びがあり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・児童及び保護者、地域住民が確かな知識と自分の考えに基づいて行動できるようになり、いたずらに暗闇を恐れることや、不安に駆られることがなくなった。
・本活動で招聘する専門家らによる学術的な見地からの指導により、児童の視野を大きく広げることができた。また、子供達の社会性を高めるために有効であった。
・本地域において小学校は地域コミュニティの拠点を担っていることから、児童の声を通して保護者の皆さんや地域の方々の減災への気運を高めることができた。本市全体にとって大きな利益になったと確信する。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・教師が外部講師による指導へ立ち会うことで、減災への意識と意欲を向上させることができた。
・「減災」をテーマにした授業を参観日などで公開することで、減災教育の必要性について保護者の皆さんや地域の方々へも広く啓蒙することができた。
・子供たちの感想の中には、「もしもの時に備えて家族で災害時に必要な懐中電灯など保管場所を確認したい」などがあり、家庭内で減災について話し合うきっかけにすることができたことも成果の一つである。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・本プログラムで特筆すべき点は、東日本大震災の発生から８年が経過して、本市に於いて風化しかけている震災の記憶と教訓を呼び起こす学習を出発点としていることである。奇しくも、２０１８年９月に修学旅行中であった本校児童が遭遇した北海道胆振東部地震に伴い発生したブラックアウトの体験談とも併せて、それらの情報を学校全体で共有することで減災学習に取り組むことへのモチベーションを大きく向上させることができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・震災の記憶や教訓を確実に次世代へ伝えるために、次年度以降も本実践を確実に継続することが求められる。
・かつて、寺田寅彦氏は「天災は忘れた頃に来る」と人々を戒めた。しかし、昨今の気候変動は「忘れる間もないほどに次々と新たな自然災害が来襲する」現実をもたらしている。今回のプログラムを一つの契機として、減災教育を一層充実しなければならないと決意を新たにしている。

７）その他（※特にあれば記述）

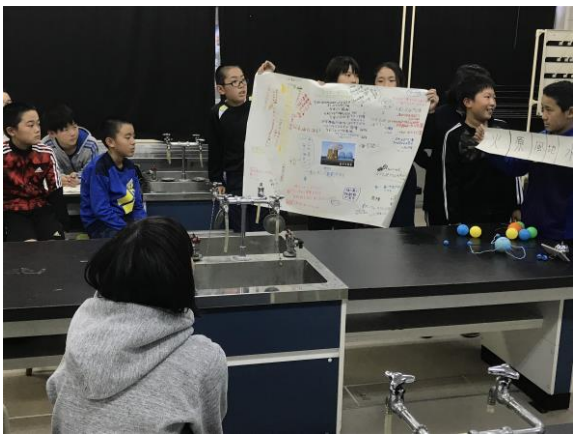
・貴助成により専門家の授業を展開するなど減災教育を充実させることができました。衷心より感謝申し上げます。

2019 年度　第 6 回「アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム」活動の記録

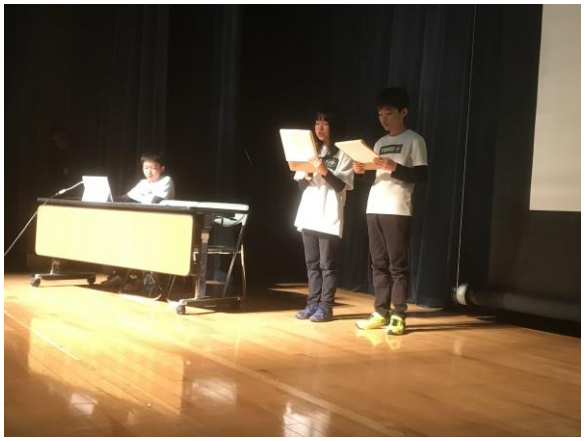
青森県平川市立竹館小学校

避難訓練後の防災講話　1

長南氏（弘前大学）による授業　2



発電方法による長所と短所を比較　3



市民会議で学習成果を発表　4

学校名	気仙沼市立面瀬小学校
担当教員名	畠山　新太郎

活動のテーマ	地域を共につなげ，ひろげ，深める防災・減災教育の実践
主な教科領域等	防災訓練は学校行事として実施
活動に参加した児童生徒数	全学年（　２６人　）
活動に携わった教員数	２２　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	６００　人【保護者・地域住民・その他（　中学生　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年１１月３日　～　２０１９年１１月３日
想定する災害	地震・津波

活動報告

１）活動の目的・ねらい

◎東日本大震災を踏まえ，防災に関する意識の高揚と知識の向上を図り学校と地域住民が災害発生時にスムーズな連携の下に行動し，全員が安全に避難活動をできる。

・自分の住んでいる地域の避難経路が分かる。

・各自治体主体の避難行動の訓練に主体的に取り組むことを通して，地域防災について理解できる。

・避難所の運営に積極的に関わることができる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

（１）防災訓練当日の活動の流れ，内容について（学校）の概略

時　刻	活　　動	備　　考
８時１５分	打合せ ・避難場所の欠席者連絡の確認	避難場所名簿により欠席者の確認
８時４０分	・担当する地区の各避難場所に教員が移動。	※遠方は徒歩２０分ほど要する。
９時００分	・訓練「災害発生」の市の防災無線，児童避難開始	保護者，住民も避難開始
９時２０分	・避難場所に集合，中学生を中心に避難者名簿作成，自治会代表に報告	担当教員は避難者名簿と中学生の報告を照合し欠席者を確認する。全員出席の場合，学校への連絡を要しない。
９時３０分	・地域の自治会館に避難開始	
９時４５分	・各自治会館で安否確認をする。 ・自治会全体で避難者名簿を作成し，確認，照合。	
11 時 00 分	・自治体毎の訓練	自治体毎に設定した活動内容
11 時３０分	・自治会毎に終了	
11 時 50 分	・打合せ	各地区の報告

（２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

実施月	打合せ内容
６月	各自治会会長，副会長等，担当者と学校側が活動の目的，内容等について共有を図った。
８月	１１月の訓練当日の避難経路，参加者の確認，活動内容等について確認，打合せをした。
１０月	これまでの各自治会の準備状況を確認するとともに，防災訓練当日までに準備，話合いが必要なことなどについて全体で確認した。

（3）学校での防災訓練に向けての実践

・本校では「防災の日」を設定し，宮城県で発行した防災教育副読本「未来へのきずな」を活用し，毎月防災・減災についての理解を深め，自助・共助の意識を高める実践を行っている。防災訓練についても事前に各学級で訓練について見通しを持たせ，活動のめあてや活動内容，注意点の理解，振り返りなどの学習を行っている。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

昨年度までは，中学校と小学校だけで避難活動を行っていた。地域との連携を図る体制が整っていなかったことが大きな理由の一つであった。そこで，これまでの小，中学校で一緒に活動した経験を活かし，地域の協力も取り入れて改善した。大きな改善点として，

・地域と連携して防災・減災活動に具体的に取り組む活動にする。
・地域全体で防災意識がもてる活動内容を工夫する。
・ワークショップ用のホワイトボードを活用しての職員の話合いを活発化し，地域防災を進める上でいろいろな考えや発想を引き出せるように工夫する。

などが挙げられる。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・保護者や地域の方々と一緒に避難経路を考え確認したことで，どの道を通って避難場所まで移動したらよいかを理解することができた。
・中学生と一緒に避難所の開設の準備や非常食の準備などをしたりすることを通して，主体的に減災活動の取り組みに参加することができた。
・普段関わることの少ない地域の方々や中学生と一緒に活動したり，教えてもらったりすることを通して，自分から人に関わろうとする態度を身に付ける機会とすることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・自分の住んでいる地域の危険箇所について理解し，訓練を活かして自分の安全を確保するために避難行動をとる力を身に付けることができた。
・避難後の生活において役立つ物や行動，態度について理解することができた。
・災害時及び発生後に，他の人や地域のために自分ができることについて考え，具体的な行動として行う力を身に付けることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・避難経路の確認や避難所設置について地域住民の方々を含め，一緒に考え行動することができた。
・地域の防災力を活かした減災教育活動を視点から，「開かれた学校づくり」に努め，災害非常時の場合でも地域の連携を生かせる基礎づくりの一つとして位置づけられる教育活動の一つにすることができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・小学校，中学校，各自治会の代表，担当者が活動の目的や内容等について十分に話し合い，共有することができた。
・初めての活動であったが，保護者以外の地域住民の方々と一緒に減災のためにどのような手立てがとれるのかを考え，行動することができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・実施後の課題としては，避難経路，避難場所で再検討な必要な地区があったこと，自治会毎に活動内容に温度差があったことや参加者（地区民，保護者）が十分に活動の内容を理解していなかったことなどが挙げられる。また，地区によっては保護者以外の参加が少なかったところがあった一方，参加者が多く，活動するには活動場所が狭かったという課題点もあった。

・より多くの地域住民の参加を促すために，自治会側からの働き掛けだけでなく，学校としてどのような情報発信ができるか，どのような減災活動の取り組みを地区の方々に伝えることができるか考え，これからの防災・減災教育の内容や目的などを改善していきたい。

７）その他（※特にあれば記述）

＜実際の活動の様子の一部＞

避難路を保護者，地域住民が避難している様子

地区内で避難する上で危険な箇所を確認した。

電気や灯油が使えないことを
想定して火を起こした

乾パン，アルファー米などの非常食を実際に試食

各自治会で行った活動例

・発電機の使い方の確認，

・火災を想定しての消火訓練

・救命講習会（ＡＥＤの使い方やけがの手当法の確認など）

・炊き出し

・ハザードマップの見方についての確認など

・避難する上での危険箇所の確認

学校名	埼玉県新座市立片山小学校
担当教員名	近江　大輝

活動のテーマ	豊かな学びを育む　～みんなでつくる　防災安全地区　片山～
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	全学年（　５０９人　）
活動に携わった教員数	３５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	６２３　人【保護者・地域住民・その他（ 地域企業（２５人）　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年７月１日　～　２０２０年３月１６日
想定する災害	地震・津波・洪水・河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

　１　発達段階に応じて「防災」についての知識を得る

　２　家庭・地域の防災意識向上（危険箇所、避難所のしくみ等の周知）

　３　家庭・地域に向けた防災対策の資料作成と紹介

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・計画準備　：７月～８月　（各学年、カリキュラムマネジメントによる防災教育の実施）

・協議・調整：７月～８月（夏期研修）

（カリキュラムマネジメント計画・プログラミング学習計画）

・教材の作成・授業：９月～１月

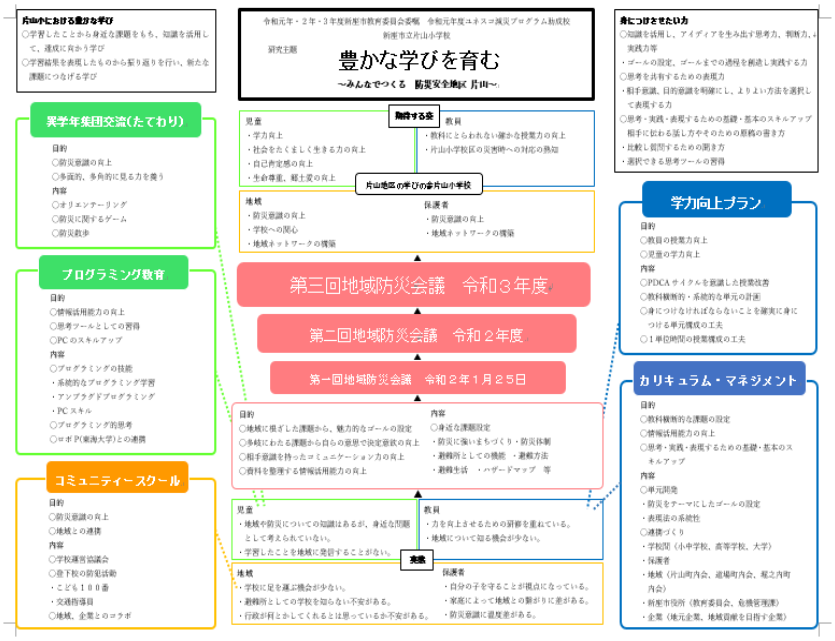
・最終報告　：１月２５日

（地域防災会議）

・振り返り　：２月

・次年度へ向けた取組の確認：３月

（SDGs の視点を取り入れた校内組織・委員　会活動）



３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・教員研修（SDG s の視点・気仙沼の減災教育について）

・企業との連携（災害に強い家造りの工夫について：セキスイハイム工業蓮田工場）

・地域防災会議の実践・設定

・SDGs の視点を取り入れた校務分掌・委員会活動の運営組織作り

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・親子・地域住民とともに「地域防災会議」を行う。
（各教科の学びを生かした防災教育の実践）
・授業の工夫、改善、向上を図る。（ミーティングボードの活用）

「地域防災会議」バケツリレーの様子

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・防災意識が高くなった。→地域防災を自分たちの課題としてとらえ、必要な情報を進んで収集できた。
・考えを伝え合う力が高くなった。→「災害から身を守る」ことへの必要性についてミーティングボードを活用し、伝え合うことができた。また、児童だけではなく、保護者・地域の方にも伝え、コミュニケーション能力の育成につながった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教　師→防災意識を高めるために、カリキュラムマネジメントによる授業づくりの実践を行うことができた。
保護者→「我が家で取り組めそうな防災」について、子供と一緒に考える地域防災会議となった。
地　域→地域防災会議に向けた宣伝やポスターの掲示など、地域ぐるみで防災意識を高めることができた。
企　業→「災害に強い家」についての専門的な知識を教えていただくことで、地域防災について考えを深めることができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・異学年集団交流活動（たてわり）で地域防災会議に取り組めた。
・各学年、防災学習（カリキュラムマネジメント）の内容を研究授業・発表できた。
・プログラミング教育の視点を取り入れた授業づくりを行えた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・年間指導計画の改善　・防災学習の積み重ね　・地域防災会議のあり方（ブースの配置・テーマ選定）
・特別活動と安全教育との連携　・SDGs の視点を取り入れた学校組織・運営
・校内研修の改善と計画

7）その他

次年度に向けて、SDGs の視点を取り入れた校内研究・学校組織・校務分掌・児童の委員会活動など、防災・減災を意識した活動を考えている。「持続可能な開発目標」に向けた学校としての取組を今後計画していく。

学校名	岐阜県山県市立高富小学校
担当教員名	大竹　美保

活動のテーマ	過去の自然災害から学び，自分の命を守るため，自ら考え判断して行動できる子どもの育成
主な教科領域等	教科領域（　総合・学校行事　）
活動に参加した児童生徒数	全学年（　３３６人　）
活動に携わった教員数	２７　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２４９　人【保護者・地域住民・その他（　地域防災士　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１日　～　２０２０年３月２４日
想定する災害	津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

児童，教職員ともに被災した経験はなく，防災教育が必要だと言われながらも，防災にかかわる危機管理意識は低い。そこで，学級活動や行事，安全指導につなげながら，まずは教職員が「防災」とういう視点から，「命を守る」ことを考えていくことができるようにしたい。そして，小学生であっても「自助」が重要になってくることを考えさせる機会を設けていきたい。また，児童には，身近で起こる災害をイメージし，自分にできることは何かを考えたり，被災地のためにできることを知ったりする中で，防災の意識を高め，自ら判断して行動できる子どもを育成していきたい。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

〇命を守る訓練…学期ごとに実施し，年３回実施。

〇引き渡し訓練…小中学校合同で実施。

〇安全指導…発育測定時に養護教諭から，「命を守るために大切なこと」の話を聞きながら一緒に考える。

〇職員研修…１回目は，校内の防災対策や防災教育について研修し，２回目は研修で学んだことの伝達を含め，防災・減災教育の重要性や来年度に向けての研修を行う。

〇防災講話…実際に被災地で活動を続けている方から話を聞くことで，より現実として受け取ることができるようにする。また，児童からの質問にも答えていただく。

〇防災体験…避難所間仕切りセットを活用し，実際の避難所での生活の様子をイメージする。
児童と教職員で，被災地で使用する「アシスト瓦」を作成し，被災地に思いを馳せる。

〇そ の 他…防災にかかわる書籍を購入し，図書館で「防災コーナー」を設け，自由に読めるようにしたり，読み聞かせに利用したりする。また，学級図書として常に読むことができる書籍の購入もする。
さらに，給食時の放送や「ほけんだより」を通じて「防災」についての啓発をする。

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・研修で学んだことや気仙沼市の「防災学習シート」を参考にしながら，防災教育の進め方を見直し，防災教育年間計画についての作成検討をするきっかけとなった。

・通常の訓練だけに終わらず，児童自身が考えたり，体験したりすることの大切さを感じ，防災教育のあり方を見直すことができた。

・「防災」だけでなく，「減災」教育についての重要性を認識できた。

・助成金を活用して，講師依頼や体験セットの購入，たくさんの書籍の購入をすることができ，例年よりも防災教育を充実させることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・訓練主体の防災教育に留まらず，児童自身が考えたり，経験したりする活動を取り入れることができた。
・教職員も体験活動をすることで，児童に一緒に取り組んでいるという意識をもたせることができた。
・具体的な取組をすることで，教職員も児童も防災に対する意識を高めることにつながった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・被災地に向けての取組で，「自分たちにもできることがある」と実感することができた。
・外部講師への質問を記入させた際に，具体的な質問を書くなど，自分の身に起こることという捉えを強くもつことができた児童がいた。
・被災地で活躍する講師の講話から，被災後の実際の生活の様子を知り，どんな備えが必要なのかなどを事前に家族で話し合うことを含めた備えの重要性を感じることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・具体的な活動をすることで，教職員自身の興味関心が高まった。
・教職員自身が体験することで，被災地への思いを深め，意欲的に児童への指導を行うことができた。
・外部講師による講話で，教職員自身が現実として受け止め，防災教育の必要性を再認識できた。
・通信で学校での防災に関わる活動を紹介したり，地域の防災活動を紹介したりすることで，校内だけの防災教育とならないよう，保護者や地域への啓発や情報共有をすることができた。
・市教育委員会へ本校の取組について報告し，防災教育の重要性を伝えることができた。
・地域の防災にかかわる方と本校の取組について情報共有をすることで，つながりをもつことができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・ただ話を聞くという活動だけでなく，実際に体験したり，活動したりすることでより防災を意識できるようにした。また，被災地に向けて作成したものを実際に被災現場で使用する人へ渡し，現状を聞かせてもらうなど，活動を点で終わらせず，つなげることも意識した。
・東日本大震災後の被災地での勤務経験があり，災害ボランティアを続けている担当者が，今回参加した研修と自身の経験で学んだことをつなげながら，防災教育を進めることで，より現実として実感させ，興味関心をもてるようにした。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・今年度は助成金を活用しての取組が多かったが，来年度以降も継続して指導できるような計画の立案。
・「防災教育」のみならず，「減災教育」に対する教職員の意識の向上。
・地域と連携して，災害発生時の対応について協議するなど，地域連携の強化。
・自校だけにとどまらず，市内の学校での防災・減災教育活動を進め，地域で取組ができるよう啓発。
・３月から休校になり，十分な活用のできなかった書籍の活用。

補足資料①

アシスト瓦作成

被災で役に立つものを作成することで，遠くからでも支援する方法があると知る。

①教職員がシルバーシートを切ったり，ダンボールを切ったりして準備しました。

②４年生がダンボールをシルバーシートで包み，三辺に防水テープを貼りました。テープをまっすぐに貼ることは難しかったですが，協力し合って一生懸命作っていました。

③４年生２クラスと特別支援あさがお学級は，全員が絵を描きました。それ以外の学級からは，代表児童に描いてもらいました。たくさんの児童がすてきな絵やメッセージを描いてくれました。

防災講話

実際に被災地で活動されている方から，被災地の現状や支援活動について，備えについて聞く。

講師…特定非営利活動法人　災害救援レスキューアシスト　代表　中島　武志さん

２年生に向けての講話

低学年でも集中して聞く姿

４～６年生に向けての講話

一生懸命メモを取る姿

作ったアシスト瓦を渡しました

防災体験

避難所で使用するダンボール間仕切りを実際に見て，避難所での生活をイメージする。

ただ置いてみる，クイズにして考えさせるなど，児童の興味関心を引くことができるようにした。実際に数人で中に入って考えたり，寝転がってみたりする姿があった。

防災に関わる書籍の購入

防災に関わる本を購入し，読む機会を増やす。

右の写真の本をはじめ，合計 24 冊の本を購入。現在図書室にある防災に関わる本とともに，防災のコーナーを設けていく。知識を学ぶタイプの本だけでなく，絵本や実話をもとにした物語，防災食のクッキングなど様々なジャンルでから選び，子どもたちが手に取りやすくなるようにした。また，学級文庫にも１冊おけるようにするなど，身近な場所で読めるようにもした。

ほけんだより

補足資料②
R2.1.30
高富小学校

いのち を守ろう！

災害は，いつ・どこで起こるかわからない！

あちこちで自然災害が起こっています。「平成３０年７月豪雨」では，岐阜県でも被害がありました。今後も同じように「豪雨」による被害や「地震」「台風」の被害など，いつどこで災害が起こるかわかりません。

しかし，身近なところで起こらなかったり，大きな災害があっても月日が経ってしまったりすると，防災に対する意識はどんどん低くなります。

そこで，今年度はいつもの「命を守る訓練」だけでなく，災害について意識を高める機会をもてないかと考えました。そして，実際に被災地で活動されている方のお話を聞く「防災講話」と，被災地で使用する「アシスト瓦」を作成することとしました。

※「アシスト瓦」とは，右の写真のように台風等で壊れてしまった瓦のかわりに応急処置として使用します。状況によっては屋根全体にブルーシートを張るよりも効果的です。

自分たちにできることって，なんだろう？

小学生だから何もできることはない？　そんなことはありません。自分の命を守るための方法を学んだり，訓練したり，家の人といっしょに防災グッズは何があるとよいか考えたり…。でも，「こんなとき，どうしたらよいのかな？」「何を準備するとよいのかな？」　そんなみなさんからの質問にも答えていただける機会をもつことにしました！

「防災講話」　講師：特定非営利活動法人 災害救援レスキューアシスト 代表 中島 武志さん

1月31日（金）：3～4時間目…2年生　　5～6時間目…4～6年生

※他の学年には，別の機会で講話の内容を伝えていきます。
※急なお知らせではありますが，保護者の参加もどうぞ！

２年生，４～６年生からいろいろな質問を出してもらいました。すごくたくさんの質問が集まったため，すべてに答えていただくには時間が足りないかと思いますので，今後学級等で伝えていきたいと思います。

また，その講話のときに，みなさんに作ってもらった「アシスト瓦」を被災地で使っていただくことができるようにお渡しします。

作っている様子は，裏を見てね！

6/28
発行

いのち を守ろう！

昨年度の６月１８日には「大阪北部地震」があり，そのちょうど１年後の今月１８日，新潟・山形で最高震度６強の地震が起きました。けが人が出たり被害を受けたりしましたが，幸いにも停電は早く解消され，お店も営業できている・もしくは早くに営業再開できるところが多いようでした。しかし，再度大きな地震が起こる可能性もあり，まだまだ心配は続きます。そして，そんな地震…さらに大きな地震が，いつこの地域で起こるかはわかりません。

地震が起こったら，どうしたらよかったかな？

「緊急地震速報」って？

強いゆれがまもなく来ることを，テレビやラジオ，携帯電話や防災無線などを通して事前に知らせてくれる警報です。

緊急地震速報を見聞きしたら…

- 屋内の場合…机やテーブルの下に入り頭を守る。
- 屋外の場合…ブロックべいや電柱からはなれる。
- エレベーターに乗っている場合…全部の階のボタンを押し，ドアが開いた階ですぐに降りる。

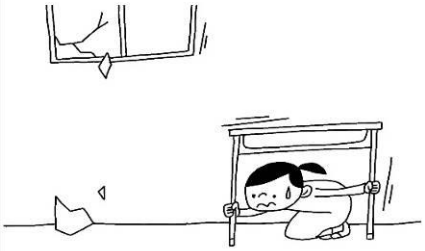
「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所をすばやく考え，避難!!

そのためには，ふだんから自分の家や学校，出かけた先などで「上から落ちてくるものは？」「倒れてくるものは？」「移動してくるものは？」とパッと考えられるようにしておくことも大切です。また，家の中の倒れてきそうなものを固定したり，移動させられるものも使用しないときは動かないようにしておいたりすることも大切な「備え」です。

地しんが起きたとき　校内にいたら

教室にいるときは、窓ガラスからはなれて、机の下にもぐり、机の足の部分をにぎって、ゆれがおさまるのを待ちます。

体育館やろう下にいるときは、照明や窓ガラスからはなれ、頭を手でおおい、低い姿勢になって、ゆれがおさまるまで待ちましょう。



地しんが起きたとき　家の中にいたら

まずは、頭を守ることが大切です。じょうぶな机やテーブルが近くにあるときは、すぐに下にもぐりましょう。

近くにじょうぶな机がないときは、

- 照明などの上から落ちる危険があるもの
- 本だななどのたおれる危険があるもの
- 車輪がついていて、動きやすいもの

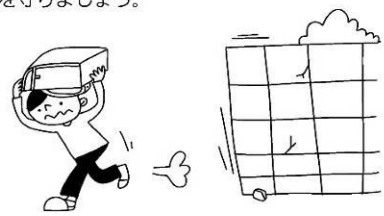
からはなれ、ゆれがおさまるまでは、低い姿勢で、まくらやクッション、厚い本などで頭部を守りましょう。

地しんが起きたとき　屋外にいたら

ブロックべいや自動はん売機は、地しんでたおれる危険があります。

また、電柱や電線はたおれたり、感電したりする危険があり、ビルの真下は、看板や窓ガラスが落ちてくる危険があります。

これらのものからはすぐにはなれ、ゆれがおさまるまで、低い姿勢で、かばんなどで頭を守りましょう。



★たかとみじどうかん　ぎょうじ★　５月２５日(土)・６月１日(土)に実施されました！

「ぼうさい探検隊」になって，ぼうさいマップを作ろう！

みんなの住むまちは，「自然災害が起きたとき，安全かな？」と考えながら，地域の方といっしょに『ぼうさい探検隊』として探検しました。「これは危ないね」「これも壊れるかも」などと話しながら歩くことで，危険なものや場所がたくさんあることに気づくことができました。そして，探検で見つけたことを「防災マップ」にまとめ，コンクールに出しました。探検中に，共和町の防災倉庫の中を見せていただき，災害に備えることについても少し考えることができました。保健室前にも探検の様子や防災倉庫の写真を掲示してあるので，見てくださいね！

↑共和町の防災倉庫

学校名	函南町立東小学校
担当教員名	髙口　涼

活動のテーマ	減災・防災意識と実践力の高い子どもの育成～地域連携及び特別支援教育を視野に～
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間、道徳科、特別活動　）
活動に参加した児童生徒数	４・５・６学年（　３４６人　）
活動に携わった教員数	４５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	３００　人【保護者・地域住民・その他（　函南町役場・東部庁舎・自衛隊　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月５日　～　２０２０年３月２０日
想定した災害	地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂

１）活動の目的・ねらい　目的については、次の４点が挙げられる。

①南海トラフ地震をはじめ、静岡県の地域性として地震リスクが非常に高いことが挙げられる。地震リスクを自覚し、子どもたちにその対応を考える活動を通じて身に付ける点。

②「減災、防災」という視点から、自分の周りや地域の特色及び課題を捉える。

③　５年生は②でとらえた課題から対応策を考え、防災キャンプで実践し検証する。

④　③の実践を広く情報提供するとともに、次年度以降の継続的な活動として教育課程等に位置付ける。

活動を通してねらうことは次の２点に大別される。

（１）教職員の研修（・地震に関する知識と情報の拡充。　・教科指導等における指導方法についての研修。）

（２）児童への指導（・自分の命を守る行動の育成。　・常時の備えへの指導。）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

時期	対象	実践内容及び教科等	添付資料等の指示
4月8日	教員	教頭・教務・学年会議にて防災キャンプの日程を決定し、スケジュールを立てた。	
4月15日	全校	地震を想定した避難訓練。	
5月15日	全校	全校児童・保護者で地震・台風を想定した引き渡し訓練を実施	
7月18日	地域	地域防災会議を実施し、地域及び中学校区と協働し防災リスクについての認識を共有し、知識を高めた。	
7月～8月	児童	総合的な学習の時間において、防災、災害について学習した。	
9月	児童	防災キャンプに向けて避難所に関する学習、自助を主とした減災・防災についての学習や取組。	別添資料①
9月11、12日	児童 教員	福島県語り部佐藤トミ子氏よる講話。児童向け講話と教員向け講話に分けて実施。講話では、東日本大震災当時の福島県の様子や震災後の避難所経営の話、また、いかに日頃の備えが大切であるかという実体験からの講話であった。	
9月17日	児童	町役場総務課村上防災監講話では、実際に自分の住んでいる地域で災害が起きたときにはどのような避難行動や判断を行うことが大切かという講話があった。	
10月	児童 地域	防災キャンプの実施。起震車体験、静岡県専門職職員による講話、自衛隊による炊き出し、救命救急講習。 避難所生活体験。	別添資料② 別添資料③
11月	児童 地域	光の子ランド（校内行事）にて成果発表を行う。 5年生が中心となって自分たちの防災、減災学習の成果を地域、保護者等関係者に公開した。	別添資料④

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

活動や実践については、次の2点が挙げられる。

（1）とりわけ、自助に関する学習を多く設定したことである。「自分の身は自分で守る」ことのできる子供の育成を図り、調べ学習や、リスク管理・察知について時間をとり学習を展開した。【別添資料⑤】

（2）自分たちが学習したことを今度は学校全体、地域全体に発信することについて子供たち自身で考え、光の子ランドにて実践した。【別添資料⑥】

助成金の活用については、文献や講師招聘、文具と多岐項目にわたって活用した。その結果、継続的な活動が可能になるようその基礎を築ける教員の研修と子供たちの学習環境の整備を行うことができた。一人一冊の資料が、子供の調べ学習を豊かにした。防災キャンプで夜間完全消灯の中用便への移動にランタンのように電池で稼働するライトが必要であることを体験的に習得することができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本年度からの新規活動である「防災キャンプ」の成果として次の2点を挙げる。

（1）5年生が体験的な活動や専門家からの話から具体的に経験値を積んだことである。実際に避難所で用いる実物を借り避難所を設営したり、救急講習や自衛隊、起震車での体験をしたりと多くの外部講師や地域の方と関われたことは大きな成果である。

（2）その防災キャンプ実施の様子を間近に見た下学年や、光の子ランドで減災・防災について情報を発信している5年生に接した2年生が、減災・防災学習に強い関心を示す姿が担任や友達への言葉から見られたことは、学習を広げ、発信した5年生の姿があったとともに下学年の子供たちへの学習機会にもつながったと言える。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

学習が進むうちに、実際に被災した方や避難所経営の経験のある方の話を聞く機会もあった。故に、自分事として減災・防災の学習に取り組む姿が多く見られるようになった【変容】。特に今回は、本助成で講師を招聘する機会にも恵まれたので、より、自分事として学習する子供の変容が見られたと考えられる。

意欲的に「なぜ？」の問いを立て、自ら解を導こうとする主体的な態度の育成や、災害時に自分の身は自分で守ることのできる能力の育成ができた。【力】

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

防災キャンプの様子は、保護者、地域、報道機関に公開された。小学生でもできること、小学生にもできることを子供たちと共に考えようとする大人達の姿が見られた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

新規の事業である特性上、特に工夫した点や特筆すべき点として活動の継続性をどのように担保するかということである。具体的には、年間指導計画、行事計画に位置付け、意図的、計画的、継続的な学習活動がどの教員によっても展開できるように計画面で整えたことが工夫したり、特筆したりする点として述べられる。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

『気仙沼市防災学習シート』を参考にした防災学習や避難訓練と一緒に親子で学習できる教材開発である。

学校名	浜松市立富塚小学校
担当教員名	袴田　佳子

活動のテーマ	逃げる？待つ？「感じ、考え、自他の命を大切に行動する」富塚の子
主な教科領域等	教科領域（　理科、社会、特活　）
活動に参加した児童生徒数	第６学年（８６人）・第５学年（９２人）・１～４学年と発達学級（３４２人）
活動に携わった教員数	２６　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	６０　人【地域住民(３０人)・その他（　中学生（３０人）　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	２０１９年４月１１日　～　２０２０年３月１９日
想定した災害	地震　・津波・河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

学区は海からは６.５km と離れた市街地に位置し、津波想定区域内であるが浸水深５㎝と低いため、被災するという意識は高くない。地盤の強い台地部分と弱い埋め立て部分や川が入り組んでいるので自己判断して行動することが難しい。昨年、台風による大規模な停電を経験し、今までの想定以外の災害が起こることを知り、防災意識は高まった。このタイミングで被害想定を広げたり、自分たちができる準備を行ったり、避難訓練を行ったりし、教師の「減災に対する意識」と子供たちの「自分で命を守る意識」を高める。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

４月　・引き渡し訓練、PTA 会員に停電時休校について確認

７月　・４年生への防災授業(社会)

９月　・「津波が迫った時の避難場所」への避難訓練の実施(全校)

・学校停電時には、昇降口へ「休校」の表示をすることを決定

・５年生、６年生への防災授業１(防災マップ作り)

・３校合同(富塚中・富塚西小・富塚小)避難訓練、担当者打ち合わせ

・５年生、６年生への防災授業２(災害時行動イメージトレーニング:防災巻)

１０月　・３校合同避難訓練(富塚中生徒・自治会地域防災担当者参加)、停電時の情報伝達方法を児童・地域の連絡

１月　・校舎内の避難場所(３・４階)への避難訓練の実施

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・校舎内避難(３・４階)の計画を作成予定だったが、防災用具を保管する棚を購入できた。また、その棚に名簿や拡声器などを保管し、校内避難時に本部として活用できるように準備できた。

・３校合同防災訓練の時、中学生と小学生との関わり方について、選択肢を増やすことができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・気仙沼の被災当時や現状の写真を児童に見せることができ被災、復興についてのイメージをより鮮明にもたせることができるようになった。そのイメージが、②の防災マップ作りや防災巻(災害時行動イメージトレーニング)の学習時に、児童が自分の行動を考える際のヒントにできるようになった。

本校では、「３校合同防災訓練」を数年前から行っていたが、中学生が考えた危険個所を中学生から聞くだけでなく、小学生も校内での減災教育によって考えたことを生かして話し合うように改善できた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・防災マップを小グループで考える時、危険な経路・場所や安全な経路・場所を話し合うことができた。

・防災巻(災害時行動イメージトレーニング)を下校時を想定して行ったが、被災イメージがしっかりもてていたため、児童が主体的に、自分のできる行動を考えることができた。また、家族で相談した避難場所や備蓄品の確認、避難に役立つ登下校の携帯品についても、進んで行った子が見られた。また、有事には、身の回りの人とどのように命を守るか、人を手助けすることについても考えることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・火事、地震、津波については避難訓練を行っていた。「強い地震が起これば停電する・土砂崩れ・液状化なども起こる、交通がマヒして自動車が避難の妨げになる」「強い雨で学校の周囲の側溝の排水能力を超えた時には、校舎内に一時的に避難する」など、想定していること以上に富塚小の学区に即した被害が考えられることについての理解が先生方に広がった。また、そのため、校舎内避難についての計画を新たに考え、訓練することができた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・減災についての学習を、理科(６年:土地のつくりと変化、５年:天気と情報・流れる水のはたらき)や社会の学習(６年:災害復興の願いを実現する政治、４年:地震からくらしを守る)の学習と結び付け、主に教科の時間を使って行った。また、教科学習で学んだことを減災学習と結び付け、両者共に深めた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・児童に減災教育を行うことも大事だが、減災についての知識をもった教員を増やすことの大切さも感じた。特に、どの地域の学区でも生かせるように状況把握し、被災想定ができることが今後に役立つと感じた。実際に被災された学校関係者の講演を地域(３校合同避難訓練を行っているので、その中学校区３校で開くことができたらより良い)で開きたい。日ごろの児童への減災指導や本部の立ち上げ方、地域との協力体制について教員と地域の住民で聞き、今後につながる知識を深めたい。

７）その他（※特にあれば記述）

・熊本地震・北海道胆振東部地震・西日本豪雨などが発生した時、新聞社から報道写真を借り、校内で展示してきた。しかし、展示時期と地域公開日を調整することができず、保護者や地域住民まで十分に公開することはできなかった。報道写真は無償で借りることができるが、写真の総量が必要である。零話２年度ではあるが、助成金の残金を使い、学校公開日を含む日程で災害時の報道写真を借りたい。児童に対する減災教育に活用するほか、保護者や地域住民への啓発に活用する。

資料１<津波避難訓練>

本校から６００ｍ離れた、海抜３０ｍ越の公園まで、全校で避難する訓練の様子。

資料２<防災授業>

〇防災マップ作り・シミュレーション授業

資料３<３校合同防災訓練>

令和元年(2019年)10月26日（土曜日）

小中合同 防災訓練

中区 住民交え危険箇所チェック

地域の防災、防犯について話し合う児童や生徒ら＝浜松市中区の富塚小

浜松市中区の富塚小学校、富塚中学校、富塚西小学校の三校合同防災訓練が二十六日、合同で行われた。地域住民が地元の防災面について初めて参加した。

富塚小学校では、五、六年生約八十人が中庭に集まり、地域の住民と共に、地震や火災などの災害を想定した訓練に参加した。

住民は、地域ごとに分かれ、地図を広げながら、地震などの際に危険な箇所や、安全な場所などを話し合った。

「川が近くて危ない」「高い建物がない」「ここは地盤が弱い」などと意見を出し合った。

「富塚小学校の校庭は低い。地盤が弱く、地震などの際に、下校する児童の安全が心配だ」と、富塚小学校の佐野一郎校長。

「富塚小学校の校庭は、地盤が弱く、地震などの際に、下校する児童の安全が心配だ」と、富塚小学校の佐野一郎校長。

「地域の人と一緒に考えることが大切だ」と、富塚中学校の鈴木一郎校長。

「地域の人と一緒に考えることが大切だ」と、富塚中学校の鈴木一郎校長。

（浜松総局・佐藤大輔）

中日新聞

2019年(令和元年)10月26日(土曜日)

地域一体防災

小中合同訓練

富塚中学校

浜松市中区の富塚小学校、富塚中学校、富塚西小学校の三校合同防災訓練が二十六日、合同で行われた。地域住民が地元の防災面について初めて参加した。

富塚小学校では、五、六年生約八十人が中庭に集まり、地域の住民と共に、地震や火災などの災害を想定した訓練に参加した。

住民は、地域ごとに分かれ、地図を広げながら、地震などの際に危険な箇所や、安全な場所などを話し合った。

「川が近くて危ない」「高い建物がない」「ここは地盤が弱い」などと意見を出し合った。

「富塚小学校の校庭は、地盤が弱く、地震などの際に、下校する児童の安全が心配だ」と、富塚小学校の佐野一郎校長。

「地域の人と一緒に考えることが大切だ」と、富塚中学校の鈴木一郎校長。

（浜松総局・佐藤大輔）

訓練時、中学生と小学生、地域の方が話し合う様子　　３校合同防災訓練について報道する新聞記事

資料４<校舎内避難訓練>

校舎の３・４階に全校児童が避難。　　４階に全校児童が避難する場合についても訓練。

学校名	大阪市立堀江小学校
担当教員名	原口　拓人

活動のテーマ	景観学習・防災学習フォーラムを開こう
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
活動に参加した児童生徒数	４学年（　１９５人　）
活動に携わった教員数	９　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	約４０　人　【保護者・地域住民)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	２０１９年１１月　～　２０１９年１２月
想定した災害	地震　・　津波

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・津波・高潮ステーションへの社会見学や西区役所・警察署の方の講話、地域の防災部長へのインタビューなど今までの防災に関する学習に加え、調べ学習を通してさらに学びを深める。

・調べたことをまとめ、フォーラムで発表し、地域や各家庭に防災の大切さを伝える。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

時	主な指導内容
1	○「大阪北部地震」「東日本大震災」など過去に起きた地震について振り返る。 ・地震発生時、どこにいたか。どのように行動したか振り返り、交流する。 ・被災地の被害と復興の様子を知る。
2	○津波・高潮ステーションに行く。 ・東日本大震災や非常持ち出しバッグなどの展示 ・津波災害体験シアター（ダイナキューブ）　など ・津波・高潮ステーションで学んだことについて、個人で新聞にまとめる。(国語科の学習)
3～8	○地震や津波、備えについて調べる。 ・地域の防災部長へのインタビュー ・資料やインターネットで地震や津波の発生する仕組みや日々の備え、避難行動などについて調べたことをグループで壁新聞にまとめる。 ・地震や津波、備えについて自分たちが伝えたいことをグループで考え、プレゼンテーションを作成する。
9	○防災フォーラムでまとめたことを発表し、地域や家庭に啓発する。 ・地域の防災部長、区役所、警察署の方の講話 ・各学級の発表（プレゼンテーション、劇） ・壁新聞や各学級の発表内容などについて、保護者や地域の方々とグループディスカッション

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・防災学習フォーラムを通して地域や保護者との連携を強化。

・アルファ化米を使用した炊き出し体験

・避難訓練の充実

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・児童に実際に災害が起きたときに自ら考えて動けるようになるために、実践的なアルファ化米を使用した炊き出し体験を取り入れることで、実践的力が身についた。

・連携、つながりという面では、保護者との連携の充実を図った。防災フォーラムは児童が自分たちの学習を深化させるだけでなく、地域の防災リーダーや地域の各機関との連携を深めた。また、減災に無関心であった保護者にとっても災害が起きたときのことを真剣に考える機会となった。

・教員の危機意識向上という面においては、避難訓練で実施内容（行方不明者を出すなど）を事前に知らせることなく実施することで、パニックを起こし様々な面で反省点が挙がった。より実際の災害時に近づけることで、教員の危機意識が向上した。また、教員の意識が向上することで、児童の意識も向上し学校の減災意識が向上した。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・調べ学習を通して、地震や津波の発生する仕組みや過去に起きた震災の様子など地震に関する知識が身についた。

・地震発生時、津波警報発令時にとる命を守るための避難行動を意識しながら避難訓練に取り組むようになった。

・非常持ち出しバッグの中身について考えることで、家庭でもバッグを用意するなど、備えに対する意識が上がった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・防災学習フォーラムを見学し、改めて備えの大切さがわかり、家庭での備えを見直す良い機会となった。

・地域（区役所や警察署など）も防災フォーラムに参加してもらったことで、児童と地域とのつながりが深まった。さらに地域の視点からの減災について話をしてもらうことで、児童の考えに広がりが見えた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・地域、保護者との連携

・タブレットを使用した調べ学習

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・地域の方々、保護者の方々だけでなく、実際に震災や津波の被害に遭われた方の講話を防災学習フォーラムで聞くことが可能であれば希望したい。

・避難訓練１つでもまだまだ改善すべき点は多い。より学校としての減災教育を深めていく必要がある。

・つながりという面では、小学校と中学校との連携が薄い。中学校でさらに減災教育を深めていけるように小学校から働きかけていく必要がある。

学校名	大阪府八尾市立北山本小学校
担当教員名	爲房　佳祐

活動のテーマ	子どもから拡げる日常的な防災教育
主な教科領域等	教科領域（　全領域　）
活動に参加した児童生徒数	１～６学年（　１７３人　）
活動に携わった教員数	２５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	４５０　人【保護者・地域住民】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月８日　～　２０２０年１月３１日
想定した災害	地震・台風・河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

阪神淡路大震災や、東日本、熊本地震等誰もが予期できなかった災害が起こっている。さらに、昨今では、南海トラフ地震が予期されている。その中で、本校区に置いては、若者や保護者は校区外に仕事に行き、昼間は高齢者と児童だけが在住している状態にもなっている。また、本校区には治水緑地公園がある。日常的には、人々の憩いの場であるが、いざ台風やゲリラ豪雨で山から流れ出る水が恩智川を通じて第 2 寝屋川に流れ込む。その直前に治水緑地があり一時的に水が溜め込まれる。2018 年の台風 21 号では、治水緑地公園の水位が危険水位まで上がっていた。台風等で、避難所になる通学路が使えなくなったり、災害内容によっては、避難する所を変更したりしなければならない。

いざという時に備えて、想定外を少しでも想定内にしておくために日常的に学んだことを継続していく方法を考え、学校教育の一環とした。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

5 月・・地域一斉避難訓練

避難サイレン（学校・地域）9:00 スタート、

学校・運動場に全員避難、地域・一時避難所である公園に集合、

学校・6 年生が一時避難所に向かい出発、その後、学校体育館まで誘導訓練

1～5 年生は、煙中体験・水消火器訓練・バケツリレー体験・消防署の方の講和（順次）

6 年生、体育館誘導後、1～5 年生に合流

地域の方は、体育館避難後、消防団の方の話。

6 年生と地域の方で仮設トイレ組み立て体験。

1～6 年生は、11 時に教室に戻り、振り返りとまとめ。

5 月・・6 年生　将来のための自分探しの学習（自学）　テーマ：地震

社会の出来事をとらえての防災･減災教育（朝の会・終わりの会を使って）

自然や人による災害

どうして地震はおこる？

9 月・・6 年生　将来のための自分探しの学習（自学）　テーマ：自然災害

千葉県での台風で出た被害

九州集中豪雨

集中豪雨はどうしておこる

10 月・・4 年生　東大阪防災センターの見学

消防隊員のお仕事・地震にそなえて

消防隊員のお仕事について

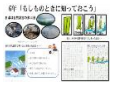
さい害とぼうさいについて

10 月・・市民スポーツ祭（小学校区家庭対象　学校と地域で企画）

参加者全員による防災リレー（担架づくり）

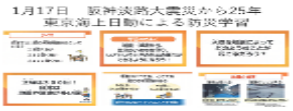
いざという時に備えて、速さより、正確さを！　子どもから高齢者まで

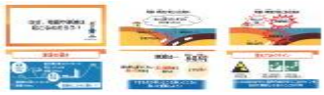
11 月・・日曜参観　自分探しの学習　（テーマ　防災）プレゼン発表会



子どもから大人へひろげる防災教育

1 月 17 日・・**阪神淡路大震災から 25 年**　（東京海上日動による出前防災学習）





3）<u>9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。</u>

・防災教育として避難訓練等を行なっていたが、「想定外を想定内」にまた、「自助」という視点で児童に教育するために教職員の共通理解がはかれた。

・自然災害のニュースがあるたびに児童が自分ごととして考え、興味を持ち自学にいかせるようになってきた。

・地域と連携して、市民スポーツ祭の中に防災プログラムを取り入れることができた。

・日曜参観での児童の発表会に「防災」をテーマに児童が調べたことを、保護者の方に伝え、意識付けさせることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・防災教育として受け身だけではなく、自ら視点をもって調べる、体験することが大切であると感じた。

・「想定外を想定内に」をテーマに実践してきたつもりではあるが、いざというときにどれだけ身についているのかもう少し実感できる教育も考えていけないと思う。

・子どもから拡げる防災教育を行ったが、地域全体で日常的に高め合える工夫も必要だと思う。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・身近におこる自然災害に目を向け、調べてみようとする資質が育ってきた。

・それぞれの自然災害によって、自助するためにどのようにすればいいのか考える資質が少しついてきた。

・非常時に備え、どのようなものが必要となるか考える態度が身についてきた。

・普段当たり前に思っていることが、災害を受けると当たり前ではなくなることに気付きを持てた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・いろいろな場面を想定して訓練や体験をすることで、身についていくと感じた。(教師)

・児童が進んで調べてくることに驚いた。そのことを、学級指導にいかせる場が増えた。(教師)

・日曜参観での子どもの発表を聞き、改めて防災について考えることができた。(保護者)

・日常的に意識して備蓄しておく大切さを感じた。(保護者)

・地域からは、昼間に災害が起こると、地域には高齢者と子どもだけになるから、今後も一斉に避難訓練をするとともに、体験した子どもを増やしていってほしい。(地域)

・地域とともに避難訓練等を実施することで、近隣に住んでいる人の顔、名前を覚えて行くことができるとともに、日常の安全にもつながってきた。(地域)

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・自学に防災を取り入れるためにも、社会で起きている事象をタイムリーに学級担任から自分事と捉えられるよう学級指導に取り入れる。(校内の共通理解)

・地域とともに行う防災教育では、企画段階から意図を持って会議に臨むとともに、日常的に地域の方々と協力した取り組みを進める。

・学校が避難所として機能するだけでなく、備蓄倉庫に中に何が入っているのか、仮設トイレの設置組立て方法等一部の人だけでなく、共有することができた。

・日曜参観で児童の発表を取り入れたが、児童の学習に対しての意欲だけではなく、いざというときに備えて各家庭が知っておくべき内容を精選しながら発表者を決めていった。

・地域の方と協力して行うことにより、通学路等での安全面に対する意識が高まってきた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・単発的な取組でなく、次年度以降も取組が継続されるよう考えていく。

・取組がマンネリ化しないように、地域の中でも対象（高齢者・ひとり暮らし・障がい者等）を変えていくことにより実施していく。

・自分たちの住んでいる所は安全だとの過信から、地震では、水害では、といった災害に備えた意識の必要性や継続性について持続させていく。

・経験・体験した児童を年々増やしていくことや、人事異動等で入れ変わる教職員と地域の結びつき、連携が今後の課題ともなる。

学校名	奈良市立鶴舞小学校
担当教員名	信田　和則

活動のテーマ	地域との豊かなつながりのなかで、ＥＳＤの理念に基づく防災教育を実践することを通して、『自ら学び考え、高め合う子』を育成する。
主な教科領域等	教科領域（　生活科、総合的な学習の時間、理科、社会、国語、特別活動　）
活動に参加した児童生徒数	全学年（　３１３人　）
活動に携わった教員数	２２　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２６５　人【保護者（２４５人）・地域住民（２０人）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年5月８日　～　２０２０年2月２８日
想定する災害	地震

活動報告

１）活動の目的・ねらい

活動の目的

・避難所キッズスタッフとして、支援する側としての自覚と責任を持ち、進んで人のために役立とうとする意欲を育てる。

・キャリア教育の一貫として、避難所キッズスタッフとしての活動を地域の方と協働することを通して、自らの役割や地域とのつながりを考える。

・「ぼうけんの森」の間伐材が災害時の薪燃料として活用できることを知り、ぼうけんの森の整備活動が環境を守るだけでなく、防災にもつながっていることを理解する。

・防災教育を中心に環境教育・世界遺産学習・人権教育・キャリア教育などがＥＳＤの教育理念により、連続性を持った取組となるようにこれまでの教育活動を地域との協働に基づき再構築する。

活動のねらい

・ＥＳＤの教育理念に基づく教育活動として、防災教育を通して、命の大切さを学び、進んで地域に貢献しようとする意欲を高め、『自ら学び考え、高め合う子』を育成する。このことによって、変化の激しい時代に生きる子どもたちは、将来にわたって役立つ力を身につける。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

万が一の災害時に本校は地域の避難所となる。避難された地域住民の方は、学校のどこに何があるかなど、学校のことをあまり存じてない方も多くいらっしゃると予想さる。そこで、学校のことを一番知っているのは、児童ではないかという点に着目し、避難所が開設されたとき、児童が支援される側ではなく、支援する側になることで避難所の運営がよりスムーズにできるのではないだろうかという仮説を立て、この仮説に基づき、コミュニティ・スクールとして、地域自主防災・防犯協議会の方々と協働し、平成２９年度から防災教育に取り組みこととなった。

校長を中心に教員が避難所開設訓練の計画・実施に関わると共に、具体的に支援者のニーズに応じた避難場所をどのように提供するかを事前協議し、地域との協働の第一歩とした。これらの活動の中で、コミュニティ・スクール学校運営協議会での議論を経て、高学年の児童に避難所キッズスタッフとして一定の役割を果たすことを自覚できるように防災教育を推進することの重要性を地域・保護者・学校のそれぞれの代表者の間で確認することができた。

地域自主防災・防犯協議会の方をゲスト・ティーチャーとしてお迎えし、減災・防災意識の大切さについ

て教えていただくとともに、4 年生では、地震時にまず自らの身を守る行動をとることの大切さを「ダンゴムシのポーズ」を中心に防災士の指導により学習した。

5 年生では、避難所開設時に児童が支援される側ではなく、支援する側に立つことにより、大人たちは本当に支援を必要としている人への支援により力を入れることが可能となること、また災害により被害により心の元気をなくしている方にとっては児童が、キッズスタッフとして活動している姿が励みとなることなどを子どもたちは学びとった。キッズスタッフとして、お手伝いバンダナに支援できる内容を考えるという学習では、まず一人一人が自らできること・したいことを考え、そのあと 4 人グループでどのような意見が出たかを交流し、最終的に自分ができる支援をバンダナにはった養生テープに書き込んだ。このお手伝いバンダナは、連合自治会が避難所用品として自治会予算で購入してくださり、学校が預からせていただいている。児童は、お手伝いバンダナをまくことによって避難所キッズスタッフとして活動することを具体的にイメージできた。また、クロスロードゲームを取り入れ、実際の避難所で起きると思われる様々な問題について、2 つの判断すべき事例（「ペットの犬をつれてきた避難者を受け入れるかどうか。」「避難者が 200 人いるがおにぎりが 100 個しか届かなかった。おにぎりを配るべきか。」）について班ごとに判断し、その理由を考えた。

また、教員研修会で学んだ成果をもとに「登下校時に大地震が発生したときに、登校班のみんなをどこに誘導するか。」を考え、校区の避難先を地図に記す学習をおこなった。このことにより、大地震の発生時の対応を自分事として、高学年の責任として避難行動がとれるように意識を高めることにした。

6 年生では、昨年度の避難所キッズスタッフの学習を基盤として、実際に災害弱者となる「車いす利用者」「視覚障碍者」「高齢者」の支援の具体策を考えるために、「車いす体験」「アイマスク体験」「高齢者の身体模擬体験」を通して支援される側の感覚を体験した。その学習を基盤に助成金で購入させていただいた防災ヘルメットをかぶり、たてわり班の班長として下級生の安全避難誘導、安全確認をどのように行うかをシミュレーションした。また防災ヘルメットをかぶりながら、クロスロードゲームを行うことでよりリアルに避難所での的確な判断の必要性とともにもしもの時に実際に避難所を運営されている大人の活動を理解し協力できる力をみにつけられるように指導した。

これらの取組をホームページや PTA 学級懇談会、コミュニティ・スクール学校運営協議会、連合自治会定例会などを通して積極的に発信してきた。

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

海がない奈良県、これまで大きな自信を経験したことがない奈良県に住んでいるため、大人も子どもも震災のことについてはどことなく他人事のような感覚が実際にあった。9 月の研修会に参加した教員が現地で学んできた報告を受け、改めて平時からの備えが大切であることがわかるとともに、いかにして自分事として捉えることができるように指導するかが課題であることが浮かび上がった。

そこで、「大切なものを守る」というキーワードをもとに、「大切な自分・家族・友達を守る」「高学年として、たてわり班のメンバー・登校班のメンバーを守る」「避難所キッズスタッフとして地域の方を守る」という 3 つのテーマに基づき本校の減災教育を推進することにした。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・クロスロードゲームの導入
・これまで 5 年生と 6 年生にだけにおこなっていた地区自主防災・防犯協議会との協働による防災士からの減災教育を 4 年生にもおこなうことができた。
・通学路避難先マップを完成させることができた。
・本校の減災教育の取組を保護者・地域に発信することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・座学だけでなく体験的活動を通して、減災・防災について自分のごととしてより深く学習することができた。
・地域との協働を通して学校の教育活動への理解が進み、より積極的に参画していただいた結果、同時に子どもたちにとっては自分たちをこれだけたくさんの地域の大人が見守ってくれているとの理解が深まった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・子どもたちが、積極的に減災・防災について取り組み、その成果を発信することによって、地保護者や地域全体の減災・防災意識が高まった。
・地域と共に新しい教育活動に取り組むことで、コミュニティ・スクールとしての役割が明確となり、地域とともにある学校づくりをより推進することができ、地区自主防災・防犯協議会との協働がより効果的な、ものとなった。
・教員自身も大地震での対応について自分事して捉え、命を守るために日ごろからどのように指導すべきかを考えるようになった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・クロスロードゲームの導入
・これまで 5 年生と 6 年生にだけにおこなっていた地区自主防災・防犯協議会との協働による減災教育を 4 年生にもおこなう。
・通学路避難先マップの完成

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・連合自治会主催に避難所開設訓練への保護者・児童の参加率をどのように上げるか。
・学校だけでなく地域ぐるみの減災教育をコミュニティ・学校スクールとしてどのように構築していくか。

7）その他（※特にあれば記述）

・新型コロナウィルスの感染拡大予防のために、奈良市の指針に基づき 2 月の活動報告会に参加することができませんでした。とても残念です。それだけにできればこのプログラムに次年度も参加させていただきたく思っています。

・4 年生の防災士による減災教育の様子

ダンゴムシのポーズ

落下物について学ぶ

地震後の火災による煙から身を守る

ブルーシートを津波に見立ててイメージする

・5年生の減災教育の様子

地区自主防災・防犯協議会の方が講師

クロスロードゲームでの話し合い

避難所キッズスタッフのバンダナ

支援内容の発表

・6年生の減災教育の様子

車いす体験～マットをぬかるみと想定

車いす体験～踏切版を坂道と想定

アイマスク体験～食事を摂る疑似体験

高齢者疑似体験～関節が動きにくくなるギブスを装着して身体の動きにくさを体験

助成金で購入した防災ヘルメットをかぶり、クロスロードゲームを行う。

学校名	熊野町立熊野第一小学校
担当教員名	中村　祐哉

活動のテーマ	地域の減災レガシー構築のための『総合的な学習の時間』におけるカリキュラムづくり
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間・社会科　）
活動に参加した児童生徒数	小学校第５学年（　８６人　）
活動に携わった教員数	１１　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	８８　人　【保護者・地域住民・その他（　自治体役場危機管理課職員　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ，人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１５日　～　２０２０年３月１５日
想定した災害	河川氾濫・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①「被災当事者」でありながら「復興当事者」でもあるという情意的葛藤から「平成 30 年７月豪雨災害」の被災地で生きる子どもたちと，災害に対峙できるこれからのまちづくりを子どもたち自身が地域の人々とのつながりの中から，その学びを深め，行動・発信につなげる減災教育を推進していきたいと考えた。

②「被災当事者」である子どもたちが，実際の被災経験をもとに，具体的に郷土の減災と防災力向上について復興に携わる人々と関わる中で思考を深め，自分自身が「復興当事者」でもあることに気づき，自分のこととして考えを発信する教育実践である。（児童における実践の特徴）

③今後，地域の「被災経験伝承者」となる子どもたちが，復興に携わる人々とつながる中で，まちの減災について多角的に学び，多面的に考え，発信・行動し続けていくことにヴィジョンをおいた「減災レガシー構築のためのカリキュラム」を作成・実施した教育実践である。（教師における実践の特徴）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

本活動は，第５学年の「総合的な学習の時間」で取り組んできた防災・減災教育に加え，カリキュラムマネジメントによって社会科の小単元「自然災害とともに生きる」とつなぎ，地域の減災レガシー構築のためのカリキュラムづくりを目的とした実践である。そうした中，昨年度「平成 30 年 7 月豪雨災害」が本校の位置する熊野町で発生した。そこで，急遽これまでの防災・減災カリキュラムを見直すことにした。そのねらいは，子どもたちに「被災当事者」，「復興当事者」，「被災経験伝承者」としての３つの視点をもたせることで，被災経験を単に後世に伝えるだけに留めない点にある。経験を「語り継ぐ」のではなく「語りつなぐ」という点から，復興に携わる多くの人々と関わる中で，災害に強いまちづくりの担い手としての自覚をもたせ，「今できること」「これからできること」を多角的に考え，多面的な視野をもって行動・発信させたいと考えた。実践内容としては「総合的な学習の時間」で，熊野町の災害について調査し，前述したねらいをもとに自分たちにできることを考えさせ，実際に行動・発信させた。「社会科」では，近年日本各地で頻発する自然災害への取組から，「被災当事者」と「復興当事者」の視点において共通項を見付けさせ，「災害に強いまちづくり」に活かすことができるか等，その関連性に着眼し，「総合的な学習の時間」との相関性をもたせながら思考の深まりを追求した。本実践は，子どもたちが漠然と「災害に強いまちづくり」を構想するものではなく，実際の被災経験から「当事者性」ではなく「被災当事者として」の切迫感の中で情意的な高まりを整理していきながら，「復興当事者」でもあることを認識させていく活動である。子どもたちの「大切な人の命を守る」という想いの強さから紡がれた主体的な行動や発信こそ，家族はもちろん多くの熊野町住民の心を揺さぶり，巻き込み，大きな渦となってまちの復興を支えるものとなっていくと考えている。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

自校の実践に活かしたこと・活動の変更・改善点については，２）にて，前述している通りである。本プログラムの助成金によって，専門家等外部人材をカリキュラム内で幅広く活用することが可能となった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

すでに１学期より進行していた「総合的な学習の時間」における防災・減災教育活動だが，本プログラムに参加後，接続中学校の該当授業参観や研究協議を行うなど積極的に連携を図った。まだまだ黎明期の段階ではあるが，今後更に自治体内の小・中学校の防災・減災教育連携を図っていく上での礎を構築することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり，どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本活動を通じて，持続可能な社会の形成者として育んだ資質として，ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み（国立教育政策研究所教育課程研究センター）に示されている「未来像を予想して，計画を立てる力」と「つながりを尊重する態度」が当てはまると考えた。人々の社会生活における復興とは，被災前のまちの状態に戻すことではない。実際に，失われた人命や人々の記憶に残るまちの姿は還らない。子どもたちは，学習活動を進める中で，当初「被災当事者」という視点を強くもっていた。

しかし，復興に携わる人々とつながる中で，「復興当事者」でもあることを徐々に認識し，災害に強いこれからの新しいまちづくりについて前述した復興に対する価値観をもって，新たな郷土の姿を想像し，自らできることを考える実践を進めていくことができた。

③教師や保護者，地域，関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本実践は，テレビ局取材・新聞報道・教科教育誌等でも取り上げられ，保護者・地域・関係機関等にも広く発信することができた。また，第６回広島県ユネスコ ESD 大賞（2019）小・中学校部門受賞実践となった。

５）工夫した点，実践の特徴・特筆すべき点

本実践の特徴としては，このカリキュラムの実施内容が，該当学年授業時間のみに留まるのではなく，継続的・横断的・非時限的に取組むことができた点である。引き続き，これら実施カリキュラムにおける教育効果についても，接続中学校の防災・減災教育担当者と共に，学習後の子どもたちを追いながら検証していきたい。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

本稿で論じた教育実践から，実際に具体的な行動に移し続けていくことのできる子どもたちの姿を期待する。実際に本校減災教育のカリキュラムを履修した卒業生は，「平成 30 年７月豪雨災害」災害発生後に開設された避難所において，パーテーションの組み立て作業などの初期設営準備を自発的に行い，地域を支える行動に取組むことができている。今後の展望と課題としては，これらの学びを中学校へと接続していくことである。すでに接続学区中学校でも，「総合的な学習の時間」の中で減災教育を取り入れているが，小学校での学びと完全に系統性をもたせたものとはなっていない実情がある。そのため，小・中連携を密に行い，今回の被災経験から，９年間という学びを見据えた系統性をもった減災教育カリキュラム作成に動き始めていきたい。

７）その他（※特にあれば記述）

補足資料（総合的な学習の時間シラバス・学習指導案・授業実践板書・実践報告スライド）四点

平成31年度・令和元年度 **総合的な学習の時間 シラバス** （広島県熊野町立熊野第一小学校）

（第5学年の目標）

（課題を決める力）	自分を取り巻く環境から疑問を見つけ，想いや願いを明確にした課題を設定することができる。
（課題を解決する力）	課題解決に向けて適切な方法で情報を集め，必要な情報を選択することができる。 収集した情報を整理・分析し，話し合いを通して自分の考えを深め，広げることができる。
（課題を伝える力）	まとめたことを相手や目的に合わせ，効果的な方法で伝えきることができる。
（成長に気付く力）	学習を通して，今の自分の生活や考え方を見つめ直し，自分や熊野町の将来のイメージをもったり， 今の自分にできることを考えたりすることができる。
（共に学ぶ力）	自分と防災・減災とのつながりを意識し，積極的に友達と関わりながら学習することができる。

月	学習すること	時数	学習のねらい
4月 5月 6月 7月	（災害について知ろう） ・広島県の過去の災害（H30西日本豪雨）について調べる。 ・西日本豪雨後の家族の意識調査をするために，アンケートを作成する。 ・アンケート結果をもとに，課題を設定する。 ・熊野町の防災について調べる。 ・防災施設の見学や役場の人の話を聞く。（避難所体験，応急手当，非常食作り，備蓄倉庫・貯水槽等見学）［連携］ ・課題にあった方法を選んで情報を分析し，新聞等にまとめ，交流する。 ［相互］［公平］ （江田島の自然から減災を学ぼう） ・国立江田島青少年交流の家での野外防災活動について調べ，実際の活動に生かす。	（20） 2 4 11 3	・広島県の災害の記録を振返ることで，自分を取り巻く防災に疑問をもち，調べてみようという意欲を高めていく。 ・アンケートの内容を児童が考え，アンケートで集まった情報を整理・分析する中で課題を設定する。 ・現地調査や役場の人等から話を聞くなどして，H30西日本豪雨の時の避難所の状況，熊野町の人たちにどのようなことを知ってほしいと思っているかなどの情報を収集する。<批判><未来> ・様々な体験活動，情報収集の活動を通して学んだことを，課題解決に向けて，誰にどのような情報を発信すればよいか考え表現する。<伝達><協力> ・江田島市での野外防災活動について調べる方法や内容を考える。<持続可能な未来の創造> ・野外防災活動内容の特徴を調べる。<伝達>
9月 10月 11月 12月	・野外活動を通じて学んだことをまとめ，在校生や保護者に伝える。 ★（伝えよう！命の守り方） ・様々な災害時のボランティア活動・避難所の情報を集める。 ・これまでの体験活動と収集した情報を基に，保護者や地域の方にどのような内容をどんな方法で発信すればよいか検討し，学習発表会で発信する。 ・自分の住む地域の危険箇所について考える。場所を確認する。 ・課題をもち，調べる方法を考える。 ・ハザードマップに載せる内容について，グループごとに決定し，ハザードマップを作成する。	（34） 7 7 14 2 2 2	・国立江田島青少年交流の家での野外防災活動についてまとめる。 ・体験したことや学んだことから伝える内容を選び，発表する方法を考える。 ・課題解決のための学習や方法などの見通しをもち，それに取り組む。 ・課題追究のために適した方法を出し合う。 ・課題について調べ，情報を交換する。<伝達><協力> ・知らせたい内容と相手を決め，相手に応じてまとめる。<参加><多面> ・自分たちの命を守るために必要なことや周囲のさまざまな人たちの働きに気付く。 ・自分たちが考えたことを家庭で実際に確かめてみる。<参加>
1月 2月 3月	（命を守るために） ・ハザードマップを使って，町内を歩いたり調べたりする中ででた疑問をもとに，学習したことを実際に確かめ課題を追究する。 ・熊野町で災害が起きたときのことを考え自分たちが今できることを考える。 ・発表方法を考え，まとめ，参観日で保護者に発信し，学年で交流し自分にできることを考える。［連携］［責任］	（16） 9 7	・家庭で確かめたことをもとに，自分たちが考えた内容を改善したり，付け足したりしていく。<協力> ・防災に対する取り組みを振返り，自分の生活にどう生かしていくか考え，伝える。<未来><参加>

［　］持続可能な社会づくりの構成概念

＜　＞ESDで重視する能力・態度

評価方法	活動への取り組み・学習カード・成果物

1学期 20時間　2学期 34時間　3学期 16時間　合計70時間

熊野町学力向上事業
『総合的な学習の時間』部会

小学校第５学年「防災について知ろう」

本授業の事後協議会における協議事項

・『総合的な学習の時間』なのか？それとも『社会科』なのか？

・本時は「分析」の学習として適切なのか？

・本時の「分析」をもって児童の「三助」の捉えに変容があったのか？

令熊野町立熊野第一小学校　第５学年２組
教諭　中村 祐哉

小学校第５学年　　『総合的な学習の時間』学習指導案
単元名：「災害について知ろう」

本研究授業実践における提案テーマ

「これは『総合的な学習の時間』ですか？『社会科』ですか？」
～「教科横断的な指導」を改めて問い直す！～

『総合的な学習の時間』の更なる可能性と，教科教育『社会科』でしかできこととは？

指導者　熊野町立熊野第一小学校
教諭　中村 祐哉

1　日　　時　令和元年６月 25 日（火）第５校時
2　場　　所　５年２組教室
3　学年・学級　第５学年２組（男子 16 名・女子 13 名／計 29 名）

単元について

本校第５学年の児童は，『総合的な学習の時間』において，防災・減災教育に取り組んでいる。本単元は，『総合的な学習の時間』で，年間 60 時間計上されている防災・減災教育の入り口となる 20 時間である。平成 30 年７月豪雨を経験した本校児童は，被災当事者として学習を進めていくことになる。防災・減災について小・中連携を踏まえながら，持続可能な学びを展開していくためには，自ら問題を発見し，調査結果をまとめ，発信し，その上で，教師や児童同士の評価を経て，更に調査を継続していくなど，学校内外の人々との連携も図られながら，児童自身の主体的な学びが必然となってくる。この学びのサイクルは『総合的な学習の時間』の単元設定として適切であると考えている。また，本単元を通じて，熊野町の防災・減災対策についての未来を思考する次世代の担い手やつなぎ手を育むことはもとより，児童の学校での学びを通じて，現段階における直近的な家庭や地域の防災・減災対策を促進するという副次的波及効果も期待できると考えられる。

児童の実態

次に提示する表は，今年度５月に本学級で行った『総合的な学習の時間』と『社会科』の学習に関する児童の意識調査アンケートの結果一覧である。

質問内容	肯定的回答（人）		否定的回答（人）	
	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
(1)『総合的な学習の時間』の学びは愉しい。（関心がある）	24	4	1	0
(2)『社会科』の学びは愉しい。（関心がある）	25	4	0	0
(3)授業における予想の時間では，今まで学んできたことを使って予想をすることが多い。	16	12	1	0
(4)授業における資料で予想を確かめる時間では，情報を，比べたり（比較），仲間分けしたり（分類），関係を見つけたり（関係付け）して，何が分かるのかを考えることができる。	21	6	2	0
(5)授業では，自分の考えとその理由を明らかにして，相手に分かりやすく伝わるような発表をしている。	18	9	2	0
(6)『総合的な学習の時間』と『社会科』は同じように学習を進めていくことができる。	21	7	1	0

アンケート結果から，特筆すべき点として，ここでは(6)の問いについて扱いたい。
(6)の問いに対して，［よくあてはまる］と答えた複数児童に回答理由を問った。
「問題を作って，予想して，資料で確かめて，学習したことを振り返る授業の流れが『社会科』と『総合（以下，【児童の実態】項目においては，『総合的な学習の時間』を『総合』とも表記）』は同じだから」
「中村先生が，『社会科』で授業したら『社会科』って思う。『総合』で授業をしたら『総合』って思う。やり方も勉強することも同じに感じるから」
「（５年生では）『社会科』は日本全体のことを勉強して，『総合』は色々勉強するけれど，どちらも最後は，自分たちに身近なことをしていると思うから。『総合』は，４年生までの『社会科』にも似ている」
「『社会科』も『総合』も実際に学校の外に出て，その場所を見学するし，必ず関わっている人が出てきてその人の話にも注目して勉強するから」
複数児童の回答サンプルのため，学習の方法論と内容論が混在する回答理由であったが，本学級の児童認識実態として『総合』と『社会科』は酷似した学習であるとの捉えが大多数であるとの現状が把握できる。
さらに，［あまり当てはまらない］に回答した児童１名（S 児）についても回答理由について問った。
回答した S 児の理由は，以下の通りである。
「『社会科』は，みんなで作った問題から大切な言葉やキーワードも覚えながら，世間の役に立つようにその知識を使っていくもの。外（社会全体）に向かって学習しているイメージ」
「『総合』は，みんなが問題を見つけて，みんながどうするか自体を考えていって，そこについて自分がどんな行動をとっていくことが良いのかを知って，最後は自分や家族の役に立つもの。自分に向かって学習しているイメージ」
回答サンプルとしては１名であり，データとして取扱えるものではないが，指導者の授業を前述したように捉えている児童がいるということは事実である。この回答は，『社会科』と『総合的な学習の時間』の関わりと「教科横断的な指導」について考えていく上で，非常に興味深いものである。
これらの児童の認識実態を「教科横断的な学び」と括って良いのだろうか。後述する【『総合的な学習の時間』と『社会科』における教科横断的な指導について】に示す授業者の考えと共に，授業事後検討協議会において御協議・御指導賜りたい点である。

単元の目標と評価規準

【単元の目標】
○災害に関する調査を進める中で，災害を体験知をもった『自分のこと』（自らの生活に関係する事象）として捉え，調査結果から命を守る行為（三助など）に対する価値判断を行い，『当事者』としての意識をもって自らの考えを発信することができる。

【評価規準】

評価の観点	知識・スキル			価値観・倫理観	意欲・態度
	ア　課題を決める力	イ　課題を解決する力	ウ　考えを伝える力	エ　成長に気付く力	オ　共に学ぶ力
単元の評価規準	・災害についてのアンケート調査結果を基に，災害について体験知をもった『自分のこと（自らの生活に関係する事象）』と捉え，課題設定を行っている。	・調べようとしていることと『命を守ること』がつながっているのかを常に考えながら，課題解決へ向けて，筋道を立てて思考している。	・災害について，相手に応じた情報を伝えるために，筋道を立てて思考を深め，表現している。	・学習を振り返り，災害に対する切迫感や自分自身の想いの変容に気付き，思考の深まりを実感している。	・課題の解決に向けて資料を集めたり，調査したり，まとめ・分析したりする活動を，仲間と対話的な活動を通して進めている。

※『自分のこと』とは『自分ごと』と同意ではない。また，『当事者』であり，『当事者性』ではない。

育成しようとする資質・能力と本単元との関わり

本校では，育成しようとする資質・能力を以下の５つの力に設定している。
それぞれの力に関する本単元との関わりは，以下の通りである。

【課題を決める力】自分たちを取り巻く切迫した被災環境から体験知をもって疑問や認知的不協和を見つけ，被災者の想いや願いを明確にした課題を設定することができる。

【課題を解決する力】課題解決に向けて適切な方法で情報を集め，必要な情報を取捨選択することができる。また，収集した情報を整理・分析し，話し合いを通して自分の考えの深化を図ることができる。

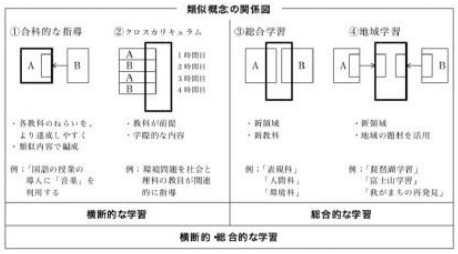
【考えを伝える力】レディネスを基に自分なりにまとめた考えを，相手や目的に合わせて，適切で効果的な方法で伝えきることができる。

【成長に気付く力】本単元の学習を通して，今の自分の生活や考え方を改めて見つめ直し，自分自身や家族，地域や熊野町の将来の減災イメージをもったり，今の自分にできることを考えたりすることができる。

【共に学ぶ力】自分と災害，自分と減災とのつながりを意識し，他者と積極的に関わりながら学びを深めていくことができる。

『総合的な学習の時間』と『社会科』における「教科横断的な指導」について

【児童の実態】にも前述したように，本学級児童の大多数は，『総合的な学習の時間』と『社会科』での学びの内容や学び方に大きな差異を感じていない。
そもそも本単元の大部分の授業内容は，昨年度の５年生においては，『社会科』の「自然災害から人々を守る」で取扱っている。本時に至っては，６月下旬と２月下旬という学習時期の違いはあれど，全く同一内容で実施した。指導者は，評価の違いをもってそれぞれの授業時間を『総合的な学習の時間』と『社会科』に定義付けた。
果たして本時を含む本単元は，『総合的な学習の時間』の授業だったのだろうか。
以下に示した（資料１）「類似概念の関係図」に本単元を宛てがうならば，授業者としては②クロスカリキュラムの概念に該当すると考えている。しかしながら，クロスカリキュラムでは，教科教育が前提であり，A の時間を概念的知識・説明的知識の獲得に評価をおく『社会科』と捉えるのであれば，挟み込まれる B の時間は『総合的な学習の時間』という矛盾が生まれる。
これを「教科横断的な指導」と位置付けて良いのだろうか。教科教育の本質を欠く自称，「教科横断的な指導」になっているのではないだろうか。また，『総合的な学習の時間』という傘をさした『社会科』ではないのだろうか。
このようなカリキュラム・マネジメント上の危惧をもって授業者は本実践を行った次第である。



（資料１）『類似概念の関係図』

【静岡県総合教育センター「横断的・総合的な学習に関する用語の定義・意味」】

指導と評価の計画

	学習内容『災害について知ろう』（時数：20 時間）	主たる評価規準
一	課題の設定 ○災害とは何かについて調べる。（2） ・天災と人災の違いや，自然災害の種類など基礎的な知識を習得する。 ○広島県の過去の災害について調べる。（3） ・広島県の災害の記録を振り返ることで，自分を取り巻く防災自体に疑問をもち，情報収集に向けての意欲を喚起する。	ア　課題を決める力 災害についてのアンケート調査結果を基に，災害について体験知をもった『自分のこと（自らの生活に関係する事象）』と捉え，課題設定を行っている。
二	情報の収集 ○自分を取り巻く防災について調査する方法を検討する。（2） ・何について，どこで，どのような方法で調査するのかを明確にしながら検討させる。（見学・アンケート調査・インタビュー調査・葉書送付による実情調査など）	オ　共に学ぶ力 課題の解決に向けて資料を集めたり，調査したり，まとめ・分析したりする活動を，仲間と対話的な活動を通して進めている。
	○日本の防災・広島県の防災・熊野町の防災について自助・公助・共助の視点から調査する。（8） ・現場に実際に行って，防災倉庫を実地調査する。 ・アンケートで災害発生時の実情を調査する。 ・身近な人に直接，災害発生時の様子をインタビュー調査する。 ・公的機関の方々に直接，災害発生時の様子をインタビュー調査する。 ・葉書を送付して，各施設の防災の実情を調査する。 ・実物を取り寄せて調査する。 ・書籍やインターネットで調査する。	イ　課題を解決する力 調べようとしていることと『命を守ること』がつながっているのかを常に考えながら，課題解決へ向けて，筋道を立てて思考している。
三	整理・分析 ○調査によって収集した防災に関する情報を整理する。（3） ・情報を見直し，欠如する部分等においては追加調査しながら整理する。 ○収集した防災に関する情報を分析する。（1）本時 ・自助・公助・共助の情報を分析する中で，三助の役割を捉える。	エ　成長に気付く力 学習を振り返り，災害に対する切迫感や自分自身の想いの変容に気付き，思考の深まりを実感している。
四	次単元へのつながり ○分析結果から，二学期・三学期のアウトプット（発信・表現）に向けて，更に調査と整理・分析が必要なことについて検討し，次単元『伝えよう！命の守り方』へのつながりを図る。（1） ・自助・公助・共助のグループに分かれ，それぞれが防災・減災と，どのようにつながっているのかの情報収集・整理・分析を更に深めていく次単元へとつなげる。	ウ　考えを伝える力 災害について，相手に適した情報を伝えるために，筋道を立てて思考を深め，表現している。

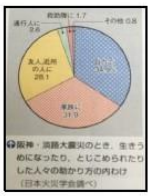
※評価規準の欄には，主たる評価の観点を記載しており，その観点のみが規準となるという捉えではない。

本時の学習（19／20 時間）

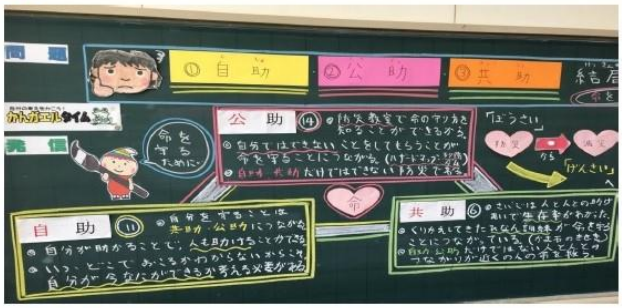
（1）本時の目標
三助の役割について多角的な視点をもって，筋道を立てながら俯瞰的思考を深めることができる。

（2）準備物
PC・大型ディスプレイ・レディネス想起に関するプレゼンテーションデータ
黒板提示資料（円グラフ型）・ワークシート

（3）本時の学習展開

学習活動	指導上の留意事項	準備物 評価規準 （評価方法）
○前時までのレディネスを振り返る。	・防災に関わる自助・公助・共助の視点からレディネスの振り返りを行う。	・PC ・大型ディスプレイ ・レディネス想起に関する PPT データ
1　本時のめあての把握と前時に本学級の児童が作成した問題を確認する。		
○前時に作成した問題を確認する。	・めあてを大型ディスプレイに提示すると共に，前時に児童が作成した問題も黒板提示する。	・PC ・大型ディスプレイ
【めあて】災害から命を守るための三助から最も大切だと思うものを選び，選んだ理由を防災についての自分の考えと共にワークシートにまとめることができる。		
【問　題】（災害から命を守るために）自助・公助・共助，結局どれが（一番）大切なのだろう？		
2　三助の概念カテゴリーの中から，これらの価値を判断し，選択意思決定を行う。		
○自分の意思決定の理由をワークシートに書く。 児童がこれまでに獲得している宣言的知識 ・自然災害の種類（地震・豪雨・土砂崩れなど）　・天災　・人災 ・防災リュック（非常用持出袋）　・ハザードマップ　・ライフライン ・被災者　・被災帰宅困難者　・避難訓練　など 児童がこれまでに獲得している初等教育段階における概念的知識 ・災害　・被災　・防災　・自助　・公助　・共助		・ワークシート
○自分の選択した概念カテゴリーについて，選択意思決定した理由を隣席やグループ等で話し合う。	・選択した概念カテゴリーの理由付けの際に，ここでは他の概念カテゴリーに対する否定をもって選択意思決定を行ったとする消極的選択を選ばせない声かけを行う。	
（児童の学習状況に応じて，話し合う必要性が見られない場合は，この話し合い活動の時間は，指導者の判断により設定しない） ○自分の選択した概念カテゴリーについて，選択意思決定した理由を発表する。	・児童に選択意思決定までの思考の筋道に意識をもたせることで，三助のつながりについても考えを深めさせる。	
3　黒板提示資料から災害発生時の三助の役割について俯瞰的思考を深める。		
○黒板提示資料を読み取り，資料からわかることを話し合い，発表する。  児童に期待される俯瞰的思考 人の命が助かった割合の大小ではなく，一人でも助かる術であるのならば，それは大切な三助（自助・公助・共助）の役割である。	・黒板提示資料から自助において助かった人の命の割合・公助において助かった人の命の割合・共助において助かった人の命の割合を読み取らせる。 ・はじめに数値における割合を読み取らせ，スポット化された思考を促す。 ・スポット化された思考から「助かった人の命」に着目させ，俯瞰的思考へと昇華させる。 ・「助かった人の命」という資料ということは，「助からなかった命」が存在するという事実を再認識させる。	・黒板提示資料（円グラフ） 評価／エ 本時の問題解決へ向けて，災害と防災に対する自分自身の考えや思いの変容に気付き，思考を深めることができる。 （ワークシートへの記入・話し合いでの発言・発表）
○「防災」という概念的知識と本時における学びを活かしながら「減災」という概念的知識を獲得する。	・児童の災害から命を守るための概念を「防災」から「減災」へとシフトさせる。	
児童に獲得させたい概念的知識「防災から減災」（社会科的側面） 「減災」とは，災害を防ぎきるという「防災」を決して諦めた訳ではなく，想定できない自然災害において，その被害を最小限に留めたいという人々の強い想いと願いが結晶となった取り組み。		
4　本時のまとめと振り返りを行う。		
○本時のまとめをワークシートに書く。 【まとめ】 三助でも助けきれない命はあるが，三助によってたった一人でも助かる命がある。		
○本時の振り返りをワークシートに書き，発表する。 【振り返り】 （例）「防災」に出来るだけ近づいていくことができるように，自助・公助・共助をについてもっと詳しく知って，自分でもできる「減災」に取り組んでいきたい。		
5　次時に学んでいくことの見通しをもつ。		

板書計画



※熊野町で実施されているめあてに関しては，本時の学習項目に明示している通り，別途大型ディスプレイにプレゼンテーションソフト（PPT）を使用して提示する。

本単元に関わる参考文献

●総合的な学習の時間・社会科に関する参考文献

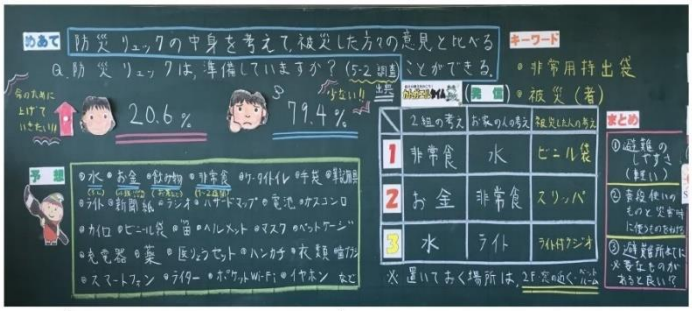
・岩田一彦『社会科固有の授業理論 30 の提言 総合的学習との関係を明確にする視点』（明治図書出版）2001 年
・江口勇治［監］『21 世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』（帝国書院）2018 年
・片山宗二・木村博一・永田忠道［編］『混迷の時代！“社会科”はどこへ向かえばよいのか』-激動の歴史から未来を模索する-（明治図書出版）2011 年

・北俊夫『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』（文溪堂）2012 年
・高野尚好・小林賢司・寺崎千秋［編］『総合的な学習の時間を生かす社会科』（国土社）2000 年
・小島宏・寺崎千秋［編］『総合的な学習の評価計画と評価技法』（明治図書出版）2000 年
・澤井陽介・加藤寿朗『見方・考え方［社会科編］』（東洋館出版）2017 年
・須本良夫・田中伸［編］『社会科教育におけるカリキュラム・マネジメント』（梓出版）2017 年
・中村祐哉『社会科教育』（No.709／2018 年 5 月号）P. 10～11（明治図書出版）2018 年
・奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』（東洋館出版）2017 年
・日本社会科教育学会［編］『社会科教育と災害・防災学習』-東日本大震災に社会科はどう向き合うか-（明石書店）2018 年
・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』（日本文教出版）2018 年
・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総合的な学習の時間編』（東洋館出版）2018 年
・安野功・加藤寿朗・中田正弘・石井正広・唐木清志・児玉大祐・小倉勝登［編］『平成 29 年度版 小学校 学習指導横領 ポイント総整理 社会』（東洋館出版）2017 年

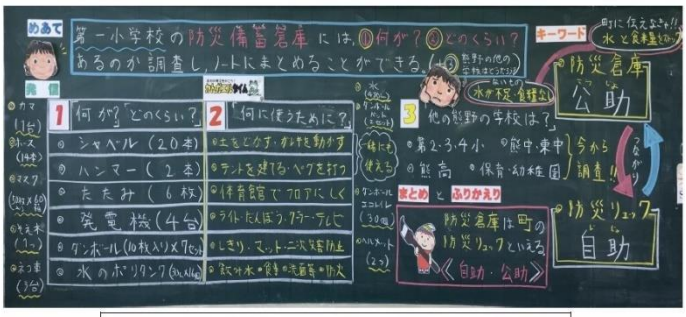
●東日本大震災・西日本豪雨災害（平成 30 年 7 月豪雨災害）等の災害，防災・減災に関わる参考文献

・池上正樹『東日本大震災・石巻の人たちの 50 日間 ふたたび、ここから』（ポプラ社）2011 年
・川井龍介『津波と瓦礫のなかで』（旬報社）2012 年
・佐藤敏郎『16 歳の語り部』（ポプラ社）2016 年
・佐藤仁『南三陸町の 3 年』-あの日から立ち止まることなく-（河北新報出版）2014 年
・菅原裕典『東日本大震災「葬送の記」』（PHP）2013 年
・田久保善彦『東北発 10 人の新リーダー』-復興にかける志-（河北新報出版）2014 年
・中国新聞社『西日本豪雨 2018. 7』（中国新聞社）2018 年
・東北大学大学院経済学研究科『東日本大震災復興研究Ⅲ 震災復興政策の検証と新産業創出への提言』-広域的かつ多様な課題を見据えながら「新たな地域モデル」を目指す-（河北新報出版）2014 年
・廣田和好『地震・津波め、おだづなよ！』-激震地・石巻からのドキュメント-（白順社）2011 年
・皆川治『被災、石巻五十日。』-震ヶ関官僚による現地レポート-（国書刊行会）2011 年
・森栄吉『いちご畑をもう一度』-3.11 復興の軌跡-（潮出版）2014 年

●MEMO



防災準備アンケート 防災リュックの準備割合 20.6%！被災者が必要だと感じた中身は？

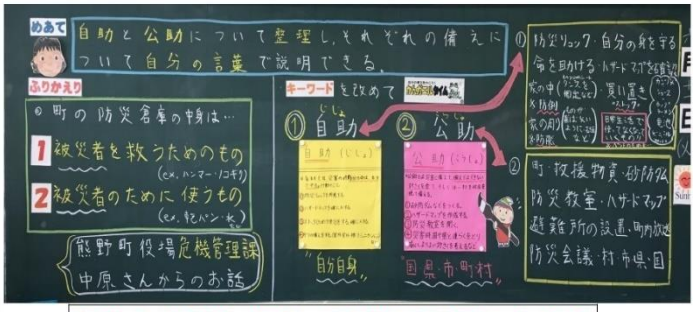


くまいち小防災備蓄倉庫調査委員会

防災備蓄倉庫は町の大きな防災リュック！

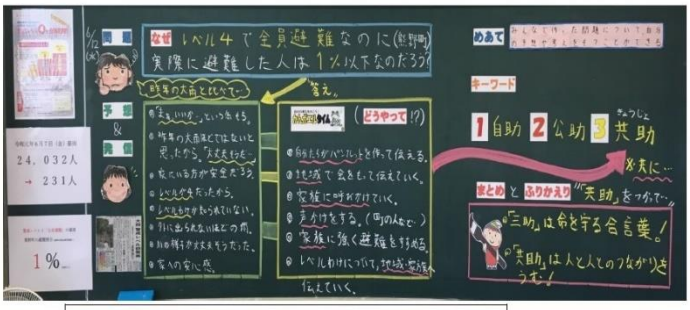
熊野町防災備蓄倉庫調査にむけて

避難所ベースから町全体ベースの備蓄量へ！



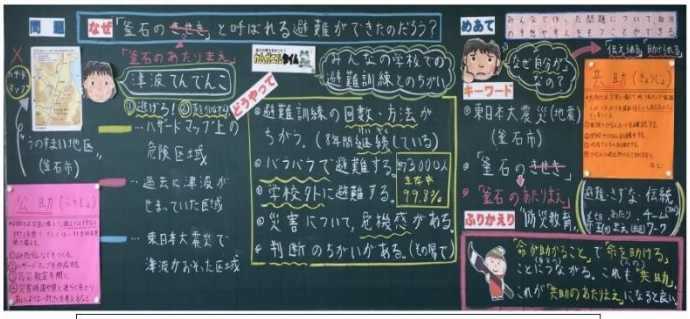
自助と公助を自分の言葉で説明しよう！

災害から命を守る自助とは？ 公助とは？



共助を自分の言葉で説明しよう！ なぜ豪雨

災害を経験したのに，避難割合が１％以下なのだろう？



実際に災害が発生した時の共助の役割とは？

なぜ『釜石の奇跡』と呼ばれる避難ができたのだろう？

避難所の位置と土砂災害警戒区域・特別警戒区域

なぜ土砂災害警戒区域の中に避難所があるのだろう？

防災から減災へ，一人でも多くの命を救うために

自助・公助・共助 結局，どれが一番大切なのだろう？

私たちがハザードマップをつくる意味・つくる価値

私たちがつくるハザードマップに必要な印（マーク）は何だろう？

地域の減災レガシー構築のための『総合的な学習の時間』におけるカリキュラムづくり

～被災当事者から復興当事者，そして被災経験伝承者へ～

熊野町立熊野第一小学校
教諭　中村 祐哉

本発表のアジェンダ

1．本実践のテーマと本校のESDの捉え方
2．総合的な学習の時間とESDをつなげる授業実践
（『防災・減災教育』を事例として）
3．持続可能な社会づくりへの貢献と本学習活動における成果
4．今後の展望

1．本実践のテーマと本校のESDの捉え方

『つなげる・紡ぐ』

(カリキュラム・マネジメントにおける系統性と継続にスポットをあてて)

- 総合的な学習の時間とESD
- 地域における社会的事象と子ども
- 地域の過去と現在と未来

ESDとは？

・持続可能な開発のための教育(ESD:EDUCATION FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENT)とは，私たちとその子孫たちが，この地球で生きていくことを困難にするような問題をについて考え，立ち向かい，解決するための学びです。ESDは持続可能な社会の担い手を育む教育です。（２００５年～）

○国際連合教育科学文化機関（UNESCO）
○内閣官房ESD関係省庁連絡協議会
○文部科学省
○外務省

出典：UNESCO SCHOOL HP

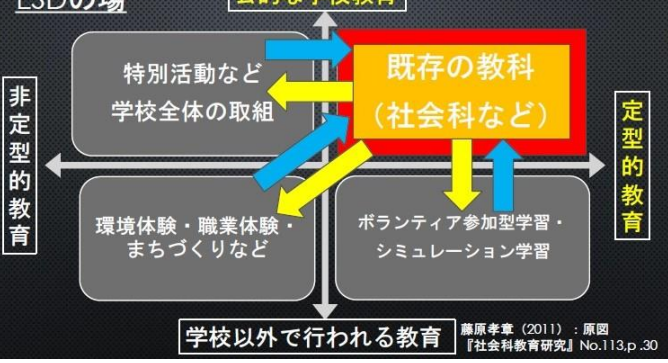
SDGsとESDの位置づけ（17の目標・169のターゲット）

本ESD授業実践活動の目的

○ESDにおけるカリキュラム開発・授業づくりを行っていく中で，時限的な取組ではなく，校種を越えて継続的・横断的に開発単元をつなぎながら，『総合的な学習の時間』等においてESDを推進していくことを目的としている。

「被災当事者」でありながら「復興当事者」でもあるという情意的葛藤の中から地域とのつながりを紡ぐ防災・減災教育

ESDの場



藤原孝章（2011）：原図『社会科教育研究』No.113,p.30

外部団体との連携

官公庁
- 広島県土木建築局 砂防課
- 熊野町役場 危機管理課（広島県安芸郡熊野町）

公益社団法人
- アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム（日本ユネスコ協会連盟）

地元企業
- 広島ガス株式会社 総務部 広報環境室

市民団体
- 大原ハイツ復興の会（広島県安芸郡熊野町）

２．『総合的な学習の時間』とESDをつなげる授業実践

総合的な学習の時間
＋
社　会　科

１学期『災害について知ろう』
２学期『伝えよう！命の守り方』
３学期『命を守るために』
１・３学期『自然災害から人々を守る』

- 系統的なESD
- 横断的なESD
- 継続的なESD

『防災・減災教育』授業実践事例として

令和元年６月７日（金）

熊野町はレベル４の全員避難

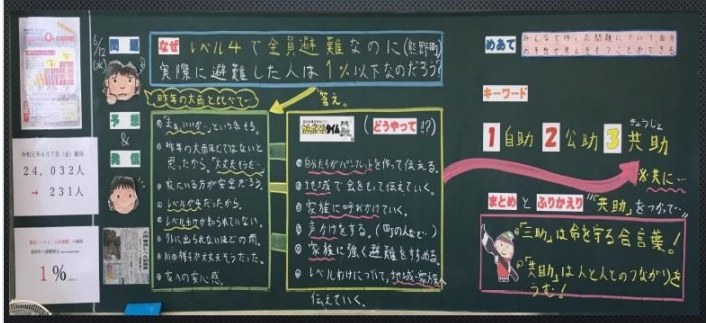
２４,０３２人

熊野町で実際に避難した人の数

２３１人

熊野町で実際に避難した人の割合

約１％



問題『なぜレベル４で全員避難なのに実際に避難した人は１%以下なのだろう？』

○子どもたちの実体験を伴う予想

- まだ大丈夫だと思った。　→　警戒レベル４でも？
- 家族も周りの家庭も避難しようとは言わなかった。

→　誰もが避難の最高責任者・同調バイアス

最も多かった予想

- あの７月６日の豪雨よりひどくはならないと思った。

→ 過去の経験がより正常性バイアスを強める結果に愕然

被災した故郷を見つめる多角的な視点の必要性

- 外部人材を適宜活用しながら，「被災当事者」「復興当事者」「復興支援者」といった様々な立場からの視点を子どもたち自身にもたせながら「被災経験伝承者」をも育むことのできる学習活動を展開。

外部団体との連携

官公庁
- 広島県土木建築局 砂防課
- 熊野町役場 危機管理課（広島県安芸郡熊野町）

公益社団法人
- アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム（日本ユネスコ協会連盟）

地元企業
- 広島ガス株式会社 総務部 広報環境室

市民団体
- 大原ハイツ復興の会（広島県安芸郡熊野町）

情意的葛藤から生み出された学び

僕たちは被災地に住む被災者のひとりだ

自助・公助・共助
復興に向き合い立ち上がる地域の人々の想いにふれる

未来の故郷をつくる復興当事者であること

災害を経験した被災経験伝承者であること

３.持続可能な社会づくりへの貢献と本学習活動における成果

４．今後の展望

主体的・対話的で深い学びとの関連性

- 新たな価値や多様な考えについて対話的活動を通じて交流することによって，児童同士のつながりからESDに関わる新たな「知」を創造する学びへ → 町内カリキュラム作成・接続中学校とさらに連携

→ここでの対話的な活動の効果は，新たな価値観・多様な考えが，次の学びへつながる素材として活用できる点

（EX.PISA 2015年の結果　①自らの力が発揮 ②異なる意見 ③話を聞く）

SDGsにベクトルを合わせて子どもたちの学びをつなげるESDをデザイン

対話的な活動が体験や資料によってより広がり，子ども達同士の学びをつなぎながら，教師のファシリテート力で，より深い学びへ！

御清聴ありがとうございました。

地域の減災レガシー構築のための『総合的な学習の時間』におけるカリキュラムづくり

～被災当事者から復興当事者，そして被災経験伝承者へ～

熊野町立熊野第一小学校
教諭　中村 祐哉

学校名	府中町立府中北小学校
担当教員名	本島　琢磨

活動のテーマ	守ろう！大切な命
主な教科領域等	総合的な学習の時間
活動に参加した児童生徒数	第５学年（　６０人　）
活動に携わった教員数	７　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	約３０　人【保護者　・地域住民】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月８日　～　２０２０年２月２８日
想定する災害	地震　・河川氾濫　・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

★災害時を想定した炊き出し訓練の実施

○いざという時に助け合って（共助）避難生活を送ることができるように，地域の方と一緒に炊き出し訓練をする。

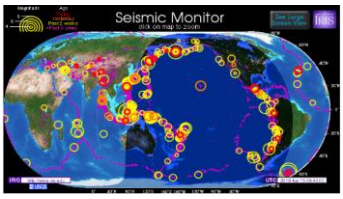
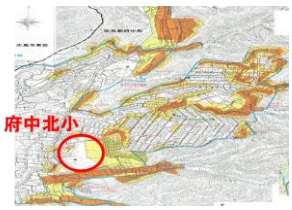
○災害時でも自分達にできることについて考え命を守るための行動ができるようにする。

★防災フェスタの実施

○１年間を通して学習してきたことの総まとめとして行う。

○保護者や地域の方々を招き，自分達が学習してきたことを伝える。また，地域の方々と交流することで，共助の意識を高める。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

日付	活動	内容
4 月	課題設定	児童とともに，日本での災害の実際を知り，防災学習への意識付けを行った。   世界中の地震をリアルタイムで表したもの ・日本は世界の国と比べても地震が多く発生する国なんだ。 ・いつどこで大きな地震が起きるか分からないな。 府中北小学校近辺の土砂災害警戒区域・特別警戒区域を色付けして示したもの ・北小の周りには，警戒区域が広がっていて，自然災害の危険があるんだ。 ・実際に，西日本豪雨災害では，たくさんの被害が出たな。
5月29日	防災教室 （東京海上日動）	講師の方からの話を聞き，災害に関しての情報を集めた。 講師の方からの話 ・広島県は，土砂災害の危険箇所が日本で一番多いんだ。 ・自分の命は自分で守ることが大切なんだ。 ・災害から身を守るため，私たちができることってなんだろう？ 非常用持ち出し袋の中身を考える活動 ・どれくらいの量の食料を入れておけばいいのだろう。 ・絶対に必要なものは何だろう。 ・家に帰って非常用持ち出し袋の中身を確認してみよう。
7月11日	防災講座 （広島県庁砂防課）	講師の方からの話を聞き，災害に関しての情報を集めた。 土砂災害の模型 ・土砂災害がどんな風に起こるのか，どんな場所が危険なのか知ることができた。 ・北小周辺に危険な箇所はないかな？ ・去年起こった榎川の氾濫はこんな風に起こったんだ。 防災マップの作成 ・自分たちの住んでいる地域で危険なところはどこだろう。 ・水路や山の斜面の近くは避難の時に避けた方が良さそうだね。 ・避難経路を想定しておくと，いざという時すぐ行動にうつせるね。
7月19日 ～22日	野外活動 （似島臨海少年自然の家）	自然災害が起こった時や避難したときにも自分たちにできることがたくさんあることに気付いた。 竹箸づくり ・身近な材料で，普段使っているものを作れるんだ。 牛乳パックを使ったホットドックづくり ・防災の時にも役立つね。 ・身近なもので簡単にホットドックをあたためることができた。 夜の避難訓練　※雨天により，中止

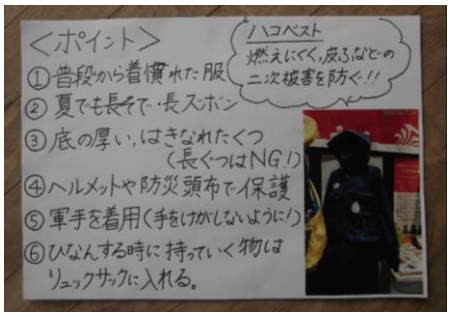
調べ学習（本やインターネットを活用して）

大切な命を守るために，
これまでに学習してきたことを身近な人たちに伝えたい！

これまでの学習を生かす

１０月～	炊き出し訓練　準備	調理グループ，食器作りグループ，防災クイズグループ，伝えるグループの４つのグループに分かれ，準備を進めていった。 簡易食器づくり ・災害時に避難所で使えるものはないだろうか。 ・スプーンは牛乳パック，皿は新聞紙で作ることができそうだね。 防災マップ作り ・地域の方々にも適切な避難経路を知ってもらいたいなあ。 ・様々な地区の危険な場所を一枚の地図にまとめよう。
11月1日	炊き出し訓練 （府中北小学校青空広場）	 簡易机，いすの組み立て方の紹介 手作り防災カルタ 防災かまどを使って炊き出し（雑炊づくり） 調理手順の説明 地域の方との交流

生かす

2020/3/2 （中止）	防災フェスタ	1年間を通して学んできたことの集大成（臨時休業のため中止） 土砂災害が起きる仕組みの模型 地域の防災マップ 防災カルタ  避難時の服装のポイント

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

学校の中だけではなくいつどこでも使える減災教育の実現

○西日本を中心とした豪雨災害のみならず，これまで日本各地で起きた災害について調べる活動を通して，今後自分が異なる場所で異なる災害に遭ったときのことについて考える活動を行った。

○減災教育研修で見学した写真・動画等を子ども達に見せて，想像させ，当事者意識を持った調べ学習となるようにした。

○総合的な学習の時間のみならず，理科・社会科・国語科・家庭科・算数科などの教科と関連させた。

○助成金で災害に関わる本を購入し，調べ学習に活用した。他学年にも防災意識を持ってもらうために図書室に特設コーナーを設けた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

教科との関わりを重点的に

教科	単元名	内容
理科	流れる水のはたらき	川の水が氾濫する仕組みを学び，河川による災害から命を守るために，自分たちができることを考えることができた。
算数科	百分率とグラフ	円グラフ，帯グラフの正しいかき方を知り，それを活用して防災に関わるアンケートなどをまとめることができた。
社会科	国土の環境を守る	日本の自然災害についてグラフや表から数値を読み取り，日本は自然災害が起きやすい国土であるということに気付かせることができた。
国語科	資料を生かして考えたことを書こう	集めた資料を分析したり，分析結果から考えたことをまとめたりして，説明文を書いた。また，人に伝えるために必要な資料を作成することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

●これまで意欲を持って調べようとする姿はあったが，当事者意識を持てていない児童が多かった。
災害についても，東日本大震災という名前を知っていてもどんな被害があり，その後どのように復興していっているのかについて知らない児童が９割を占めていた。

↓

災害についての調べ学習を行う。
減災教育で視察した際の写真・動画を見て，その様子を想像する。

○災害はいつ・どこで起きるかが予測できず，そのため大きな被害が出ていることに気付くことができた。
○地域の災害を想定する中で，避難する時間に着目して考えることができた。季節や時間によって，避難の仕方や必要な物も違うことに気付くことができた。
○得た知識を関連付けながら，自分の考えを話すことができた。
○１１月の活動の振り返りを次の課題発見につなげることができ，主体的に取り組むことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・課題設定当初は，地震や土砂災害の話や資料を見ても，自分事として捉えられている児童が少ないように感じたが，防災教室や防災講座を通して，広島県で土砂災害が起こりやすいという実情を知ったり，実際に防災マップを作成したり，非常用持ち出し袋の中身を考えたりする活動を通して，徐々に意識が変化している様子が見られた。
・炊き出し訓練では，共助を意識して，自分から進んで地域の方々と関わっていこうとする姿が見られた。また，活動を通して，様々な成果や反省点を見つけ，それを３月に行う防災フェスタへ生かしたいという意欲的な姿が見られた。
・防災フェスタの準備では，地域の大人から子供までどの人にも分かりやすい内容にしようと考え，具体物や模型，パネル，体験コーナー等を設置する計画を立てるなど創意工夫を凝らして準備する姿が見られた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

自助　**共助**　公助　＋N 助

炊き出し訓練では特に**共助**を意識した取り組みを行った。

保護者，地域の方参加型の取り組みをすることができた。

２）に記しているように，各グループに分かれて地域の方と一緒に防災について考える活動を行った。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・カリキュラムに落とし込む点では，４月の段階ですべての教科との関連性を把握し，防災（減災）学習の視点を盛り込むことが必要であると考えた。来年度は，今年度の実践を４月に引き継ぎ，それを生かしたカリキュラムマネジメントを行っていく。

・５年生のみの活動にとどまらず，学校全体で防災学習に取り組む必要性があると考えた。

⇒教職員全体が防災学習に取り組む意識を持てるような研修が必要である。

（過去の災害を知る。共有する。）

学校名	山口県周南市立三丘小学校
担当教員名	小松　俊介

活動のテーマ	西日本豪雨災害（三丘災害）を忘れないための取組
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	６学年（　１１人　）
活動に携わった教員数	２　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	３　人　【地域住民・その他（　市防災ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ・大学准教授　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年１１月２２日　～　２０２０年2月２８日
想定する災害	洪水・河川氾濫・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

三丘小学校のある周南市の熊毛地区は、「平成 30 年 7 月豪雨」による災害を受けた地区である。学校周辺や主要な道路が冠水し、陸の孤島と化した。家屋の倒壊や床上浸水などにより、本校児童を含む多くの住民が被害を受け、復旧するまでにたくさんの時間を要した。しかし、時が経ち、災害の傷跡が消えていくにつれて、人々の記憶からも災害に対する危機感が薄れてきているように感じられた。そこで、本校高学年により、「平成 30 年 7 月豪雨を忘れない・繰り返さない」をテーマに学習を進めることにした。子供たちとの話し合いを行った結果、防災減災リーフレット（三丘版）を作り、地域に発信していくことにした。

学習課題『三丘に必要な防災減災について考えよう』

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

１　三丘に必要な防災・減災について考えよう

①　東日本大震災（気仙沼市）の被害の様子や減災教育などの取組について理解する。

②　三丘地区の防災・減災に必要なものは何かを考える。

③　平成 30 年 7 月豪雨について調べる。

２　三丘地区の防災・減災について深めよう

①　被災地に行って確かめる。

②　三丘地区の土地のつくりについて学ぼう。

３　三丘地区に必要な防災減災リーフレットを作ろう

①　ゲストティーチャーに教わった事を生かして。

②　専門家の意見を聞いて改善しよう。

４　三丘地区の防災減災について発信しよう。

①　リーフレットを生かす方法について考える

②　地域に発信する方法について考える

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月の研修会に参加したことで、防災減災教育は地元に根付いた学習であり、教育であると感じた。三丘という地を理解することが防災減災教育の第一歩となる。

三丘という地を理解することが防災減災教育の第一歩となる。そこで、地元の人をゲストティーチャーとして招き（助成金活用の１つ)、語り部として災害の状況を聞いたり、三丘の地質について学んだりした。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災減災教育は、画一的なものではなく、小中学校の数だけそれぞれに合った防災減災教育が存在する。この視点をもつことで、三丘小学校独自の防災・減災教育を進めるという意識をもって学習に取り組むことができている。現在、子供たちは、三丘地区の地図や校区内の写真（災害の様子）を見ながら、リーフレットづくりに励んでいる。地域に根付いた学習が進められている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・ゲストティーチャーを招き、実際に災害を受けた現場に行って、災害時の写真と比べながら、当時の様子を説明してもらった。これまで、「平成 30 年 7 月豪雨」で三丘地区がどのような被害を受けたのかを子供たちはあまりよく知らず、被害の写真を見ても、どこか他人事であったり、過去の話で済ましているような感覚があった。現場での学習は浸水時の深さや広さなど体験的に実感することができた。

・大学の教授を招いて、三丘地区の地質の様子と災害との結びつきについて学習した。砂山を使って、土砂災害が起きる様子や起きた後の地形について学んだ。その後、地図を見ながら、三丘地区が土砂災害と結びつきの強い地域ということを発見することができた。

・子供たちは、故郷三丘のことをこれまで以上によく知ろうとする態度で学習を進めることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・保護者・地域が連携して、三丘の防災減災教育を今まで以上に力を入れて進めていこうとするプロジェクトが立ち上がり、子供たちも含めて意識を高めているところである。

・これまで、防災減災教育がはっきりと位置付けられていなかったが、昨年度の災害を機に総合的な学習の時間に位置付け、継続的に学習することにした。

・防災の関係機関の方が児童と連携する機会は乏しかったが、今年度は様々な活動に講師として、または、アドバイザーとして、児童と連携することができた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

地域人材の活用を行うことで、地域密着型の防災減災教育が可能となる。三丘に必要な防災減災という観点で学習を進めることができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

三丘小学校では、高学年で防災減災学習を行える期間が数ヶ月しかない。その期間を有効に使うには、毎年０からスタートするのではなく、前年度の実践を受け継いで、その反省を基に新たなものを加え、次年度へ残すという形を取るのが理想的である。そのため、年度末には６年生の卒業研究として、防災学習の成果を発表する機会を作った。防災学習がより良いものへと常に上書きされる、終わりのない活動になるようにしていきたい。

学校名	大津町立大津小学校
担当教員名	橋本　道明

活動のテーマ	子ども防災士活動
主な教科領域等	教科領域（　教科外活動　）
活動に参加した児童生徒数	４．５．６学年（　１２人　）
活動に携わった教員数	４　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２　人【その他（　地域の防災士　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年9月２２日　～　２０２０年3月３１日
想定した災害	地震

１）活動の目的・ねらい

甚大な被害をもたらす多くの災害に対応する力を身につけるため児童に対し減災・防災に対する知識、技能を習得する機会を与え、「自助」「共助」のために主体的に活動する地域のリーダー的存在の育成を行う。また、地域防災組織との連携をとることで、学校と地域の連携を図り、防災に活かす。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

９月１２日実施「子ども防災士活動」始まりの会

・目的：「子ども防災士」を希望した児童に活動の目的を示し、将来の地域の防災リーダーをめざす心を育てる。

・活動の詳細：令和元年度は１２名の参加で始まった。（１２名中４名は昨年から引き続きの参加）今年度は子ども防災士の活動で学習したことをより多くの人たちに伝えていく事も確認をした。

１０月２４日実施　　水消火器訓練

・目的：水消火器を用いた消火器操作を通して、児童自身が災害発生時に行動できることに気づき、防災活動に対して主体的に活動できる意識を持たせる。

・活動の詳細：　今回の活動は、昨年度経験をしている児童が教えるという形で実施した。４人の経験者が丁寧に使用方法を教えている様子が見られた。ここで学習したことを火災避難訓練で今まで消火器を扱ったことの無い教師に教えることを目的にしたため、細かい操作方法まで経験者や防災士に積極的に訪ねる様子や、活動後も、消火器の使い方を発表するために、自主的にノートに発表する内容をまとめる児童の姿も見られた

（１２月１７日実施　　火災避難訓練）

１０月２４日に使い方を学んだ消火器の使い方を、今まで消火器を使ったことのない２名の教師に、使い方を教える活動を行った。事前に説明の練習をしての避難訓練となった。全校児童の前で説明をおこなうことができた。残念ながら、この日は雨のために、外で水消火器を使うことができなかったが、防火管理業者に依頼して、水を出ない状態にして、使い方の練習を一緒に行った。

１１月１４日実施　　避難所運営ラーニング

・目的：避難所運営体験プログラムを通して気をつけるべきことを考えることで今まで育ててきた自助の精神の上に共助の精神を養う。

・活動の詳細：　まず、熊本地震をふり返り、避難したことを思い出した。その後、避難所に見立てた用紙に、通路や必要な場所を作り、避難してくる人たちを配置する活動を行った。２年目の児童を各班のアドバイスをする役にし、活動を行った。「もし自分が避難する立場だったら、この避難所でいいのかなと考えれば、安心できる避難所になると思いました。日頃から防災に対する意識を高めたいです。」との感想があった。児童の作った避難所の内容を見ると授乳室を作るなど、昨年度は見られなかった設備を設置しており、平成３０年度の活動より周りや相手のことを意識した活動ができていた。

１２月２５日実施　　復興見学学習

・目的：地震で被害が大きかった地域の復興の様子を見学することを通して、創造的復興の次世代のリーダーとしての心を養う。

・活動の詳細：　今回の活動の参加者は１１名だった。平成３０年度のアンケートで「地震の被害を受けた地域に実際に行ってみたい」との記述があった。令和元年度は「アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム」に参加をし、助成金を受けることができたので、バスを使うことができるようになった。地震で阿蘇大橋が崩落するなど多大な被害を受けた南阿蘇村を見学学習することになった。実際に崩落した現場や道路がずれたところを目の当たりにして、地震の強さに驚いた様子だった。　震災の被害を伝える旧長陽西部小学校では、断層標本やプロジェクションマッピング、破壊された自動車等展示を見学した。また、震災の被害を受けた西原村、そして宮城県気仙沼市の子どもたちとの交流の機会を持つことができた。昼食は下宿などを営んでいた方々の「すがるの里」の復興弁当を、西原村や気仙沼市の子どもたちと意見交流しながら食べた。午後は、南阿蘇村役場で実際の見学やプロジェクションマッピング、講話を聞いてどのように思ったか、自分たちにできる備えは何なのかを付箋に書き込み、自分たちの思いをグループで伝え合った。 児童の感想では、「道路がずれていたことや橋が落ちたことに驚いた。」、「亡くなられた学生や『すがるの里』のみなさんの思いから命を大切にしていきたいと言う思いを持った。」、「学んだことを広く伝えていきたい。」また、気仙沼の子どもたちとの交流を通して、「さらに防災を通した交流を広げたい。」という感想も見られた。

１月３０日　防災バッグを作ろう

・目的：防災バッグの中に入れる物を考えることで、災害に対して主体的に備える意識を持たせる。

・活動の詳細：　防災バッグの中に、地震発生時に持ち出すものを、自分たちで考えて詰めて持ってきた。多くの子どもたちはたくさんの工夫をして持ってきていたが、２年目に参加した子どもたちはたくさんの電池を持ってきて、多くの人たちのために活動することを考えたり、火を起こす方法を調べていたりするなど、積極的に「自助」「共助」の姿勢の高まりを感じた。

２月２０日　救急法

・目的：救急法を身につけることで、災害に対して主体的に備える意識を持たせる。

・活動の詳細：　消防署の方に心臓マッサージまでの手順と AED の使用方法の研修をしていただいた。真剣なまなざしで、心臓マッサージに取り組み、AED の使い方も質問をしながら積極的に学ぶ様子が見られた。

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

9 月の研修を受けて、多くの事を学んだ。そこから様々な場面で、研修の中で学んだことを、本校の減災・防災教育での活用を行っている。熊本県では、道徳の教材の中で震災関連資料を用いているが、授業の中で研修で学んだことを伝える機会ができた。その授業は希望者に参観してもらい、同じ資料を活用し、他クラスでも授業の実施を行っている。また、研修の中で学んだ、防災体制の構築の資料に関しても参考にし、避難訓練や減災の学習などに活用をしている。同じように「子ども防災士活動」の中でも資料や活動内容等参考にしている。最も意識したことは「１人の先生が学べば、１００人の生徒が学べる。」という言葉と、研修の中で見た学んだ情報を発信する子どもたちの姿である。今年で３年目になる「子ども防災士活動」では、情報を発信する立場として、学んだことを伝える場を作った。　本年度は助成金の活用で、「子ども防災士活動」の現地見学会が可能になった。熊本地震で被害を受けた南阿蘇村に学習に行き、崩落した阿蘇大橋を見学に行き、南阿蘇村役場の方のお話、「すがるの里」のみなさんのお話、西原村と宮城県気仙沼の子どもたちと交流し学びを深めることができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

令和元年度の活動は、プログラムを受けて、情報発信者として活躍することを盛り込んだ。情報を伝えたり、交流を広げたりする事を取り入れ活動を進めた。年間の計画にはなかったが１２月１７日に避難訓練で、消火活動の方法を２名の教師に対し説明する活動を全校児童の前で行い、減災・防災のリーダーとして成長することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか

避難訓練で情報発信を行うことや南阿蘇村での学習を通して、変化が見られたことは伝える、交流する、配慮するといった、相手意識を持った行動を取っている様子が見られた。子どもたちの活動の様子や感想、これからやってみたいことを見ると、避難所運営ラーニングでは、授乳室をつくるなど、今まで考えることができていなかった他者への配慮が見られるようになった。そこでの経験から実際に防災キャンプを学校全体で行って運営したい、防災キャンプを行っている先進校の子どもたちに教えて欲しいとの感想が出ていた。また、南阿蘇村での見学の際に、西原村、気仙沼の子どもたちと意見交流する機会があった事で、もっと交流をしていきたいという思いが強くなっており、他者と協力して、減災･防災に向かう心が育ってきていると感じる。活動を始めた平成２９年度の希望は「濾過」「火起こし」のように野外活動をしたがった。今では「気仙沼の子どもたちと交流」「津波のシミュレーションや実験」「着衣泳法（水害の体験）」「救急救命」「地区の防災探検で危険なところを見つけたり、防災施設を見たりしたい」「消防訓練体験」「地震体験（起震車）」「防災キャンプ運営」のように減災、防災につながる活動を希望し、気持ちの変化が感じられる。１月２７日に強風が吹き、全校児童を保護者に引き渡すことになった。最後まで残っていた児童を図書室に集め、保護者の迎えを待った。その際、残っていた「子ども防災士」は積極的に引き渡しの支援を行い、他の児童を誘導したり、教師を呼びに行ったりするなど自発的に活躍する様子が見られた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

平成２９年に「子ども防災士活動」は始まった。大津小学校としては、学校と地域の防災についての連携を図り、学校防災体制の強化を目指したいという思いがあった。また、校区内の防災士の方々からも、「子どもたちに防災について教えたい」との言葉が聞かれていた。地域の防災士の方とは総合防災訓練や地震避難訓練などで学校防災体制構築のために協力体制をとっていたが、より一層の防災教育の推進のために、新たな活動、「子ども防災士活動」を始めた。活動を通していくうちに防災士から「子どもたちと防災バッグの話をしたよ。話しかけてきてくれた。」との話があり、子どもたちと防災士のつながりの深まりを感じた。また、防災士の方々も子どもたちと接する時間が増えるにつれて、子どもの力や考え方への理解が深まっている。また、子ども防災士活動について参加児童の保護者も関心を持ち、活動に当たって「お母さんと相談してきた。」など家族でも減災･防災に対する話をしている様子も見られた。教師に関しては自主的に子ども防災士活動を参観する教師も見られ、復興見学学習では全部で５名の教師が参加した。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

この活動は、学校の希望者だけの活動となっている。減災･防災に向ける心はとても高いものになっている。そのため、毎回活発な意見交換なども行われている。今年度からは学校全体でも活動できるように活動の場面が広がっている。子ども防災士も自分たちの活動に誇りと自信を持っており、この活動の成果が見られている点がある。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

これからの課題としては２点ある。１点は、参加していない児童に防災の意識を持たせるための活動が必要である。参加した児童の防災意識の高まりはとても素晴らしいものがある。全体にもその高まりを波及させたい。もう１点は、全校児童と地域の防災士の協力した活動を行う必要がある。より深く地域防災士と学校全体の連携を推進していきたい。

「子ども防災士活動」

平成 29 年度

子ども防災士による水消火器を用いた訓練

12 月 11 日　水消火器訓練

「わさ」の作り方についての実演

1 月 21 日　ロープ結び練習①

写真・実物を用いて説明する防災士

2 月 26 日　ロープ結び練習②

3 月 6 日　子ども防災士活動反省会

平成 30 年度

校長先生の話を聞く子ども防災士

7 月 20 日　始まりの会

強風を体験し、その強さを実感する。

9 月 26 日　台風対策

積極的に水消火器を使い訓練する様子

10 月 22 日　水消火器訓練

避難訓練でも使用しました

防災バッグの内容を紹介し合う様子

11 月 26 日　防災バッグについて

トイレになる椅子を説明する防災士

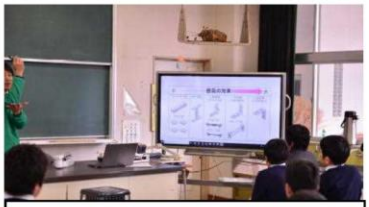
ベンチに収納されている工具を見学

12 月 26 日　防災フィールドワーク（冬休み中）

避難者をどのように案内するのか協議する様子

1 月 28 日　避難所運営ラーニング

質問に対し、それぞれ選んだ答えを出し合う児童


防災士による地震対策についての説明

2 月 18 日　防災クロスロードゲーム

修了証とバッジを受け取る子ども防災士

子ども防災士バッジ

3 月 18 日　子ども防災士活動修了式

子ども防災士活動を頑張り
将来の地域の防災リーダーを
目指します！

令和元年度　「子ども防災士活動」

９月１２日実施「子ども防災士活動」始まりの会

校長先生の話を聞く子ども防災士

防災について気をつけることを説明する防災士

今年度の子ども防災士は１２名

１０月２４日実施　水消火器訓練（１２月１７日実施　火災避難訓練）

消火器の使い方を教える子ども防災士

活動を見守る地域の防災士

全校児童の前で２名の教師に消火器の使い方を教えている様子

１１月１４日実施　避難所運営ラーニング

避難所を作っていく活動

様々な配慮がなされた避難所案

授乳スペースや着替える場所

１２月２５日実施　復興見学学習

阿蘇大橋崩落現場を見学

地震で壊れてしまった自動車

「すがるの里」の方のお話に感想を発表

気仙沼、西原村の子どもたちとの交流

南阿蘇村役場での研修の様子

令和元年１２月２６日（木）　熊日新聞　「防災意識 忘れない　～大津小１２人 南阿蘇村の被災現場見学」

防災意識 忘れない

大津小12人 南阿蘇村の被災現場見学

熊本地震

１月３０日実施　防災バッグを作ろう

それぞれで考えてきた防災バッグ

おむつやたくさんの電池

防災士からバッグを置く場所などの説明

２年目の子ども防災士の持ち物

２月 20 日　救急法

心臓マッサージを練習

感想を発表している様子

未来のために

学校名	大分県中津市立下郷小学校
担当教員名	梶谷　幸市

活動のテーマ	私たちの町におこった過去の災害を知り、身近な防災マップを作ろう
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	５・６学年（　１５人　）
活動に携わった教員数	２　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１２０　人【保護者（３０）・地域住民（７０）・その他（報道機関・教育関係者２０）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年１０月１５日　～　２０１９年１２月２４日
想定する災害	地震・河川氾濫・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

○過去に起きた下郷地区の水害について、当時の水害の様子を知る人たちや水害対策として河川工事を行ってきた人たちへの聞き取り調査を通して、自然災害の怖さを知るとともに、私たちが住んでいる地区で起こった水害に関わった人たちの思いや自然災害に対する防災意識や心構えについて考え、発信することができる。

○私たちが暮らす地域の防災マップづくりを行うことについて、実際に歩いて、危険と感じる場所や助けを求められる場所等を調査し、防災マップに表すことを通して、地域への関心度を高め、災害に対する防災意識や心構えについて考え、いざという時に自分の身を守る行動をとることができるようにする。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

○過去の水害から学ぶこと

①これまで学習してきた、過去に起きた下郷地区の水害について調べたことを、新たに付記・修正し、パワーポイントを利用してまとめ、11 月の学習発表会で全校児童及び保護者や地域の方たちの前で発表した。

○校区の防災マップ作り

②各自の家の周りや通学路において危険個所などを調べ、情報を交流した。

③住んでいる地域を中心に班を作り、校区の危険個所や避難所など助けを求められる場所を調べるために、デジカメ及びタブレットでその様子を撮影しながら探検し、調査を実施した。

④調べたことを地図にまとめ、情報を交流した。(学校の周辺を中心にした校区の防災マップ作成)

⑤作成した地図をもとに、登校時の地震を想定にした図上避難訓練を行い、どのように行動したらよいかについて討議検討した。(市教委・耶馬渓町各小中学校教員も一部参加して提案授業として実施)

⑥作成した防災マップを全校に紹介し、防災時の行動について広報活動を行った。

⑦子ども連絡所に新たなステッカーを持参し、地域の方たちへ子どもたち自身でお願いをした。

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

○現地視察から学んだことを校内研修で還流報告を行い、防災・減災教育の進め方について改めて学習した。

○これまでの防災・減災教育カリキュラムの見直しをした。

○子ども目線で危険個所や助けを求められる場所を調べ、校区の防災マップ作りを行った。

○タブレットを購入して視覚的に情報を収集・確認・提示・共有してマップ作りに役立てた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

○年間を見通して、学年や教員が連携した取り組みを行うことができる防災・減災カリキュラへと見直し、どの教員もどの学年も、定期的で連携した取り組みができるようにした。

○５・６年（2 つの学年）で一緒に活動する学習プログラムをつくり、連携した学習が継続的に行うことができるようにした。来年度は 5 年生が今回経験して得た知識や方法を受け継いで、継続した学習をしながらさらに補充・深化し、防災・減災の知識や意識を各学年へとつなげていくことができると考える。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

○身近な危険個所を意識して調査することで、日頃気づかなかった危険個所に気づくことができた。

○避難場所など助けを求められる場所を確認できた。

○災害時に自らどのように行動したらよいかを学ぶことができた。

○地域に出かけて実際に地域の方から話を聞くことで、地域の様子を詳しく知ることができた。

○地域の方に「子ども連絡所」のステッカーをお願いすることで、地域の方から温かい言葉をかけてもらい地域とのつながりを実感できた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

○地域の災害についての学習を例年の取り組みとして継承することができる。

○地域住民との交流ができ、保護者や地域住民に学校としての防災・減災教育の取り組みを発信することができる。

○学習資料や体験学習を提供してくれた山国川河川事務所や県土木事務所等の関係機関との連携がしやすくなる。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

○５・６年合同で学習を進めていったこと。

○子どもたちによる情報機器の活用。

○作成した防災マップを掲示し、来校者へ防災の取り組みを発信できた。

○県内報道機関を招聘し、取り組みの広がりと周知を広く発信できた。

○本校だけでなく、近隣小中学校の教職員や保護者への啓発ができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

○子どもたち目線でどのように行動するかなど問題解決型学習にしていくこと。

○保護者・地域とどのように連携した学習や避難訓練を計画・実践していくかなど連携の在り方が課題。

○修正した防災教育カリキュラムの実施。

私たちの町におこった過去の災害を知り、身近な防災マップを作ろう

大分県中津市立下郷小学校
梶 谷 幸 市

1

想定した災害

・河川氾濫による水害

2012年7月 山国川氾濫による下郷小学校及び付近の水害

2

想定した災害

・土砂災害（地震）

通学路にある崖・急傾斜地

2019年4月に起きた耶馬渓町金吉地区の土砂災害現場

3

活動内容

1. 過去の災害から学ぶ　2. 校区の防災マップ作り

4

活動内容1　～過去の災害から学ぶ～

「ふるさとの河川「山国川」を探る！
～第1弾「下郷地区の水害について調べよう」～

下郷公民館長への聞き取り

県中津土木事務所の方による話

5

活動内容1　～過去の災害から学ぶ～

県中津土木事務所による山国川環境学習

6

活動内容1　～過去の災害から学ぶ～

県中津土木事務所による山国川環境学習

7

活動内容1　～過去の災害から学ぶ～

県中津土木事務所による山国川環境学習

8

活動内容1　～過去の災害から学ぶ～

学習発表会での発表

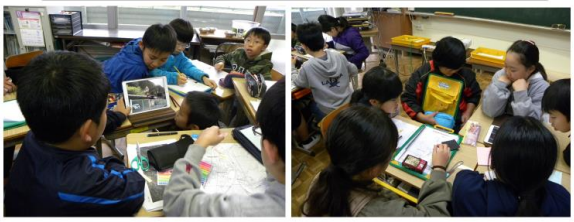
9

活動内容2　～校区の防災マップ作り～

校区探検

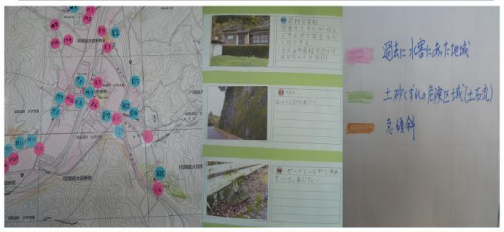
１０

活動内容2　～校区の防災マップ作り～



１１

活動内容2　～校区の防災マップ作り～



１２

☆マップを作った子どもたちの感想

・人が住んでいないところに子ども110番がはられているから、逃げるところを知っておいた方がよい。

・歩道がないところがあるので、道に白線を書いた方がよい。

・危険を知らせる看板もあれば役に立っていない看板もあった。・避難できる場所があった

・危ない場所もあった。危ない場所を事前に知っておくことが大事

・安全に登校できるように危ない場所に気をつける

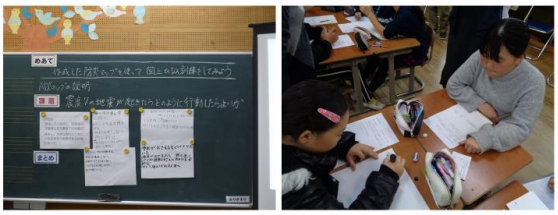
・カーブミラーなどの役に立つものがあった

１３

活動内容2　～校区の防災マップ作り～

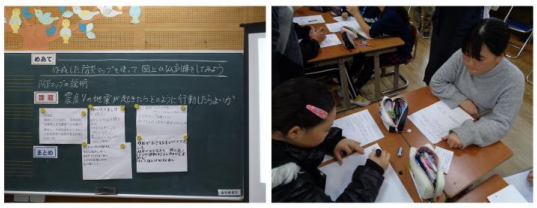
１４

活動内容2　～校区の防災マップ作り～



１５

活動内容2　～校区の防災マップ作り～



１６

通学路の防災マップ作る

大地震から命守る

１７

活動内容2　～校区の防災マップ作り～

１８

活動の特徴・工夫した点

○5年・6年（2学年）合同で学習を進めていったこと
（縦：学年のつながり）

○防災マップをもとにした図上避難訓練

○子どもたちによる情報機器(タブレット・デジカメ)の活用

○地域の方や土木事務所等の関係機関との連携
（横：地域・関係機関とのつながり）

○保護者・地域住民・地域の小中学校への提案授業への呼びかけ
（横：保護者・地域・教職員への広がり）

１９

子どもたちの変化・成長　(成果)

○身近な危険個所を意識して調査することで日ごろ気づかなかった危険個所に気づくことができた。

○避難場所など助けを求められる場所を確認できた。

○災害時に自らどのように行動したらよいかを学ぶことができた。

○地域の出かけて地域の方から話を聞くことで地域の様子を詳しく知ることができた。

○地域の方に「子ども連絡所」のステッカーをお願いすることで、地域の方から温かい言葉をかけてもらい、地域とのつながりを実感できた。

○災害のメカニズムを関係機関の方から教えてもらい、災害についての知識を得ることができた。

２０

活動の課題

〇子どもたち目線でどのように行動するかなど問題解決型学習にしていくこと。

（防災意識をどのように身につけていくか）

〇保護者・地域とどのように連携した学習や避難訓練を計画実践していくか

（保護者・地域との連携の在り方）

〇修正した防災・減災カリキュラムの継続した実践。

（組織的な体制・取り組みの維持・継続・発展）

２１

学校名	宮城県角田市立角田中学校
担当教員名	主幹教諭　阿部　和子

活動のテーマ	いま　私たちにできること ～　地域の中で共に生きる力を身につけよう　～
主な教科領域等	家庭科・保健体育科・道徳科・総合的な学習の時間・学級活動
活動に参加した児童生徒数	全学年（　４３２人　）
活動に携わった教員数	全職員３０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	消防署職員（１２名）　講演者（２名）　食生活普及員（３０名） 地域生活研究者（３８名）　他【地域の方・新聞記者】（１０名）
実践期間	２０１９年4月1日　～　２０２０年3月３１日
想定した災害	地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（変質者・動物）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

「災害が多い国に生きていく子どもたちの成長に向け，夢と希望を描かせたい」

～地域との連携・教科間の横断的な学習活動をとおして～

地球温暖化や地震，豪雨等，何があるかわからない，想定外のことが次々と起きている世の中にあっても，夢や希望をもって生きていくことができる生徒に育てたいと考えている。そして，「これからの教育の中で持続可能な社会について考えよう」ということが話題になっていることからも，このような中において，様々な体験をしたり，いろいろな考えの人と関わることで，自分の知識を増やし，次へとつなぐ意識を育てられる場の設定を考えた。身近な地域の方々との関わりをポイントに置き，１年間計画的に進めてみた。

中でも，いざという時に，自らの命を守る方法や知識・技術を身に付けさせると共に，地域の中で活動する意欲や志に結び付けさせたいと考えた。これからの世の中で，第一線で活動することを意識しながら，他者と関わることに勇気をもって取り組ませていきたい。という願いでの実践でもある。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（別紙資料　写真）

①消防署との連携（心肺蘇生法と命の授業＝救命救急Ｉの資格取得　・・・３学年　７月

②保育実習（２回の実習　絵本を活用しての防災活動・・・読み聞かせ活動）　・・・３学年　６月・１２月

③子ども食堂（お寺でのボランティア活動＝コミュニケーションを高める）　・・・家庭部　年中（月２回）

④角田市生活学校との連携（エコ生活・環境・防災教育＝講話・作品作り）　・・・１学年　４月～１月

⑤食生活普及委員＝ヘルスメイトとの防災教育等の連携（防災食・地域食）　・・・２学年　１１月

⑥資源回収（環境教育＝長期休業中の保護者・地域の方々との活動）　・・・全学年　夏休み

⑦地区清掃（地域理解，安全確認を含めた地区生徒会を活用した活動）　・・・全学年　１０月

⑧防災教育講演会（震災語り部・音楽家による講話）　・・・全学年　１１月

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。

研修会を受けての自校の活動の変更・改善点

階上中学校の生徒が，「私たちは語り継ぎ続けます。どんなに遠くてもどのような環境の学校にでも訪問し，私たちの思いを語ります。」という言葉を聞き，大変な状況であった津波の残した傷跡を目にし，どんな環境の中でも前向きに生きていこうとする子どもたちに成長させたいと思った。そのために，たくさんの方々からの刺激ある活動や関りを組み込んでの学習を計画した。

昨年まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会での学びにより，実践することのねらいや今までの計画を見直すことができた。

助成金があるため，講師依頼や実習費が使えることで，より多くのかかわりができた。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

・学級数が多いため，授業変更や日程の組み方に大きな課題があった。また，地域の方との両者の日程を調整することが大変であった。（高齢者・消防署等の突然の事態の対処の難しさが今後の課題でもある。）

・全教科での連携で取り組むことも効果的であると感じた。定着させること，教師間での共通理解のためにも効果的ではないかと感じている。教師も生徒も狭い範囲での学習が多い。３年間の外部講師等を活用した，視野を広げた指導の積み重ねが大きな効果に結び付くと強く感じている。

・自助・他助・共助・公助・産助と言われている中で，実生活との結びつきがまだ浅いと感じている。

・自ら地域の中で活動するという意識的な面での積極的な姿はまだ少ない。

②生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり，どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・想定外の台風１９号の被害があった。今までの経験や知識を生かしボランティア活動をしたり，地域の人たちと活動したりすることが多くなった。

・心肺蘇生法に関しては，関心が高くなってきている。５年目に入るが，更新した生徒が多いことと，卒業生から「学習したことが活かされている」などの話が聞こえてきている。

・地域の方々が学校の活動を理解し，生徒の様子をしっかり見つめて指導や声がけをしてくれるようになってきている。また，教師とゲストテティーチャーがお互いの思いや気持ちを語り合い，成長のための協力体制ができてきた。そして，生徒の意欲や関心も高まり，次への目標に向かう生徒も少なくない。

・防災食に関しては，興味関心が高く意欲的な学習が見られている。

・防災に関する知識は必要であるという認識は高まってきている。

③教師や保護者，地域，関係期間等（生徒以外）の視点から

・地域の方々からは，「様々な世の中の青少年のお話を耳にし，学校への出入りを遠慮していただけに，共に学べることが嬉しかった」という声がたくさん聴かれた。

・多方面で活躍している方々とのコミュニケーションの在り方を工夫することができ，どうあるべきかの学びの時間にもなり，大変良い機会となっている。また，地域の方々からも同じ意見が出ている。

・地域の方々の意見を優先した授業計画，最近の情報をフルに取り入れた題材を組み込んだことが，工夫点のひとつである。それを新聞等で紹介してもらえたことが，地域の方々が関心を持つことに結び付いた。

５）自校の実践で工夫した点，特筆すべき点

・実践するにあたり，教職員間での理解の時間を確保する大切さに気付かされた。年間計画を見直し，季節的な行事との連携や学校行事との連携プログラムとして全職員で共有することの大切さも感じた。

・年間計画の中で他教科間の連携や道徳科・総合的な学習の時間・学級活動等で関連を持たせることにより，繰り返し学習することができ，定着を図れるものと考えた。授業時数の確保，時間割の弾力的な運用などについて再検討することが継続への一歩と感じている。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

目まぐるしく変化していく社会の中で，学校教育だけでは十分な教育を成し遂げることが難しい世の中になっている。そのような中でも，他者との関わり，関わり合い方などは，一番大切なことであり，未来を生きる子どもたちにこそ「育てるべき力＝コミュニケーション力」であることを痛感している。

教科書で学ぶ知識は最低限の基礎力であり，私たち指導者自身が幅広い学びの上で授業内容を工夫する必要があると考える。そのお手伝いや情報源の提供者は，地域の人材でもあると思われる。子どもたちが，どのような世の中であっても，自らの力で生き抜いていく姿こそが，効果的な学びを提供できたかという私たちの評価になり，また，そうした姿を目にすることが，教師としての夢でもある。

お互いにできること，協力し合うことの中からこそ生きる喜びが満ちていき，豊かな世の中を築きあげられると感じずにはいられない。それが協働教育であり，連携教育ではないかと思う。まさに防災教育は，「かかわり・つなぐ」の実践を通して学ぶことのできる最高の教育と感じている。一層の工夫改善を図りたい。

7）その他

数年の継続学習は大きな実践力に結び付くと実感している。そのための助成金は大変有効である。

【参考資料】防災教育　実践資料　（実践内容・流れ・様子など）

☆ 自分の命は自分で守れ！

3年生の救命救急Ⅰ資格取得講習会。3年間のまとめとして保健体育・道徳・家庭科の連携により，心肺蘇生法を学んだ。9月の修学旅行や様々な行事の中で生かせることを願っている。

消防署との連携で進めている。

全員が取得したカード

真剣な取組が見られ，新聞にも掲載された。

☆いざというときに何ができるか？

山元町の語り部の方に東日本大震災時の様子や活動，思いや願いを語ってもらいながら，いざという時の心構えが大切かについて考えた。記憶にない生徒，うっすらと思い出す生徒たちの中には，改めて考える時間であった。また，被災地での音楽をとおして思いを伝えている演奏家の思いと演奏に触れながら自分の行動を見つめる時間になった。

防災教育としてハープの演奏を聴き（心の防災）

山元町の語り部の話で防災への心がけを・・・

弁護士さんからのお話

心の防災について（法的に）

☆伝え続けよう！語り継ごう　私たちも！！

今に自分にできることは語り継ぐこと。交流活動をすることではないかと，幼児に絵本を通して教える生徒たち。被災地の思いに触れるため，被災地の山元町の山下中学校に寄贈された「浴衣」を借り，使用後は洗濯・アイロンがけをしてお返しするという心の交流で実施する着付け教室。大切に使わせてもらい心を込めて仕上げをしてお返しする中での，お互いの心での交流があった。

園児に読み聞かせする生徒

卒業生の先輩から指導
被災地から浴衣借用で交流

☆いざという時の防災食に挑戦！知識と技術は大切！知らなかった～

サバの缶詰・トマト缶詰・カレー粉を利用した缶缶カレー，切り干し大根を利用したサラダ

凍り豆腐を利用したラスク，ビニール袋活用ご飯・パンケーキなど，常備品を活用した調理に挑戦し，知識・技術に触れた。新鮮な学びに舌鼓しながら感動の瞬間があった。地域のヘルスメイトさんとの関りも深められた。

1 学年と 2 学年で取り組んだ。
凍り豆腐ラスクは驚きであった。

自分で作ったケーキに感動！

☆防災グッズに挑戦！！心癒せるライト花瓶・丈夫な小物入れ・手拭いで自己管理！

牛パックをリサイクルし，花瓶になるもの。中にＬＥＤライトが入っていることで，いざという時の電気代わりになり，また心癒せる３色の光を楽しませることができる。地域の環境教育に力を入れている方々からの指導を生かしながら製作した。また，いざという時に持ち出せる新聞紙に柿渋（台風時屋根瓦の下に柿渋新聞紙を入れたを応用）を塗り，丈夫な小物入れを作った。

製作の様子を新聞で紹介してもらった。
子どもたちも感動していた。保護者からも感動と感謝のコメントをもらった。「きれいな光が天井に輝き，ほっとさせられています。使うことがないことを祈っていますが，いざという時の準備品になりました。」

☆いざという時に地域と関わる大切さをみんなに伝えたい！！

春と秋の交通安全週間に鶴と亀の５円玉の入った手作りのお守りを配っている。家族の安全は生徒たちの安全。地域の方々との交流であり関わりの一歩として取り組んでいる。

新聞で取り上げてもらうことで，子どもたちの安全に対する意識が高まった。

「子ども食堂」＝貧困のために食べられない子どもたちのためにと近くのお寺で実施している活動に生徒が参加している。月２回のボランティア活動をしながら，いざという時にどのように関わり，接することが心に響くのかなどを考えさせられている。

勇気をもって食べに来ることもボランティアといわれ，みんなで参加。会話の中での交流もあることを感じていた。

☆先輩が作った防災頭巾を受け継いでの避難訓練，救助活動！他助の気持ちを大切に！

先輩が作った１６５個の防災頭巾。引き継いで避難訓練。恥ずかしそうにしていたが，「あったかいし，安全なんだね！」と言いながら確認しあっていた。救助活動も頑張っていた。全校生の自宅を確認するために，本人が地図上にシールを貼り，みんなでこの辺に仲間がいるということを知りながら，いざという時の避難場所の確認などをしている。その後校長室で掲示。今回の１９号台風では，確認に使用した。

また，タオルでの防災グッズや防災笛，簡単持ち出し袋を作製中である。

☆これらの活動の始まり・・・・・

東日本大震災時後に，隣の山元町の被災状況を耳にし，何かしたいという気持ちから，防災教育に関心をもち，生徒と共に学ぶ時間を計画してきた。

どんな状況下にあっても，自分の命を守ってこそほかの人の命が守れることを学びあった。

台風１９号ではかなりの被害を受けた。しかし，生徒からの言葉に「勉強したことが行かされたよ！」最高の言葉を耳にし，一層の意欲を掻き立てられた。

ゴミ集めの手伝いや仮設での話し合いや，踊りによる心の触れ合いがスタートである。

厳しい対応の出会いが，心通じ合う関りに。生徒は感動していた。

助かった場所の見学
植樹で願いを・・・

学校名	石巻市立河北中学校
担当教員名	教頭　遠藤　貞悟

活動のテーマ	防災安全マップ作りによる本地域の災害特性の理解と地域貢献できる人材育成
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間、社会　）
活動に参加した児童生徒数	２学年（　４１人　）
活動に携わった教員数	１０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１００　人【保護者・地域住民】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年６月３日　～　２０２０年２月２８日
想定する災害	地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本学区は広く、東日本大震災時、被害が甚大であった大川地域を抱えている。震災の教訓を後世に伝え、これまで災害がなかった地域でも災害特性を十分に理解し、二度と同じ悲しみを繰り返さない人材育成が求められる。そのため、この河北地区に住む上で、地区の災害特性の全体像を掴み、大雨による川の氾濫や冠水被害、安全を確保できる避難場所の把握等をし、大型地図に危険箇所等を落とし込んだ防災安全マップ作りを通して、防災意識を高め、学んだことを地域の方々等と共有することで、地域に貢献する素養を育成したいものである。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

※昨年度（１年次）において本地域の治水について学習済み（国土交通省河川事務所と連携）

月	教科等	実践内容（主な学習活動）	時間
7		夏休みの各地区清掃活動時における危険箇所点検含む	
9	総　合	災害特性の理解（みやぎ防災教育副読本の活用）	３時間
9～10	社会科	地形図の見方を学習（河北地域の災害特性の学習含む）※外部講師の演習含む	３時間
11	理　科	気象に関する学習（大雨に関する知識及び災害発生時の対応に関する学習）	３時間
10	体　育	安全に関する学習（けが・事故防止に関する学習）	２時間
9～11	総　合	防災安全マップ作り（地域の災害リスクの洗い出し・共有・避難時の留意点等）	５時間
10～11		文化祭での発表、校区の各地区行政委員及び民生委員の会議での発表 ※地域向けの発表として行うはずであった石巻市総合防災訓練が、令和元年台風第１９号の影響により校区の被害が甚大であったため、復旧活動を優先することから本訓練が中止となった。	３時間
12		小学６年生への防災安全マップを活用した発表	１時間

※国土地理院の地図を活用し、防災安全マップを作成（約７ｍ×７ｍの地図）し、災害リスク等を落とし込み。

※地形図の見方に当たっては、東洋英和女学院大学　准教授　桜井愛子氏を講師に招き、講演及び演習により地形図のより詳しい読み取り方や避難時に生かす学習を行った。（本校独自予算で実施）

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

階上中生徒が階上小児童の防災マップの取組に、中学生がこれまでの学習を生かしたアドバイスを行っている点から、本校でも中学生と学区内の小学生との防災マップを通した学び合いに生かした。その際に大型地図を活用できたことは、校区全体の把握だけでなく、小学生からも危険箇所等に関する様々な意見が出るなど、ともに防災意

識の向上につなげることができた。さらに、地域と連携した教育活動の必要性から今年度は地区の民生委員と連携を図った取組に発展できた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

今回の実践を通し、今後の減災教育として本校の教育活動に根付かせるきっかけとなった。特に、９月の研修会の学びは、減災教育の必要性を本校の防災教育カリキュラムに落とし込めたこと、また、震災の教訓を風化させず、今後の災害に備える各校の実践を肌で感じることができたことは大変意義深いことである。本校では転入職員を必ず最初に大川小学校に案内し、震災の教訓を考えてもらっており、今後も継続していきたい。さらに、教科と領域の融合した実践により本校における持続可能な教育活動にマネジメントできたことが成果であり、今後も他の防災教育の先進事例を学び、積極的に防災教育展開の在り方を教員で協議していきたい。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

社会科をはじめとする地域の災害特性に関する学習では、どの生徒も災害リスクの洗い出しに積極的に取り組むなど地域の一員として自覚が芽生えてきている。一人暮らし老人宅に配る防災キャンドルの作成を有志で募集したところ、多くの生徒が参加し手作りのキャンドルを作製した。また、令和元年台風第１９号接近時には、安全な場所への避難（高台の避難所避難や自宅の２階に避難など）や避難ルートの確認、非常持ち出し袋の準備など、すべての生徒が台風接近時の安全確保に関する対応を取れた。さらに、防災教育で培った安全力の指標として事故の減少を掲げており、全校生徒で日本スポーツ振興センター災害共済給付件数を一桁と目標設定しているが、今年度該当学年では２件（前年度５人）と安全意識の向上にもつながった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教職員が校区の地域特性を事前に把握して指導に当たったことで、生徒の理解促進につなげることができたと考える。また、地域や防災担当部局の方々にとって、生徒による地域の災害に関する学習について共有できたことや、災害時の対応に関する意見を交換できたことは有益であったと感想をいただいた。地区の民生委員の方々も学校と関わっていきたいと思っている中で、学校からのアクションで災害時の対応を共有できたことは今後につなげられるものとなった。さらに、台風第１９号時には、保護者も生徒とともに早めの避難行動をとるなど、防災学習への理解を示していただいている。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

グループ毎に地形図を活用して校区の地形を学習したことで、どういう場所が低く大雨時に危険なのかなど把握できたこと。特に地形分布図を使って、地域の地形の特性を把握できたことは、大雨での洪水時等の避難行動を考える際に役立てられるものになった。生徒が防災学習で学んだことを地域の方々と共に共有したことで、地域と共に災害時の対応を考えるきっかけになったこと。また、次年度中学生となる小学６年生の児童と校区の災害リスクや危険について学べたことで、中学校入学後も安全に登下校できる機会につながった。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

来年度は、令和元年台風第１９号でどの地域でも災害が起こりうることが明らかになった教訓を踏まえ、今年度の学びを継続するとともに、地域との防災訓練時だけでなく、生徒が行政委員や民生委員をはじめとする地域の方々と地域防災について語り合える場を設定し、地域と一体となった防災の一役を担わせたい。

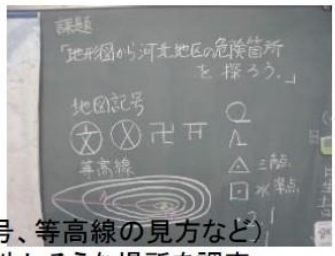
７）その他　別紙補足資料参照

【補足資料】
石巻市立河北中学校の取組について

アクサユネスコ減災教育

1

防災マップを活用した学習
・・河北地区の危険箇所を学ぶ・・



〇2年社会の授業で地図記号と地形図の読み取りを学習（地図記号、等高線の見方など）
〇住んでいる地区ごとに、地図上から地域の危険箇所や災害が発生しそうな場所を調査
〇地図上に目印として貼り、学級全体で共有

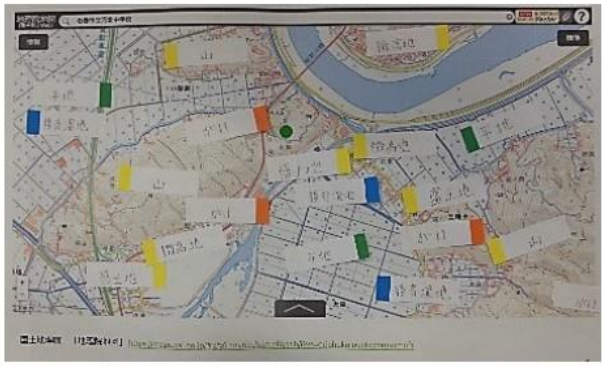
1年時には総合的な学習の時間で、農林水産省東北農政局職員から河北地区の治水に関する講義を受けている。

2

防災教育研修会で河北地区の地形を学ぶ

東洋英和女学院大学
准教授　桜井　愛子　氏を講師に招き、
1・2年生を対象に研修会を実施。

河北地区の地形図から災害特性を学び、
避難行動に役立てる学習



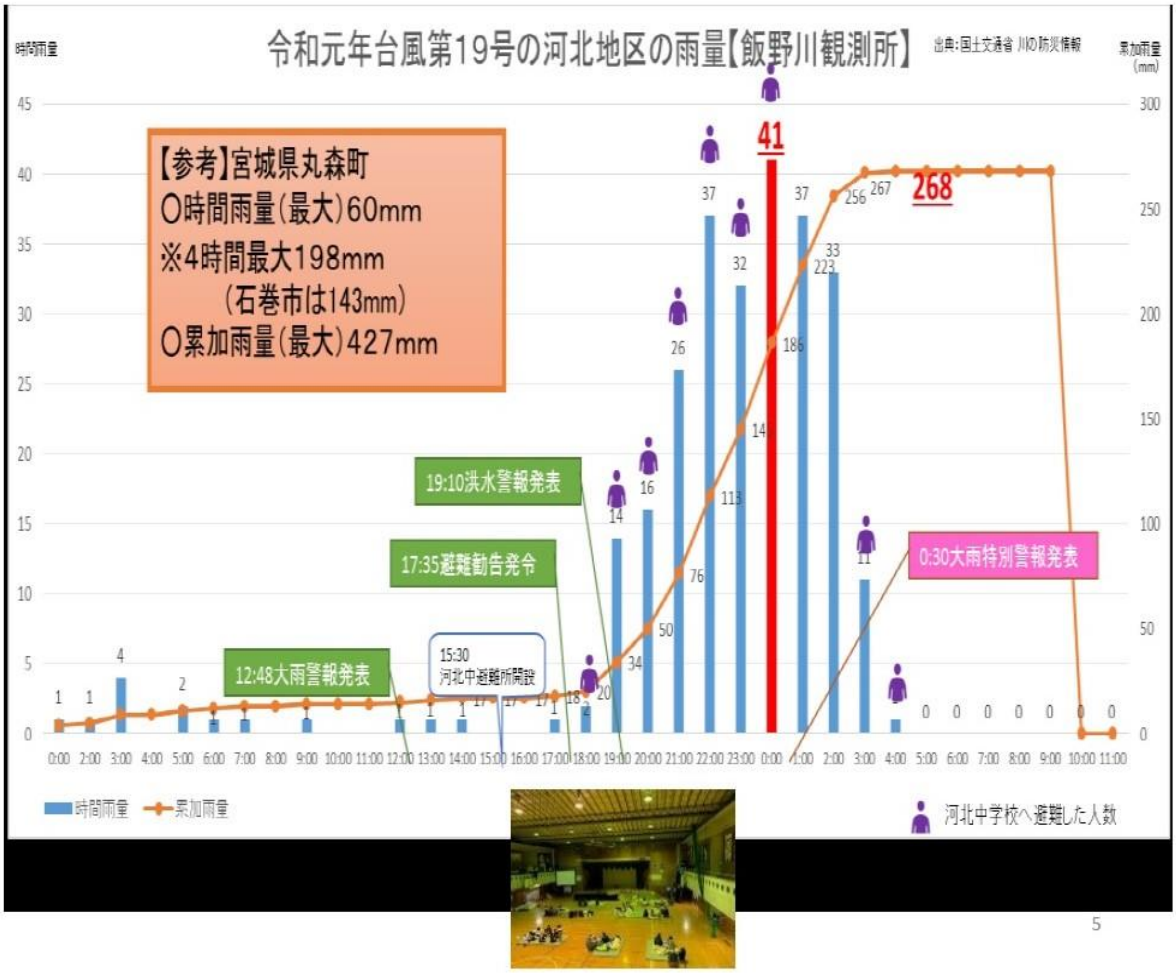
3

地形の学習を生かして災害時の危険箇所を大型マップに落とし込み，全体で共有
（令和元年台風第19号の大雨による被害状況も加えて）

台風第19号二俣地区の冠水
→

台風第19号大川地区の冠水　地域によっては1m以上の床上浸水の場所もあった

4



5

台風第19号での対応調査(一部)

1　台風接近・通過にあたって，とった行動について（複数回答可）　(人)

	1年	2年	3年	計	割合
テレビやラジオ・インターネット等で台風の情報を収集した	44	34	46	124	87.9%
テレビやラジオ・インターネット等で石巻市からの避難情報を収集した	28	24	33	85	60.3%
避難場所を事前に確認した	23	19	22	64	45.4%
避難経路を事前に確認した	4	5	7	16	11.3%
家族と避難方法を確認した	13	10	17	40	28.4%
その他	6	3	5	14	9.9%

※何もしていない生徒はいない。その他には避難グッズをまとめるなどが多かった。

2　台風接近・通過に当たり，どこに避難したか　(人)

	1年	2年	3年	計	割合
自宅内	43	33	45	121	85.8%
避難所へ	3	2	6	11	7.8%
避難所以外の場所（親せき宅など）	6	0	3	9	6.4%

※避難した時間 :15時1名、16時1名、17時1名、18時1名、19時1名、20時1名、21時1名、22時1名、23時1名、0時3名、2時1名

【調査して見えた課題】
●台風接近時のとる行動については、すべて100%にしたい。
●避難準備及び避難勧告の段階で避難開始ができると良い。

※避難については、自宅内のどこに避難したか調査すべきだった。

6

6

地域に貢献するための防災教育での学びを共有

地区の行政委員や民生委員が集まるそれぞれの研修会で、生徒が防災に関する取組を発表した。
また、来年度中学校に入学する小学6年生の交流会時にも発表した。
ともに、防災マップを通して学んだ地域特性を踏まえ、災害時の対応について地域住民と共有し、避難訓練への参加も積極的に呼びかけた。

民生委員さん方へ取組を発表

小学6年生へ取組発表↓

7

7

学校名	横須賀市立浦賀中学校
担当教員名	山口　美波

活動のテーマ	自助・共助の意識を高める防災教育
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	１・２・３学年（　８００人　）
活動に携わった教員数	５０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	４００　人【保護者・地域住民】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１日　～　２０２０年３月３１日
想定する災害	地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

横須賀市浦賀地区は狭い港に複雑に入り込んだ海岸の浦賀港に囲まれている。江戸時代には津波の被害で１万人の命が失われている。しかし、住民にはその意識は薄くなってきているように感じる。

・防災教育は、中学校教育が最後の期間であり、平常時にいかに教育を積んでいるかが緊急時の生死の境目である。多くの人の命を守るために、中学校 3 年間のすべての時間を「命の教育」として捉え、災害に関する知識と地域の避難所での実践を育成することをねらいとしている。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

『自分と仲間の命を守れる人となるために』、3 年間の全ての時間において指導する。特に、1 年地域別の防災学習、2 年校外学習（そなエリア・日本科学未来館）、3 年修学旅行（陸前高田市）に向けて、動画を用いた集会や図書を用いたまとめ、語り部さんの講演学習を行った。さらに、防災教育用品を用いて、教室内でできる取り組みを充実させる。

４月　入学式 **地域集会** ５月　**校外学習** **1年生：観音崎 FW** **2年生：横浜 FW** **3年生：修学旅行** ６月　定期試験	７月 ８月　夏休み ９月　体育祭 定期試験 １０月　駅伝大会 浦中祭 **一時避難場所からの避難訓練** １１月　合唱コンクール ２年生：職場体験	１２月　定期試験 １月 ２月　定期試験 **1年生：地域防災学習** ３月　３年生を送る会 **3年生：地域の先輩と触れ合う会** 卒業式

・年間計画

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

平成 28 年度～令和元年度の 4 年間を通して、横須賀市教育委員会の研究委託を受けていた。4 年間の中で、防災教育を命の教育と位置づけ、災害の恐ろしさや危険性について、取り組み内容を充実させてきました。

防災教育を安全教育として捉えさせるだけでなく、生徒一人ひとりがゲームを通して、自分ごととして捉えさせたいと考えました。そこで、助成金で購入したものが、防災すごろくです。本校は学級数も多く、資

金を用意できませんでした。今年度は購入することができ、子どもたちが災害時にとるべき行動を考えるきっかけができました。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

A.『命の教育』をつなぐ、総合的な学習の時間の３年間の取り組み

4 月には、全校生徒が参加する地域集会を行っている。1 年生の 2 月には各自治会で、避難所を運営するときに、担い手になるための防災学習をした。そして、2 年・3 年の校外学習の事前・事後学習を通して、自分と仲間の命を守れる人となるための学習を行う。2 年生では、東京広域臨海公園、そなエリアと日本科学未来館で学習した。また、3 年生では東日本大震災で被害に遭った岩手県の陸前高田市の修学旅行で学習した。3 年間の「命の教育」に系統性もたせることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

地震災害をはじめ、気象庁から発令される災害情報を正確に理解し、判断できるような生徒を育成できるプログラムを立案できた。災害時に、自分と仲間の命を守れる生徒を育成するための基本的な知識を習得できた。

※命の教育は、この 3 年間で終わるものではなく、生涯の学習につなげていきたい。子どもたちはいつか大人になり、故郷を離れたときにも自分と仲間の命を守れるようなきっかけづくりができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

A. 地域集会　※37 自治会の自治会の役員の人と全校生徒の顔合わせを行う。

B. 一時避難場所からの避難訓練（学校の文化発表会と抱き合わせて行った

C. 自治会ごとに避難所運営時に役立つ防災知識を学んだ。（1 年生）

年間計画にあるように、中学校 3 年生の地域の先輩とふれ合う会(老人会)を実施する予定だったが、新型コロナウィルス蔓延を防ぐために、中止となった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

校内で行ったアンケート調査（生徒・保護者）の防災に関する意識が高くなっていたことがわかる。また、3 年生の修学旅行を終えると、生徒の心情にも大きな変化が見られた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①体験的な活動することで、自分ごととして捉えさせる機会をつくる

②自分の住んでいる地域の特色を知り、それを生かしつつ、独自の解決を見いだす

③未知の災害においては、3 つのバイアスの視点をもたせよ

①～③の教訓を得ることができた。2 月の実践報告を受け、本校でも手ぬぐいからポケットティッシュを折り、いざというときに、自分の命を守れる手立てを身につけさせたい。

学校名	富山市立楡原中学校
担当教員名	河合　佐智代

活動のテーマ	広げよう防災　～私たちが地域のためにできること～
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間、特別活動　）
活動に参加した児童生徒数	全学年（　３３人　）
活動に携わった教員数	８　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	５０　人【保護者・地域住民)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	２０１９年６月３日　～　２０２０年２月２０日
想定した災害	地震・台風・洪水・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①火災・地震等の緊急時に起こる様々な知識を身に付け、危険を予測・判断し、安全に行動する能力や態度を育て、的確な判断と非常時に必要な安全な行動ができるようにする。

②本校校区は、神通川、神通峡谷が近くにあり、異常気象の影響を受けやすい地域であるため、中学生として地域を支える活動への意識と実践力を高める。

③SDGs - ESD 教育の視点に立ち、住み続けられるまちづくりについて考えさせ、課題発見力を蓄えさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①「青少年赤十字防災教育プログラム」を用いて、自然災害の基本的な知識や災害時に自ら考え、判断し、危険から身を守るための行動を学ぶ。（１学年　６月、７月）

②「平和の鐘を鳴らそう」のボランティアに参加し、SDGs 環境カルタを小学生や地域の方と行い、安心・安全で住み続けられる街づくりについて語り合った。(全学年　８月)

③防災に関するテーマを決め、班単位で調べ学習を行う。（１年　夏休み、９月）

④小中合同学習発表会で、地域の防災について、保護者や地域の方に伝え、意見を求める。（１年　10 月）

⑤９月の研修会での資料や写真を用いた「東日本大震災の被災地・気仙沼を訪ねて」の授業を通して、被災地の復興の様子や防災の取組を学ぶ。（１年　10 月）

⑥９月の研修会で訪れた階上小学校や階上中学校の防災学習の取組を紹介し、地域に防災の取組を広めるための具体的な活動内容を考えるための学級会を開く。SDGs との関連についても考える。（１年　11 月）

⑦地域のユネスコ活動で、SDGs 環境カルタに参加した体験と階上中学校の取組を参考に、１、２年生全員で防災カルタづくりを始める。（１、２年　12 月～２月）

⑧１年間の学習成果を SDGs - ESD 富山シンポジウムで行う。（１年　１月）

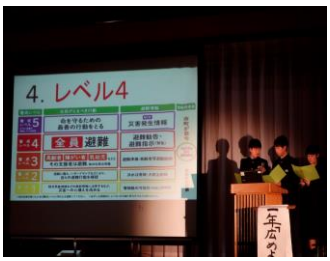
⑨併設する小学校や地域のデイサービスセンターで防災カルタを紹介し、防災の大切さを伝える。

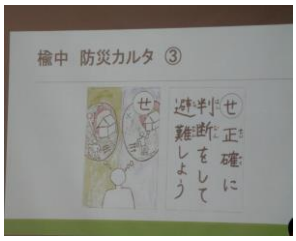
（１年　２、３月）

⑩地域の方や高齢者と「防災体制、防災への日頃の意識」というテーマでワークショップを行う。

（１、２年　２月）

【小中合同学習発表会の様子】　　【SDGs - ESD 富山シンポジウムの様子】





3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・東日本大震災後の気仙沼市の写真や震災遺構の動画等を中心とした被災の現実から学ぶ防災学習の展開。
・生徒自身の気付きや思いを引き出し、防災・減災について考える授業構成の工夫。
・被災地での減災教育の視察や研修会での専門的な学びから、減災教育を指導する側としての意識の変化。
・階上中学校の取組を参考にした防災カルタの制作。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・これまでは訓練主体の防災教育であったが、総合的な学習の時間を防災教育の中心に据えることにより、探求する防災教育となり、継続して取り組む体制ができた。
・防災教育が災害に対する備えに終わることなく、教科等と防災教育を関連させることで、教育課程を新たな視点で見直す機会となった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・身近な地域の防災対策について調べることにより、防災を自分のこととして捉え、住み続けられるまちづくりについて考えることができた。
・活動全体として、自分にできる防災対策をしようという意識と地域のために活動したいという実践力が高まった。
・学んだことを地域に発信し、意見を受け止めることで、自分や大切な人の命を守ることへの意欲が高まった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・教職員にとって、防災教育を行う中で、自然災害への危機意識を高めることができた。
・家族全体で、防災について考えなければならないという意識が高まってきた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・小中合同学習発表会でプレゼンテーションソフトを用いて学習成果を伝えることで、地域の方にも防災の大切さを知ってもらうよい機会となった。また、発表の場を大勢集まる場にすることで、生徒の学習意欲を高めることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・地域の少子高齢化が進む中で、地域の担い手として中学生の役割はさらに大きくなると思われる。高齢者、障害がある方への関わり方について考える視点を加味し、現在の取組を継続しながら、中学生としてできることを実践し、地域の防災意識の高まりに貢献させたい。

学校名	岐阜県羽島市立中島中学校
担当教員名	西村　典正

活動のテーマ	自然災害についての理解を深め、減災及びリーダーとして行動できる生徒の育成
主な教科領域等	教科領域（　理科・家庭科・学校行事・総合的な学習　）
活動に参加した児童生徒数	１・２・３学年（　２０４人　）
活動に携わった教員数	２３　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２００　人【保護者・地域住民・その他（　市危機管理課職員　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９ 年4月1日　～　２０２０ 年3月３１日
想定した災害	地震・洪水・河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①生徒に災害や減災についての知識及びリーダーとしての力を付ける。

　自分が生活している地域に起こる可能性の高い災害について原因や具体的な災害程度・規模について知る。

②それらによる災害を減らすには、事前に、また、その時、その場でどのようにしたらよいのか、中学生・青年として、どんなことができるのかなどについて知る。

③避難所で生かせる力をつける

　教員の指示に従って避難するだけの立場から、自分の命を守るだけでなく、自分で考え、自らの力・長所・個性や身近にある物を自分で考えて生かし、自分以外の人の支えになろうとする意識を高め、力をつける。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

　災害を「知る」・自分が「できる」・自分から「動ける」を目指した３年計画の策定・実践（本年度は１年目）

①市役所防災担当課との連携、市からの協力を進める。

・全校生徒に防災備蓄倉庫内の備品の紹介、使い方の実演、非常食の試食

②自分に身近なこととして考える。

・自分の通学路で水害の危険のある箇所を考える。ハザードマップで自宅の位置を確かめる。

・学校が避難場所になったとき、使える物・使い方を考える。本校の緊急時開放エリア図を知る。

　理科室：手回し発電機、調理室：食器、武道場：畳　など

③教科の学習内容と関連付けて学ぶ。

・理科：１年地震、２年水害、３年発電・気候変動

・技術：電気コードの作成、ＬＥＤライトの作成　　など

④地域との連携強化

・同窓会、学校運営協議会、ＰＴＡ役員会への取組紹介と情報提供の依頼

・非常時の学校施設利用図の配布、災害用伝言ダイヤル等の紹介

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

　昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①生徒が考える機会や体験を通すこと、また、より身近に感じさせることの大切さを一層感じた。

②受け身・公助頼みから、自分で守る・自助の重要性を他へのサポート役としても意義づけるようになった。

③校区の浸水想定図と本校の緊急時開放エリア図（避難場所としての配置・区割り図）をカラー印刷し、学習および地域団体との会合で活用した。テーマ「私の家の一階は大丈夫？」「下校直後、戻る？行く？」
④非常食や災害時用品を購入し、試食や体験活動・紹介に活用し、より身近に感じさせることができた。

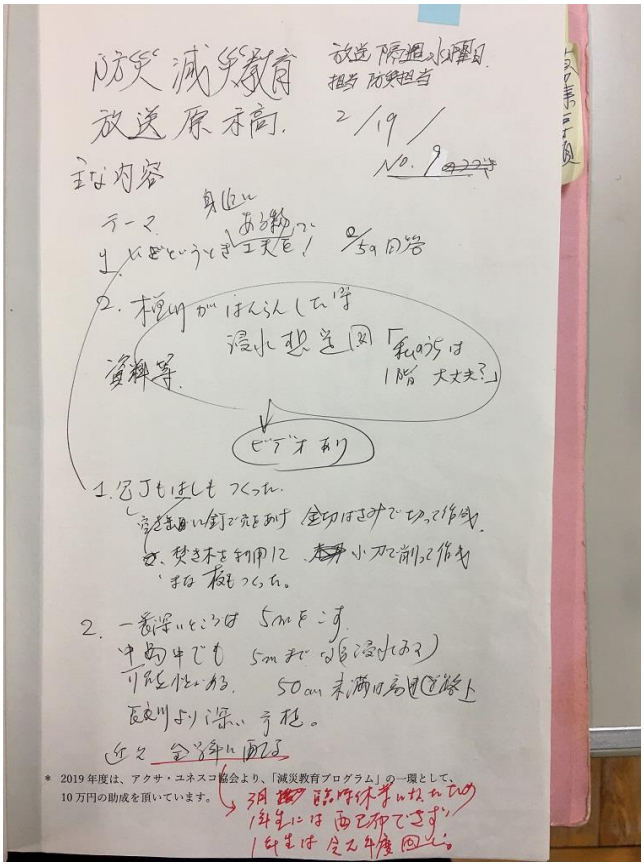
４）実践の成果
①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から
　これまでの「命を守る訓練（避難訓練）」では消防署のみとの連携だったが、市役所防災担当課との連携・協力が進んだのを始め、地域などに連携範囲を広めることができた。同時に、関係団体の声や期待を聞くことができ、学校の取組への理解も進んだ。
・ＰＴＡ役員会、同窓会役員会・総会、学校運営協議会、学校保健安全委員会で取組を紹介し、情報提供の依頼（用紙配布）をした。
・護者に災害用伝言ダイヤルと無料体験の紹介、校内およびコミュニティセンター等へ地域（校区）の浸水想定図と本校の緊急時開放エリア図非常時の配布、掲示依頼をした。一部自治会で配布した。
②生徒にとっての具体的な学び（変容）、身につけた力（資質・能力・態度）。
＜自分に身近なこと「じぶんごと」として考えた。＞
・自宅・自分の通学路で水害の危険のある箇所を考えたり、市の浸水想定図で調べたりした。
・自分の掃除場所での危険箇所を自分の目で確かめたり、考えたりした。生徒目線での発見があった。
・学校が避難場所になった時に使える物・使い方を考えたり、幼児・老人やけが人の対応、精神の安定について自分のできることを考えたりした。（年少者の遊び相手、高齢者のマッサージ、楽器演奏など）
・校内の防災備蓄備品と使い方、地域および本校在校生に防災士がいることを初めて知った。
・補助金で購入した非常食および市から提供を受けた備蓄期限間近の非常食を、生徒家族と本校職員で２回試食し、感想を得た。また、簡易トイレの紹介や防寒（サーマル）シートの着用体験ができた。
③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
・教員…本校の備蓄倉庫内の備品を知った。市・地域・他校の減災・防災への様々な取組を知った。
・保護者…非常食等について知ることができ、家庭でもその必要性について考えるようになった。
・地域の方々…「とても大事な取組だ。会として考えたい。ハザードマップを配布したい。」

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
・10 月から隔週水曜日の給食時、水害・防災・減災・対応等について啓発放送（「水がいい＝水害の日」）を始めた。この中で、生徒の反応や非常時に役立つアイディアを紹介し、生徒の関心が高まった。
・生徒自身が自分の目で確かめたり、自分の関わりの中で考えたりすることを導入した。

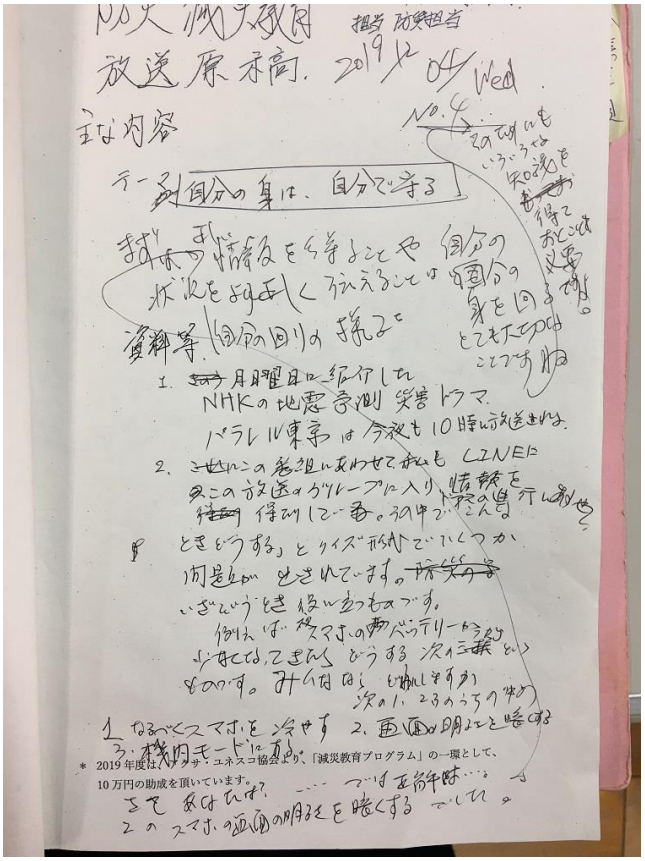
６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
①本年度始まった県と大学との連携による防災・減災への取組に参加し、多くの地域・学校が取組を進めていることを知った。大いに今後の参考（「できる・動ける」）になった。
②発災時・発災後についてより具体的にイメージできるよう、様々な機会に体験・制作を取り入れていく。

７）その他（※特にあれば記述）
①校内の担当者がかわってもアイディアと意欲・意識をもって継続して進めることが極めて重要である。
②防災・減災への必要性は感じているが、対応のための体験や日常生活での具体的な備えのある家庭・大人は少ない。まだ、「ひとごと」「そのとき」「公助ありき」「なんとかなるさ」という感覚が多いのではないだろうか。

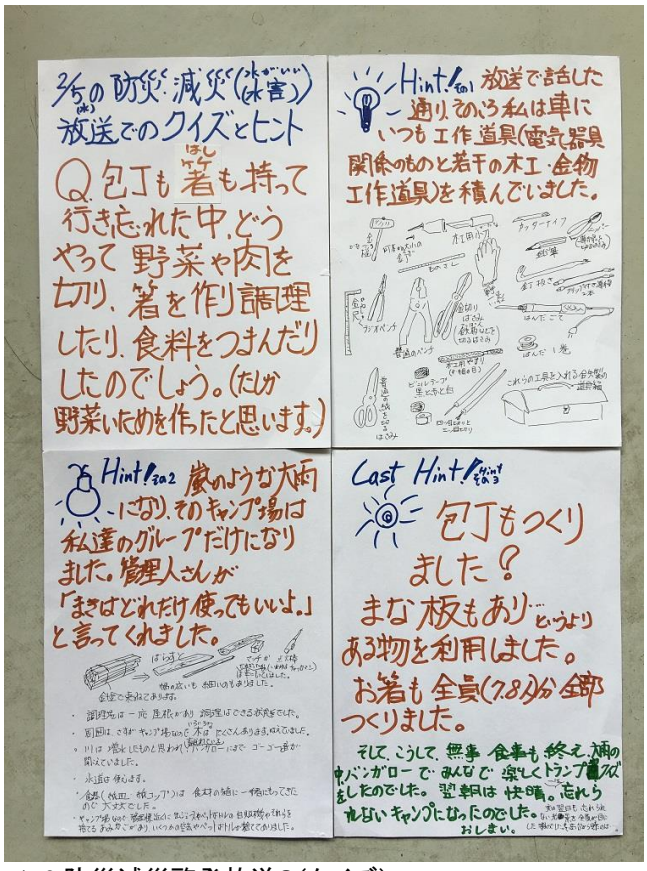
補足資料



1－1防災減災啓発放送原稿1



1－2防災減災啓発放送原稿2



1-3 防災減災啓発放送3（クイズ）

2-1 図書室に設置した震災コーナー1

2-2 図書室震災コーナー2

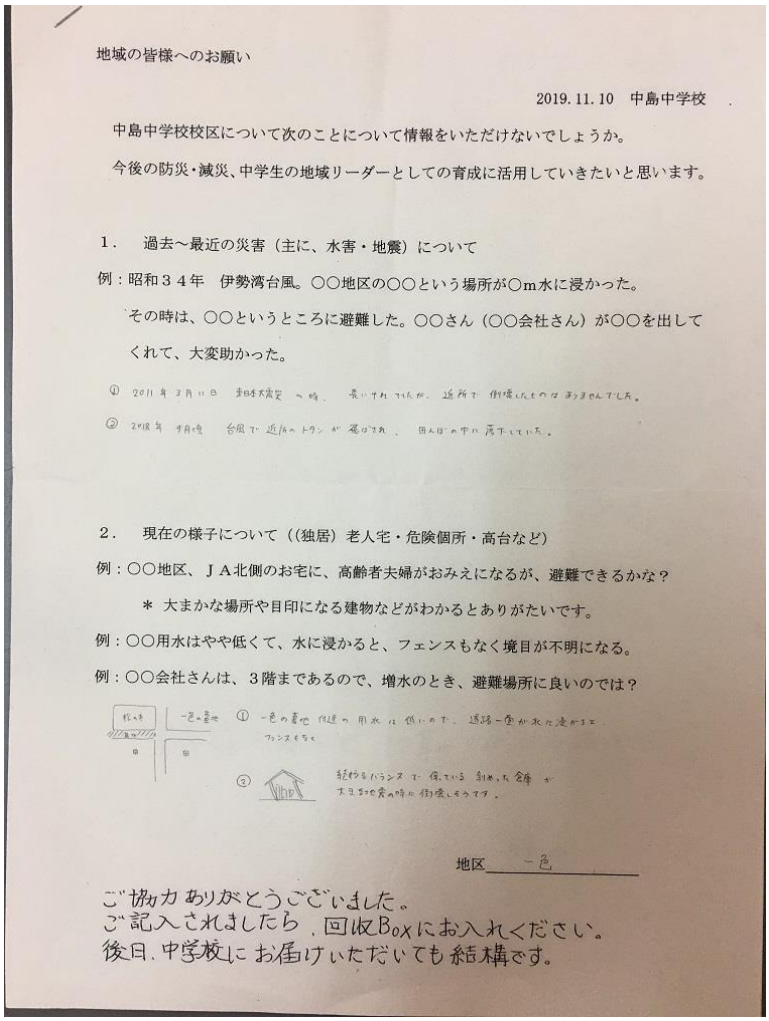
2-3 図書室震災コーナーの呼びかけ

3-1 体育館入口に緊急時開放エリア図を表示

3-2 体育館入口の緊急時開放エリア図2

4-1 地域防災訓練会場でのアンケートの呼びかけ

4-2 地域防災訓練訓練会場でのアンケート2



地域の皆様へのお願い

2019. 11. 10　中島中学校

中島中学校校区について次のことについて情報をいただけないでしょうか。

今後の防災・減災、中学生の地域リーダーとしての育成に活用していきたいと思います。

1．　過去～最近の災害（主に、水害・地震）について

例：昭和３４年　伊勢湾台風。○○地区の○○という場所が○m水に浸かった。

その時は、○○というところに避難した。○○さん（○○会社さん）が○○を出してくれて、大変助かった。

① 2011年3月11日　東日本大震災の時。　長い揺れでしたが、近所で倒壊したものはありませんでした。

② 2018年　9月頃　台風で近所のトタンが飛ばされ、田んぼの中に落下していた。

2．　現在の様子について（(独居）老人宅・危険個所・高台など）

例：○○地区、ＪＡ北側のお宅に、高齢者夫婦がおみえになるが、避難できるかな？

＊ 大まかな場所や目印になる建物などがわかるとありがたいです。

例：○○用水はやや低くて、水に浸かると、フェンスもなく境目が不明になる。

例：○○会社さんは、３階まであるので、増水のとき、避難場所に良いのでは？

① 一色の農地 付近の用水は低いので、道路一面が水に浸かる。フェンスもなく

② 紹介するハウスで保育している乳幼児の命が大雨などの時に危険しそうです。

地区＿一色＿

ご協力ありがとうございました。
ご記入されましたら、回収Boxにお入れください。
後日、中学校にお届けいただいても結構です。

4-3 地域防災訓練会場でのアンケート3

5-1 生徒玄関での非常用物品の展示

学校名	袋井市立袋井中学校
担当教員名	弘中涼子　寺田将大

活動のテーマ	地域のために中学生の力を発揮する　減災の観点から
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	（　３学年　２６４人）（複数可）
活動に携わった教員数	１４　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	５　人　【保護者・地域住民・その他（西部地域局・消防署・市役所）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年５月３１日　～　２０１９年１２月２５日
想定した災害	地震

活動報告

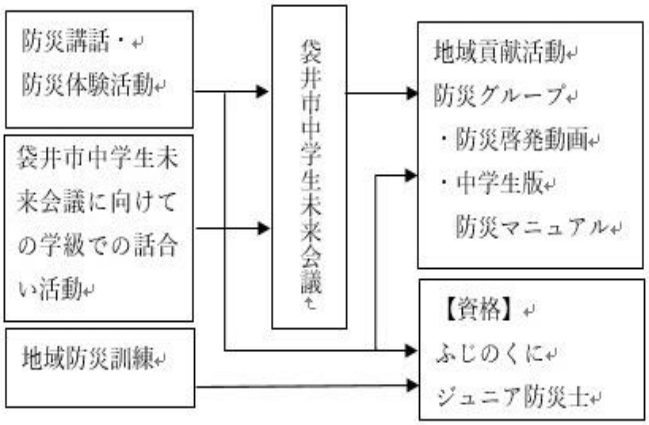
１）活動の目的・ねらい

静岡県ではかねてより南海トラフを中心とした非常に強い地震が発生する可能性が高いと言われている。そのため、以前から減災に対する意識は比較的高い地域に当たる。本校では、年に２度の防災訓練の実施と地域防災訓練への参加、防災講話を中心に減災教育を行ってきた。しかし、日本各地で起こる自然災害や避難生活、また現在の少子高齢化する地域の課題を見つめた際に、中学生が求められる行動が「自分の命を守る」ことから、「地域のために力を発揮する」を加えることに変化してきている。現に、被災地では中学生、高校生の若い世代が炊き出しや、がれきの撤去などで率先して役割を担っている。そこで総合的な学習の時間で３年生を中心に「なりたい自分になろう」を大テーマに、減災をきっかけに地域の課題を見つめ、地域のために何ができるかを考えた。活動を通して、地域の担い手となっていけるように学習を計画した。以下に挙げる実践を生徒が経験する中で、被災時に中学生に何ができるかを生徒自身が自覚し、率先して行動できる意識を持てるようになることをねらいとした。また、地域から頼りにされる中学生となることも期待して実践を行った。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

①防災体験学習

３年生を対象に静岡県西部地域局の方を招き、防災　講話や災害時判断ゲームを行った。また、消防署や市の職員の方に協力いただき、ＡＥＤの使い方やロープ結束、非常食の調理などの体験活動を行った。



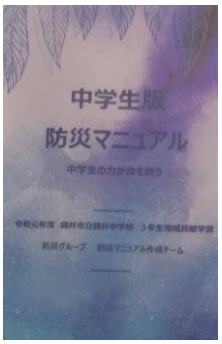
②袋井市中学生未来会議

袋井市では毎年８月に各中学校から代表者が参加し、市長をはじめ袋井市役所や市議会議員、地域の方々に中学生の意見を発表する場がある。本校からは生徒会本部役員と３年生学級代表が参加し「防災や防災時における中学生に求められることと実践」を大きなテーマとし「袋井市の課題と被災時における心配」「防災について中学生ができること」「どのように発信するか」「防災等について袋井市に聞きたいこと」を提案した。なお、この活動の準備段階では、３年生が袋井市の防災上の課題と自分たちにできることを学活の時間に学級ごと話し合い、学年集会で発表することで土台を作り、学級代表を中心として提案内容をまとめた。

③地域貢献活動

３年生の総合的な学習の時間で地域貢献活動を行った。複数のテーマを設け、地域のために何が出来るかを探究した。その中で、防災を選択した生徒が防災マニュアル作成と啓発動画の作成を行った。啓発動画では釜石東中学校の生徒が作成した「THE てんでんこ THEATER」を参考にした。

参考動画では津波が起こった際にどう行動するかを中学生扮するヒーローが教えていくストーリーであり、釜石東中学校ではこの「てんでんこ」を実践することで被災者を最小限にとどめた。本校でも防災グループの生徒が、地震が起こった際にどのように行動するか、避難所で中学生ができることはなにか、地震による火災が発生したらどうするかなどを自らが演じ、撮影した。防災マニュアルでは、中学生にできることをまとめ、共通の意識を持ちたいという観点から、ＡＥＤの使い方や避難所での生活、家具の固定などをまとめた。



④その他

ふじのくにジュニア防災士の認定を３年生全員で目指した。「減災の意識を持ち、南海トラフ巨大地震などの災害から自らの身を守ることができる者」及び「地域の防災活動に参加する次世代の地域防災リーダーとなることが期待される者」をジュニア防災士として認定する静岡県の取り組みである。また、その認定には防災訓練への参加が必須で、地域の防災訓練への参加率も増加し、生徒は炊き出しや応急手当などを学んだ。

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

減災の能力・態度、レジエンスを育むための探究的・実践的な減災教育の実践（主体的な学び)、「共助・公助・Ｎ助」を促進する地域や外部機関と連携した防災体制の構築（対話的・協働的な学び）の観点から生徒が自分たちで課題意識を持ち、地域のためにできることを考えた。減災教育において、主体的かつ協働的に自分の役割を自覚し、実践することは非常に大切な意識であり、それが被災時の適応に近づくと考えた。助成金では完成した啓発動画をＤＶＤや防災マニュアルを冊子にしたものを配布することに使わせていただき、中学生の活動を知っていただくきっかけとなった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

先述のように「守られる存在」から「守る存在」への転換を図り、地域のために自分たちに何ができるかを学ぶことを主眼に置いた学習を展開した。また、「画一」から「適応」という視点から減災教育に取り組み、具体的な行動や方法を学ぶことで、どうしたら良いか分からないという思いが、もし被災したらこのように行動しなければいけないと考えられるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

具体的に自分たちが行動できることを知ったことで、実践しようという意識が生まれ始めた。地域防災訓練でも、今までは経験しなかった炊事担当をかってでたり、三角巾での応急手当を学び、学級で伝達したりする生徒がいるなど変化が見られた。また、防災のためには、地域の連携が必要で、普段からの積極的なコミュニケーションが必要であると考え、そのために保育施設や介護施設を訪問し、ボランティアする生徒もいた。生徒たちにとっても、自分たちができることを学ぶことは、自発的な活動への自信につながったようである。また、DIG や HUG、消火訓練などから、被災時に自分たちがどのように行動すればよいかを考え、具体的な技術や知識を身に付けることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

これまで地域防災訓練での中学生の意識の低さに苦言を呈する声もあった。一方、地域としても被災時や防災の際に、中学生などの若い世代への期待が大きいのも事実である。本実践の中で、防災への意識や、地域のために活動したいという思いが強くなったと感じている。しかし、そこで終わりではなく、地域の中で実践してこそ、初めてこの経験が生きてくると考えている。地域もまた、その実践の場を与え、中学生に役割を与えることで、より高い防災意識が地域に広がっていくと思われる。今後、教師や保護者、地域が協力して防災教育に取り組んでいく必要性を強く感じ、訴えかけていきたい。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

生徒の思いや学ぶ意欲を大切にしていけるように指導した。たとえば、先述の地域防災訓練での中学生の意識の低さについても、中学生の話合いでは何をしていいかわからない、手伝いたいと思うけどやり方が分からないとの声があった。そこで、被災時に役立つこと学んだり、自分たちの行動をマニュアル化したりしようという動きが生徒の中で生まれ、活動の方向性を決めていくことになった。啓発動画の作成でも、脚本や出演、撮影を生徒自身が担当していた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

地域のために何かをしたい、貢献したいという気持ちは誰しもが持っている。しかし、何をどうしていいかわからないという思いがその一歩を躊躇させてしまっているように感じた。被災時に中学生ができることを知ることで行動の基本が生まれ、自信を持って行動することができるのではないか。地域の担い手としての自覚と、行動方法を身に付けることで、誰しもが地域に貢献できる人になれる。中学校での防災教育もそのような意識を持つ必要がある。

７）その他

いつ起こるか分からない災害にどのように適応していくか。これからの時代を生きる中学生にとって、とても大切なことである。「十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力でした。（中略）運命に耐え、助け合っていくことが私たちの使命です」（階上中学校答辞より）今後、私たち学校職員も生徒たちに主体的な減災への学びの機会を作り、助け合う心を育み、一人でも多くの人を助けられる人を育てられるように減災教育に励まなければならないと気付かされた。その機会を与えてくださった本事業であった。

学校名	名古屋市立丸の内中学校
担当教員名	西脇　佑

活動のテーマ	主体的に考え、行動できる子どもの育成
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	第２学年（　３６人　）
活動に携わった教員数	２　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	７５　人【保護者・地域住民・その他（ボランティア・消防署・区役所職員など）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１９日　～　２０２０年３月３日
想定した災害	地震・津波・台風・洪水

活動報告

１）活動の目的・ねらい

昨今の人工知能(AI)の発達や、グローバル化の進展に伴う社会構造の変化など、私たちをとりまく環境は、これからますます複雑・多様化していくことが考えられる。このような予測困難な社会を、目の前の子どもたちがたくましく生きていくためには、直面するだろう答えのない様々な課題に対して、主体的に考え、行動することが必要であると考え、研究題目「主体的に考え、行動することができる子ども」を設定した。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

段階	学習内容	他教科との有機的な結び付き
刺激する **問いかけ** **計画する**	○　「港防災センター」「減災館」を訪問する。 **【本物との出会い】** ○　学習計画表を作成する。	理科「地震」 社会科「世界からみた日本のすがた」
経験 **発見** **探求**	○　避難所設営体験**【異学年交流の場面】** ○　傷害に対する措置の仕方を身に付ける。 ○　地域に住む自分たちができることを考える。 ○　「自分たちができること」を考え、行動する。 **【本物との出会い】**	保健体育科「傷害の防止」） 保健体育科着衣泳 社会科「身近な地域の調査」
発表	○　地域に発信する※　学習成果を全校生徒や、保護者に発信する。**【異学年交流の場面】**（全校集会や文化発表会作品展示等を利用して）	国語科「プレゼンテーションの名人になろう」

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

階上小学校で参観させていただいた『地域防災マップ』の作成手順やＧＴ(ゲストティーチャー)との関わり方

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

気仙沼での研修を踏まえて、研修中訪れた施設で学んだこと(『階上中卒業式の答辞』や『津波によって部屋に突き刺さる自動車』)を、子どもたちに提示したことで、子どもたちは「震災の恐ろしさ」と「防災の大切さ」を理解し、震災を「自分事」として捉えることができたと考える。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

実践後行った実態調査で、「災害時に、中学生の自分たちができることがありますか」という問いに、実に96%の生徒が「はい」と答えた。また、「災害時において中学生が　できることを記述しなさい」という問いに対しても、一年間の学びを踏まえて、具体的　な方法を複数記述する生徒がみられた。

10 月に起こった台風 19 号の被害に対して、「自分たちにできることはなんだろう」というテーマで子どもたちが自主的に話し合い、「義援金募金活動」を行うことを決め、朝街頭に立ち、募金の協力を通行する方々に呼び掛ける姿が見られた。また、本校が交　流を続ける陸前高田市立の中学校と「もっと活発に交流したい」というある子どもの声　を受けて、「ビデオレター」を作成して送る活動も行った。この他にも実践後の子ども　たちは、「自分にできることは何か」を考え、行動する姿が数多くみられるようになった。以上のような子どもの姿や言葉は、本研究で設定した「主体的に考え、行動する」　子どもの姿であると考える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

年度末の『学校評価アンケート』において、多くの保護者が防災学習に対して、強い関心を寄せ、協力的な態度であったことが分かった。『学区防災マップ作成』や『避難所設営体験』においては、多くの保護者が学校に来校し、ご参加いただいた。また、上記の活動を行う上で、名古屋市中区役所職員やボランティアネットワーク、区政協力委員など、多くの地域の方の快い協力をいただいた。参加された方は「来年度以降も継続してほしい」と考える方も多く、保護者や地域住民、関係機関にとっても有意義な活動になったと考えられる。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

〇子どもたちの関心・思考の流れを大切にした点

〇保護者や地域住民、関係機関との連携を充実させた点

〇『地域防災マップ』や『避難所設営体験』等の体験的な活動(学習)を充実させた点

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今年度の取組みで終わらせることなく、組織的・継続的に防災学習に取り組んで行く必要性を強く感じる。成果と課題を教員間で共有し、来年度以降継続的に取り組んで行く。

学校名	熊野町立熊野中学校
担当教員名	柳　雄輔・西川　沙菜恵

活動のテーマ	自らの命を守るために，減災・防災について主体的に学習し，前向きに行動できる生徒を育成する。
主な教科領域等	教科領域（　社会科、理科、保健体育科、技術家庭科　）・総合的な学習の時間 生徒会活動
活動に参加した児童生徒数	全学年（　２６１人　）
活動に携わった教員数	３０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１５　人【保護者・地域住民・その他（　防災士　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年５月１３日　～　２０２０年２月２７日
想定する災害	台風・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

昨年度に発生した西日本豪雨災害で，本町も多くの被害が発生した。被害を受けた生徒がいた反面，被害がほとんどなく災害は発生したとの認識の薄い生徒もいる。認識の差が大きい中，災害から１年経とうとしているが，これまでの避難訓練や教科間のつながりの希薄な学習活動では災害から自ら身を守り，災害発生時に前向きに行動できる生徒の育成は不十分であると考える。

そこで，教科間のつながりを再構成し，他校との交流や研修を通して，学習した内容や中学生として活動できることを発信することで，自ら考えて行動することの重要性を認識させることをねらいとした。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

（５月）・防災教育に関わる計画について（職員研修）

・理科…西日本豪雨の天気図や降水量のデータを用い，豪雨のメカニズムについての授業
（ハザードマップや防災チェックシートを用いた意識付けも）

・社会科…雨温図を用いた降水の特徴を理解する授業（オリジナル資料を作成し，防災への関心を高める）

（６月）・臨時休校時の対応について…「警戒レベル４」発令時に，部活動の朝練に参加した生徒の対応
…警戒発生時の意識調査アンケートの実施

（７月）・生徒会の取組…①避難グッズクイズの実施，避難グッズ展示コーナーの設置
②中国新聞記事「いのちを守る」シリーズ感想文・展示
③道徳授業の実践（６月アンケートの結果を受けて実施）

・保健体育科…①心肺蘇生法講習会（「いのちを守る」ことへの意識付け）
②自然災害を知り，自分にできる対策について考える授業（オリジナル資料を活用）

（１０月）・熊野町内火災発生時の対応について…中学校近辺での火災への対応

・技術家庭科…手回し充電式ラジオの作成

（１１月）・社会科…①熊野町危機管理課職員による防災教室
（熊野町の防災の取組・作成中のハザードマップを活用し，危険箇所の記入など）
②防災士による講話
（ラジオパーソナリティで防災士でもあるキムラミチタさんによる自助を中心にした講話）
③様々な災害場面を想定し、それぞれの場面でどのような行動をとるべきかを考察する授業
（防災ゲーム「クロスロード」を活用した授業，ゲーム後後輩へのメッセージを作成）

（１２月）・社会科…町長出前授業（熊野町の西日本豪雨災害の対応や今後の防災の取組についての説明）
・生徒会の取組…熊野町総務課による熊野町次期総合計画策定に係るワークショップ参加
（今後１０年間の熊野町総合計画策定のワークショップで防災についての提案など）

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

（自校の実践）

１１月実施の社会科の授業において，熊野町危機管理課との協力でハザードマップの改善作業を行った。９月研修会において小学校での通学路の危険な箇所，安全な箇所などのマッピングを参考に，熊野町危機管理課と協力し，ハザードマップ作成会社より作成途中の地図を提供してもらい，図上訓練を実施できた。

（助成金で可能になったこと）

・防災ゲーム「クロスロード」の実践。購入し，生徒の活動に活動できた。
・次年度，生徒会専門委員会などの少人数での発表活動の実施において，モバイルプロジェクターを利用した発表活動の実施。
・次年度，ビデオカメラを利用した減災教育に関わる行事，フィールドワークなどの記録。

（変更・改善点）

・次年度に向けての防災計画策定において，今年度実施の活動を年間計画に入れる予定。
・減災教育を系統的に実施するため，教科横断的な内容について研修資料を活用し，防災計画に導入予定。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・新学習指導要領、ESD の視点で、防災教育を位置づけることにより、「防災教育を通した生きる力の育成」や「持続可能な社会の構築」について意識的に取り組むことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・災害発生のメカニズムや校区内の起こりうる災害等について理解することができた。（知識・理解）
・新聞記事の掲示や防災グッズゲーム，防災士の講話などを通して，災害時の未知なる状況においての判断力，問題解決能力を高めることができた。（判断力，課題発見・解決能力）
・防災の学びを通して、災害と自分との関係性に気づかせ，当事者意識をもって減災や持続可能な地域づくりに向けて取り組む態度を育むことができた。（主体性）

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・教師が昨年度の災害の経験を生かし，減災を意識して，地域を題材とした教材研究を行った結果，生徒が当事者意識をもって学習に取り組むことができた。
・熊野町危機管理課との連携を通して，防災教育のフォーマットを作成することができ，今後小学校との連携を通して，さらに減災教育への推進への弾みがついた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・２，３年生を中心に教科に関連づけた指導を行うことができた。
・「警戒レベル４」発令直後に，アンケートを実施し，全学年道徳の授業を行うことで減災や警報発令時の行動について生徒に意識付けさせることができた。
・委員会活動を通して，全校生徒・教職員への啓発活動を行うことができた。
・町内火災発生時に，生徒や教職員が安全を第一に考え，迅速に対応することができた。

6）<u>実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望</u>

・教育活動全体を通した防災教育を推進するために，教科横断的に防災について取り組む必要がある。

→「学校安全計画」に防災の項目を増やすか，新たに防災教育計画を作成し，学校全体で防災に関わる動きを共有し，全職員が何らかのかたちで防災に関する指導を行う。

・体験的な活動を通して，自助だけでなく，共助・公助について生徒に意識させる必要がある。

→さまざまな場面を想定した避難訓練の実施，生徒会活動での取組

・保護者や地域と連携した，「いのちを守る」防災教育の推進。

→防災に関する取組の発信，情報交換

学校名	山口市立平川中学校
担当教員名	林　直幸

活動のテーマ	安全・安心な学園都市平川（幼保小中高大）づくりをめざして
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間、特別活動　）
活動に参加した児童生徒数	全学年（　４３３人　）
活動に携わった教員数	３５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	約４３００　人【保護者・地域住民】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年4月８日　～　２０２０年3月２６日
想定した災害	台風・洪水・河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

平川中学校、平川小学校の共通チャレンジ目標である「安心・安全」な学校づくりのためには地域の協力が必要である。そこで地域を巻き込んだ防災に関する取組を展開し、学校・家庭・地域の防災意識の向上を図りたい。また、平川地域には、幼稚園・保育園・小学校・中学校・特別支援学校・高等学校・大学があり、「学園都市平川づくり」をめざしている。幼小中合同引き渡し訓練、体験型地域防災イベントを、安全・安心な「学園都市平川づくり」の起爆剤としたい。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

○幼小中合同引き渡し訓練

豪雨災害を想定して、平川幼稚園園児・平川小学校児童・平川中学校生徒、総計約１３００名の引き渡し訓練を行った。また、平川地域交流センターは避難所開設準備と情報センター（情報集約、連絡調整、緊急対応等）としての動きを確認した。

スケジュール　　実施日：令和元年６月２４日（月）

１２：３０　山口市に「大雨洪水特別警報」発令情報を入手（想定）
各校・各機関で対策本部を設置。引き渡しを決定。平川地域交流センターへ連絡。
保護者へ緊急メール配信。児童生徒への指導。
平川幼稚園はホール待機。平川小学校・平川中学校は教室待機。

１４：００　引き渡し開始。

１６：００　引き渡し終了。平川地域交流センターへ連絡。

○体験型地域防災イベント

地域の「平川まつり」（参加者は約３０００人）と同時同会場で体験型地域防災イベントを開催した。体験内容として、防災熟議、小学生ＫＹＴ教室、防災カードゲーム、非常食体験、東日本大震災復興支援グッズ販売、台風１９号水害復興義援金募金、はしご車体験、煙体験、心肺蘇生講習、消防車展示、ハンドマッサージ、防災クイズを行った。

取組の詳細　　実施日：令和元年１１月１７日（日）

・防災熟議・・・中学生・高校生・大学生・地域住民が、未曽有の豪雨の際、どのタイミングでどのような行動をとるかのシミュレーションを通して、「災害に強い平川にするために」というテーマで語り合った。

・小学生ＫＹＴ教室・・・中学生が小学生にＫＹＴ（危険予知トレーニング）で防災について教えた。

・非常食体験・・・いろいろな非常食を実際に作ったり食べたりすることで非常食への関心を高めた。

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

防災熟議を通して、災害時の行動についてより具体的な想定をし、防災、減災への意識を高め、実際に行動に移せるよう促した。幼小中合同引き渡し訓練では、新たに、平川地域交流センターが加わり、避難所開設準備と情報センター（情報集約、連絡調整、緊急対応等）としての動きを確認した。

体験型地域防災訓練は、今年度初めて行った。なるべく多くの参加者を得るために、地域の祭りを同時開催した。助成金のおかげで、非常食体験などのプログラムを実現することができた。また、啓発活動も充実させることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

全校一斉での避難訓練や講演会で経験や知識を積むことも大切だが、教職員や生徒、保護者、地域住民が、実際の場面を想定して、しっかり考え、実際に体を動かして、減災(防災)について学習することが大切であることが実感できた。また、地域の団体と協働したことで、今後も連携をとることでより充実した取組をしていくための基盤ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

体験型地域防災訓練のボランティア生徒からは来年度の活動を楽しみにしているという声を聴くなど、生徒の一部ではあるが減災（防災）教育活動に積極的にかかわりたいという生徒が増えてきた。生徒は、与えられたことをただやるのではなく、自分たちで何をしたいのかを考えるような、学びに向かう力を身に付けてきた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

実施以降、地域の団体で防災に関する研修会があったり、来年度の防災の取組についての話題が出たりするなど、地域全体の減災（防災）への関心の高まりを感じる。地区内にある保育園や高校も来年度は一緒に活動したいという申し出があるなど、安全・安心な「学園都市平川づくり」の起爆剤となった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

既存の取組に、いろいろな団体を結び付けることでより充実した地域全体の取組となり、地域がさらに活性化することを目指して実践した。地域との連携にはコミュニティ・スクールのしくみが十分に生かされた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

近隣の地域が自然災害にあったり、自分の地域も過去に浸水被害にあったりしているにも関わらず、減災（防災）について自分事として考えていない人が多い。記憶が風化してしまうのは仕方ないので、定期的に考える機会を提供することが学校の使命と考える。来年度も多くの人を巻き込みながら、さらに深く減災（防災）について考えることができるような工夫をしていきたい。

学校名	福岡市立城西中学校
担当教員名	田川　健太（教諭）

活動のテーマ	地域安全マップの作成を通して，非常時の安全行動を身につける
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	１学年（　２５７人　）
活動に携わった教員数	１１　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	９　人【その他（　ボランティア団体　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年6月２０日　～　２０１９年１１月３０日
想定する災害	地震・津波・洪水・河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校は，新規に移り住んできた生徒が多く，保護者も地域の歴史や過去の災害を知らないことが多いと思われる。地域安全マップの作成を通して，自ら防災意識を高め，過去の校区内の災害の歴史を知る地域住民とのつながりをつくるとともに，非常時に必要とされる行動ができる知識と態度を身につけさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

６月　・防災教育ガイダンス（目的と夏休みのマップ作製について）
７月　・防災学習の実施，マップ配布と説明
８月　・担当地域調査（夏季休暇中）
９月　・学級でグループごとに地域安全マップ作成
　　・各学級内で発表会（ポスターセッション形式）
１０月　・防災教育講演会とワークショップ
　　①作成した防災マップでの災害図上訓練(DIG)
　　②災害時の決断ゲーム(クロスロード)
　　・救命救急及び応急処置(本校保健体育科職員が実施)
　　・講師へのお礼状書きと防災学習についての振り返り，自己評価
１１月　・社会人講話（福岡キャリア教育研究会）
　　講師の中に地震のメカニズム解説，橋の設計等にまつわる職業を含む

【講師】
福岡市防災・危機管理課
博多あん・あんリーダー会(ボランティア団体)

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

１．ボランティア団体と連携した防災教育
２．校内の教職員に向けた防災教育研修
３．防災マップ制作，ワークショップに関連する消耗品の購入

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本校では過去数年間，防災マップが製作だけで終わっている現状があった。今年度は，地域のボランティア団体「博多あん・あんリーダー会」の方々を講師として迎え，製作したマップを用いた災害図上訓練(DIG)とクロスロードを実施することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

防災マップ製作のためのフィールドワークは，夏季休暇中の課題であったが，実際に土地を歩いてみて回ることで，日頃とは異なる視点で，校区内に想定できる災害時の被害を検討することができていた。製作グ

ループ内では，複数の視点から地域の特性や，過去の経験を話し合う様子が見られた。また，DIG やクロスロードを通して，災害時・非常時の判断能力を養うことができた。家庭でも災害時の連絡系統を確認し合うきっかけをつくることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教職員への校内研修を通して，東日本大震災被災地の実際や，防災教育の実践を共有することができた。本校の校区は，２つの河川の合流域と博多湾河口から約２キロに位置し，過去には，本校も床上浸水するなど水害被害が起きた。また，地震発生時には津波による災害も想定される。これらのことを踏まえ，生徒への防災教育の方向性を確認することができた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

１．地域で発行されているハザードマップはあくまでも参考資料とし，生徒自身が歩いて発見したことを持ち寄って地域安全マップを作成した点。

２．ボランティア団体と連携して，マップ製作だけで終わらずに演習を取り入れられた点。

３．防災教育後，総合的な学習の時間の中で社会人講話に震災関わる内容（サイエンスコミュニケーターに地震のメカニズム体験，橋の設計者や建設者に防災視点の話）を取り入れた点。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

１．本校で実施している地震・津波の避難訓練を形式的なものではなく，防災教育とより強いつながりをもたせなければならない。そのためにも教員間の研修内容を精査し，意識の変容と実践力の向上を図らなければならない。

２．防災マップは当初，完成後にポスターセッション形式の発表を，保護者や地域の人々に参観してもらう予定であったが，本年度は実行できなかった。次年度のスケジュール調整とスペースの確保が課題である。

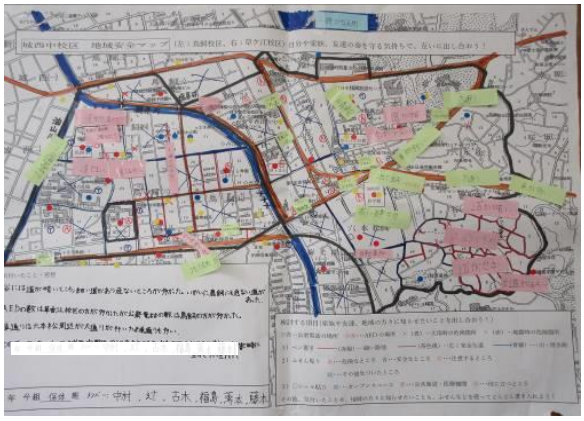
３．現在，中学１年のみ総合学習で防災教育を行っている。また今年度は，校内での活動がメインであったため，２・３年次は地域と連携した実践活動につなげたい。また上記２の内容を，校区の２小学校と連携した活動に発展させたい。

４．過去には行っていた避難所設営等の実践活動も再度取り入れ，非常時に行動できるための知識や技能の育成も図りたい。

○本校の位置

○昭和３８年「福岡市大水害」での本校の記録

○作成した防災マップと活動風景



○防災教育ワークショップの様子

学校名	大牟田市立橘中学校
担当教員名	家永　健三

活動のテーマ	防災・減災に関する意識の向上と基礎知識の習得
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間、学級活動　　）
活動に参加した児童生徒数	第１学年（　９１人　）
活動に携わった教員数	１０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	５０　人【保護者・地域住民・その他（　大牟田市防災室、有明新報社　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年１１月２７日　～　２０２０年1月３１日
想定した災害	台風　・　洪水　・　河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

○生徒、保護者、職員、地域住民に、今日の日本で多発する様々な自然災害に備える必要性を学校から発信するとともに、地域や行政と協力し、ともに学ぶ。

○今日の防災・減災における『自助』『共助』『公助』『N助』の考え方のうち、特に『自助』と『共助』の基礎を築き、『公助』『N助』の必要性・重要性に気付かせる。

【　夜の防災・減災学習の目的・ねらい　】

○いつ起こるかわからない災害に備え、寒さ・暗さなどを実際に体験することで緊張感を高め、備えの重要性に気付かせる。

○地域の防災・減災意識の現状を把握し、行政による地域に起こりうる災害とその備えや身近な防災施設の説明などを受けることで、保護者・地域住民とともに学ぶ意識を高めさせる。

○調べた防災グッズについての発表し、他にどのようなものを備えておくべきかを保護者や地域住民と意見交換することで、学習したことをさらに深めさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

日にち	学習活動	具体的な内容など
11 月 27 日	防災・減災オリエンテーション	防災・減災に関する基礎知識　など
11 月 29 日	防災・減災レクリエーション	バケツリレー体験
12 月 4 日～23 日	防災グッズ調べ	1 人持ち出し用防災グッズを各担当で調べる
1 月 7 日	夜の防災・減災学習	保護者・地域住民とともに学ぶ
1 月 10 日～22 日	福祉学習、福祉擬似体験学習	『福祉』について、障がい者・高齢者擬似体験
1 月 24 日～31 日	防災・減災・福祉学習まとめ	模造紙にまとめ、校区内の小学校に掲示予定

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・総合的な学習の時間の中で、9 月の研修会後 2 学期以降の活動予定を見直し、『防災・減災学習を含めた福祉学習』と位置づけ、生徒の防災・減災への意識向上を図り、基礎知識を習得させた後、助成金を活用させていただき 1 人持ち出し用防災グッズを揃え、その防災グッズの使用方法やその他の用途などを調べ、『夜の防災・減災学習』を 3 学期始業式の夜に計画し、生徒の学習の発表の場とともに、保護者や地域住民と一緒に学び・考える場として設定した。その後、生徒の意識が高まったところで、福祉学習を設定することで、も

しも災害が起こった場合に、障がいを持っている人や高齢者に対して自分達に何ができるかなど『共助』の視点からも考えることができ、学習活動に意欲的に参加できると考え、活動予定を変更させた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・これまでは、1年を通して、全校で年2回ほどの避難訓練と防災学習を実施していたが、形式的なもので終わっていた。今回の研修会で、自分が改めて防災・減災学習の必要性を感じ、研修内容を紹介したことで先生方も快く協力していただき、総合的な学習の時間の中で防災・減災学習を位置づけることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・生徒の防災や減災に対する意識が高まった。(『夜の防災・減災学習』・『福祉学習』アンケートより)

・自分の命を大切にする思い、『自助』への意識とともに、『共助』の意識、保護者や地域とのつながりを大切にしようとする思いが向上した。(アンケート、道徳での記述より)

・防災・減災に関する新聞記事やテレビニュースを見る回数が増え、実際に家で非常用袋をまとめたり避難について家族と話をしたりするなどの行動が見られるようになった。(日々の連絡ノートの通信欄などから)

・自分達が学んだことを発信したいという意欲が増した。(まとめ作業から)

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・教職員の防災・減災に対する意識が向上し、協力体制が築かれ、活気ある学年での指導体制につながった。

・自らの経験とつなげて、具体的にどうしたらよいかということを改めて考える機会になった。(保護者)

・大人よりも子ども達の方が詳しいことに驚き、『自助』の大切さを改めて学んだ。(保護者)

・どこかで「大牟田は大丈夫だ」という思いがあったが、大雨はどこでも起こりうることがわかり、改めて自分ができることを考えてみたいと思った。(地域住民)

・子どもから大人まで、共通の認識を持てたと思う。(地域住民)

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・大きな取り組みではないが、子ども達に本気で防災・減災について考え学んでほしいこととして、教職員が一丸となって取り組むことができたため、それが子ども達に伝わり、保護者や地域住民にも理解が得られ、行政や新聞社も賛同していただき、協力していただいたことで、生徒並びに保護者・地域住民に、防災・減災について考えるきっかけをつくることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・「生きる力」を育む学習として、今後「継続していける学習」にできるかが課題。今年度の第1学年は防災・減災の意識を高めることができているので、さらに実践的に何ができるか、各教科の内容も加味しながら今後計画していく必要がある。また、教職員の取り組み方で拡大することも縮小することもできるので、他学年においては、今年度の取り組みをどこまで継承していけるかを検討する必要がある。

7）その他（※特にあれば記述）

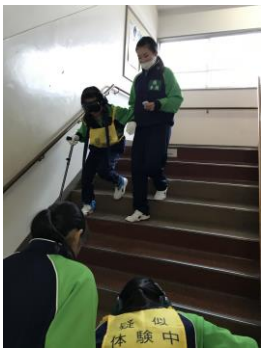
防災・減災オリエンテーション

バケツリレー体験

防災グッズ調べ学習

『夜の防災・減災学習』（左）班での意見交換の様子・（中）大牟田市防災室からの講話

『福祉学習』
聴覚障害のある方
からの講話



社会福祉協議会
の方からの講話

『福祉擬似体験学習』
・白杖・アイマスク
・高齢者
・車椅子
各体験の様子

学校名	南阿蘇村立南阿蘇中学校
担当教員名	古賀　元博

活動のテーマ	熊本地震からの復興と災害への備え（避難所運営訓練を中心とした防災教育の取組）
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	３学年（　２３４人　）
活動に携わった教員数	３４　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１０　人【その他（　国交省復興事務所・村復興推進課・阿蘇火山博物館など　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１日　～　２０２０年３月３１日
想定した災害	地震・台風・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・中学生が主体となり避難所運営を行うスキルを身に付けることで、将来の地域防災を担う人材を育成する。

・震災の経験を伝えていくことで、災害に強い南阿蘇村につなげていく。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・学年活動

１年生・・１学期に火山博物館を見学し、地域の災害特性ついて学んだ。

２年生・・阿蘇の環境特性からどのような産業が発展してきたのかを考え、職場体験を行った。

３年生・・コース別学習を行った。（防災コース…震災遺構見学、新阿蘇大橋建設現場見学、復興に向けての取組を子ども議会でプレゼンを行った。）

・全校防災学習

総合的な学習の時間（防災教育）計画

月　日	曜	校時	内容	
11 月 6 日	水	5	説明、講話	防災学習を取り組んでいく目的、目標
11 月 14 日	木	3	講話	
11 月 14 日	木	4	防災ゲーム『避難誘導に協力しよう！』	
11 月 22 日	金	5	災害対応シミュレーションゲーム	災害時の対応について、シミュレーションゲームを通して学習する。3年生の防災コースメンバーがファシリテータ
11 月 22 日	金	6		
11 月 25 日	月	4	基礎講座	8つの講座を開設して避難所運営に必要な学習を行う。（国・社・数・理・英・音・体・技）
11 月 26 日	火	4		
12 月 6 日	金	3	避難所運営ゲームHUG	9人程度×27班を作り（縦割り班）、HUGを行う。
12 月 6 日	金	4		
12 月 11 日	水	5	全体説明⇒班別	運営HUGのカードの作り方講座（全体）⇒各班でカード作成者は避難所運営の準備、避難者はカード作成、準備
12 月 13 日	金	4	HUGの準備	
12 月 19 日	木	4	リアルHUG	3年生の代表が運営側、その他の3年生と1･2年生が避難者側として避難所運営訓練を行う。
12 月 19 日	木	5	リアルHUG	
12 月 19 日	木	6	リアルHUG	
12 月 20 日			振り返りとまとめ	学習の振り返り

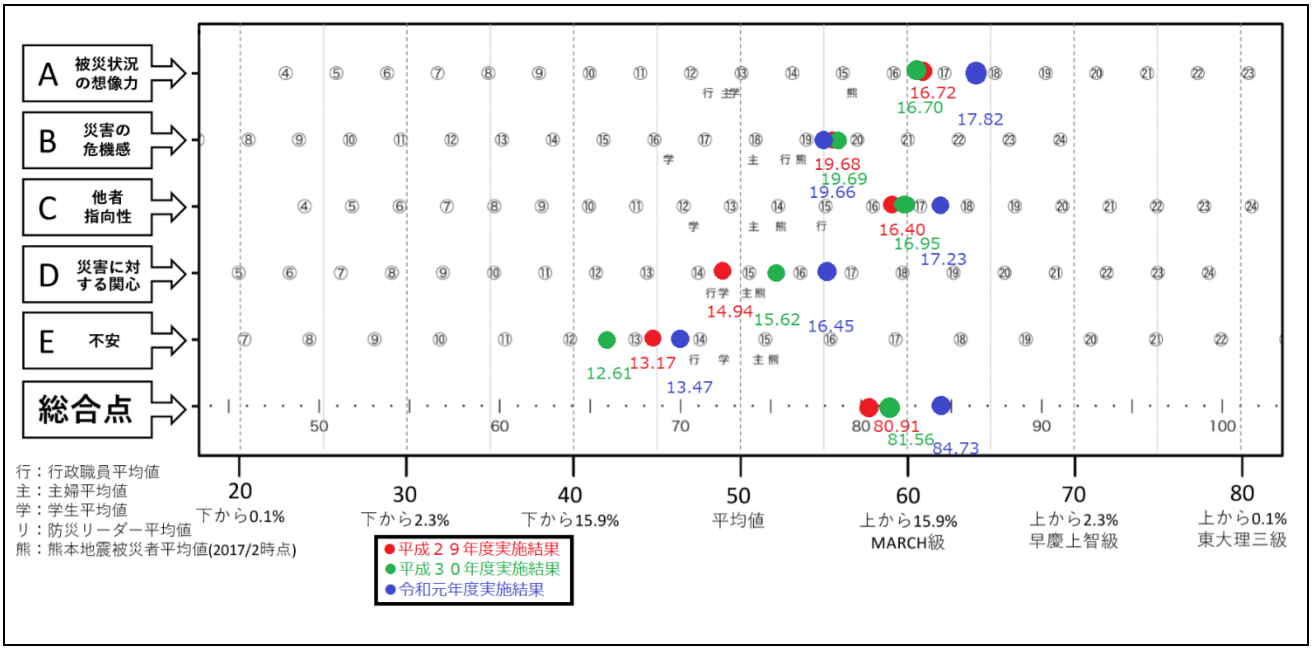
３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

【助成金で可能になったこと】

○震災遺構見学ツアーの時のジオガイドの利用

○避難所運営訓練の際の非常食体験、炊き出し訓練
○避難所運営訓練時の幼児への対応（幼児をどのように避難所で遊ばせるか）⇒おもちゃ作り
○避難所運営訓練のための保存食の購入（保存ができるパン）
○防災教育基礎講座での実験、体験
【自校の活動の改善点】
○全校防災教育では、教師主体で行っていたが、生徒が中心となって実施できるような取り組みに変えた。
・防災の日の講話を委員会活動の取組で生徒が行った。
・ＨＵＧ、災害協力シミュレーションゲームの準備、進行役を生徒が担った。
・避難所運営訓練では、企画運営を代表生徒が行った。
○階上中学校の避難所運営マニュアルを参考に、南阿蘇中学校避難所運営マニュアルの改訂を行った。

４）実践の成果
①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から
・東日本大震災の教訓と熊本地震を重ね合わせながら取り組んだ。（階上中学校生徒会長の答辞）
・熊本地震の震災遺構を３年生の学年活動の中に取り入れ、災害を伝承することの大切さを学ぶことができた。
・震災を「災害による被害・災害への備え」という視点と、「災害からの復興」という２つの視点から考えさせることができた。
②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。



【防災意識尺度（防災科学技術研究所より）】

避難所運営訓練の運営者は、例年３年生の希望者を募って選定している。例年４割程度の希望者だが、本年度は７割の生徒が希望し、運営者として取り組んだ。階上小・中学校の実践を全校生徒に紹介したことで、自分たちも同じ被災者として積極的に防災・減災に取り組んでいく態度が向上した。また、防災・減災教育の取組が生徒一人一人の防災意識の向上につながっていると考える。
③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
・関係機関（南阿蘇村復興推進課、南阿蘇村次世代定住課、国交省熊本復興事務所、阿蘇火山博物館、熊本大学減災センター等）との連携することができ、継続して取り組める環境を構築することができた。
・生徒が主体となって行う学習に移行し、生徒を動かす視点を取り入れたことで、職員の防災・減災に対する意識が上がるとともに、防災担当の負担が軽減した。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・熊本地震で避難所を経験した生徒が、より良い避難所運営をするためにアイデアを出し合い、工夫しながら行った避難所運営訓練

・防災・減災学習を教科の取組に落とし込んだ、防災教育基礎講座

・全国防災ジュニアリーダー育成会議で知り合った高校が開発した長期保存パンを購入した。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・本年度、生徒が主体となって行い防災教育を推進してきた。次年度以降、学年ごとのプログラムを精査し、１・２年生の学びが３年生の学びにつながっていくような手立てを講じていきたい。

・熊本地震の教訓を伝承していくために、生徒たちが体験したことを整理し、データベース化していきたい。

7）その他（※特にあれば記述）

学校名	日田市立東部中学校
担当教員名	宇野　裕二

活動のテーマ	防災への意識を高め、対応力を身に付ける避難時訓練の実施
主な教科領域等	教科領域（　特別活動　）
活動に参加した児童生徒数	１・２・３学年（　４８６人　）
活動に携わった教員数	３３　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	８１　人【保護者（17）・地域住民（24）・その他（園児（30）・保育職員（10）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年１１月２７日（水）
想定した災害	地震・台風・洪水

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①災害で避難した際に考えられる様々な問題について考えるとともに、その解決法等について体験を通して学ぶことにより、生徒の防災への意識を高めさせ、いざというときの対応力を身に付けさせる。

②地域社会と連携して取り組むことにより、中学生の参画も含め、各自治会における地域防災への意識や取組の改善に資する。

③生徒に将来の地域防災の担い手としての意識を高めさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

13:20～13:35 開会行事（校長講話）

13:40～14:40 講演「生き続ける防災」　【講演までは全校生徒対象】

講師：木ノ下勝也氏　（レスキューサポート九州代表）

	食料班	生活用水班	トイレ班	生活用品班	施設班	救護・幼児班	
生徒数	22	22	22	22	23	11	11
15:00 15:10 15:20	お湯沸かし 食材準備 （300食）	黒塗りペット ボトル黒袋ポ リタンクによる 温水準備	簡易マンホール トイレづくり	段ボールベッド パイプ椅子ベッド パーテーション 製作	土嚢づくり 土嚢積み	担架による 救助訓練 救護訓練 （AED・簡易三角巾等）	幼児への対応 遊び場所整備 遊びの工夫
15:30 15:40	調理	浄水剤による 飲料水づくり	簡易トイレの製作	パーテーション 段ボールスリッパ 新聞紙カップ等 製作	シート及び 水嚢による 土嚢積み	幼児への対応 遊びの工夫 新聞紙カップ で水を飲ませる	担架による 救助訓練 救護訓練 （AED・簡易三角巾等）
15:50	蒸らし		トイレ用水等 の汲み置き	ペットボトルライト ツナ缶ライト おむつ 製作	パーテーション による会場整備		
16:00 16:10	片づけ 配布準備	ペットボトル簡 易シャワーづく り					
16:30 16:50	意見交流会	意見交流会	意見交流会	意見交流会	意見交流会	意見交流会	意見交流会

食料班

準備物		購入（無洗米15Kg、アイラップ5本、ふりかけ8袋、紙皿250枚、割り箸250本） 大鍋8個、落し蓋8個、おたま8個、ふきん、運ぶ用のお盆やバット等
15:00 15:10 15:20	お湯沸かし 食材準備 （250食）	① 大鍋にお湯をかける。 ② 3~4人の6班に分かれ、準備する。 ・ヤクルトの容器で米を擦切り一杯入れる。 ・水を80g（ヤクルトの容器であれば、1杯と白と薄い赤の境目まで入れる。 ・袋の底のどちらかに片寄せて、できるだけ空気を抜いてしっかり結ぶ。
15:30 15:40 15:50	調理	③ 沸騰したお湯に食材を入れ、落し蓋をして煮る。（30分） ④ この間にできる片づけやお皿等の準備をする。
16:00	蒸らし	⑤ 食材を取り出して、置いておく。（蒸らす） ⑥ 鍋等の片づけをする。
16:10 16:20	配布準備	⑦ 体育館へ運び配布する準備をし、体育館の卓球台の上に運び、参加者に取りに来てもらう。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・助成金によるレスキューサポート九州の協力により、訓練の計画段階からアドヴァイスを受けるとともに、当日は各活動班にも一名ずつのサポート体制をお願いし、生徒の質問等にも対応いただいた。

・マニュアルは用意しているが、生徒に考えさせ、試行錯誤させることに重点を置いた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

毎年、避難訓練等において、教師の指示に従い、決められたマニュアルに沿っていかにすばやく行動できるかに重点を置いた活動を実施しているが、自ら考えて行動する「自助・共助」の視点からの教育活動の見直しにつながった。

１２月の地震及び火災避難訓練おいては、教員にも予告なしで実施し、避難経路の選択ミス等がみられたが、このような経験を通しての学びが、「自助・共助」の視点から重要であることが確認できた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

訓練に参加した生徒の感想には、６１％の生徒が、「この経験を災害の際には生かしていきたい」趣旨の内容、その他の生徒については、参加に消極的だった生徒も含め、「参加してよかった」との内容だった。

さらに、「判断をし、一人でも助かるように頑張りたい」「災害の時にきっと役立つと思うし、自分が率先して動かないといけない」など、減災防災活動の主体者としての意識の高まりがみられた。

また、「何かあったときは、中学生ボランティアとして、みんなで協力して避難所の手助けをしていきたい」「お母さんや地域の人にも教えていきたい」など、家庭や地域防災に積極的にかかわっていこうとする態度も見受けられた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

保護者からは、「子どもが試行錯誤しながら取り組んでいるのがよい」「この経験は将来役立つ」などの感想、自治会関係者からは、「地域でもこのような訓練は必要だ」「学んだことを地域でも伝えていきたい」などの感想が寄せられた。また、「地域のお年寄、子ども達が避難してくる前の準備が、中学生の力で十分にできるのだと頼もしく感じた」という意見も見受けられた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・本校の体育館は実際に地域の指定避難所となっており、避難時において学校施設、備品等の活用については、これまで検討等を行っておらず、避難所としての学校という視点で、例えば「段ボールの保管」や「学校施設設備、備品の利用」等、地域防災の拠点として、学校の役割について考える機会とも考え、マンホールを所管している市役所上下水道局職員や市教育庁職員にも参加いただいた。

・今後の各自治会での活用も含め訓練の際に生かしていただくために、今回の訓練には全町内から生徒を参加させた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①「全員の生徒に体験させてほしい」との意見が多くみられたが、会場や要員等を考えると全校一斉は難しいので、毎年実施し、３年間の中で全員が体験できるように計画する。

②生徒会等の生徒主体の組織が、計画実行していくように手立てを工夫する。

学校名	茨城県立鬼怒商業高等学校
担当教員名	渡辺　裕明

活動のテーマ	鬼怒川氾濫の被害から防災・減災を考える！
主な教科領域等	教科領域（　道徳・特別活動・地理・理科基礎・現代社会　）
活動に参加した児童生徒数	１・２・３学年（　４００人　）
活動に携わった教員数	１０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	０　人 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年１０月１日　～　２０１９年3月１３日
想定した災害	地震・河川氾濫

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・本校を核とした防災コミュニティづくり（近隣小中学校・地域との連携）の強化

・本校に通う生徒の防災意識の向上、地域の防災を担う人材の育成

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

本年度では、学校全体で防災について以下の取り組みを行った。

①HUG（避難所運営ゲーム）　※3 学年公民（現代社会）の授業

→鬼怒川水害に関する映像を視聴し、ハザードマップを参考に、被災時に安全に避難するためにどうすればよいか、どのような行動をとるべきかを理解するための講義式の授業を行った後、生徒たちは各グループに分かれて HUG（避難所運営ゲーム）に取り組み、避難所の実際の状況を想定しながら、どのように避難所を運営するかを考えた。

②避難先での必要物資を考える（ダイヤモンドランキング）　※3 学年現代社会の授業

③防災避難訓練（全校生徒対象）

④地理・理科・道徳による教科横断型の防災学習の実践　※1 学年全体で実施

⑤洪水時における学校としての避難に関わるタイムラインの作成

⑥防災すごろくの作成・近隣小学校への寄贈　※美術部部員が作成

①･･･2019 年 10 月 4 日実施

②･･･2019 年 11 月 2 日実施

③･･･2019 年 12 月 6 日実施

④･･･2019 年 12 月 13 日実施

⑥･･･2020 年 2 月に作成

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

HUG（避難所運営ゲーム）では、９月の研修会で訪　問した気仙沼市立階上中学校の避難所設営マニュアル（平成 30 年度版）を一部参考にした。また、活動の目的・ねらいを定める上では、従来は「防災」という観点から実践を行うことを考えていたが、研修会に参加してからは「減災」という考え方をより意識するよう

になり、被災後の生活の中で更なる被害やトラブルに巻き込まれないようにするためにはどうするかを考えさせた。また、助成金は今後の本学校の避難所（震災時）としての運営に必要な物資の購入や、防災教育を進めていく上で活用していくことを目指す「防災かるた」や「HUG カード」の購入費に当てさせていただいた。

購入した防災かるたに取り組んでいる様子

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

数度にわたる防災教育の実践において、本校で行ってきた防災教育（主に避難訓練）では不足していた「避難後にどう行動するか」という視点が盛り込むことができた。二次災害や避難所でのトラブルを防ぐという「減災」の視点を盛り込み、「防災」・「備災」と結びつけて考えていくことも可能になったといえる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか

生徒たちの中に災害・防災に対する意識を持たせる契機とすることができた。具体的には、避難所での行動は大人に任せるもの・従うものという意識を揺さぶり、災害時に求められる活動に自ら積極的に参加していく意識を養うことができたと考えられる。避難物資の配分について考える際には、さまざまな避難者の立場に立った上で必要なものや支援について考える視点を獲得できたと考える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

これを機に、学校として防災（災害時における避難）に関する体制づくりが始まった。同時期に水害に被災したということもあり、４年前の水害と今回の水害で得た減災に向けての教訓を継承する教員の意識は格段に強まったといえる。今回の取り組みの中で、結城市防災安全課の方々とも連携・協力させていただいた。また、作成した防災すごろくを近隣小学校に配布するなど、近隣の小中学校との連携を視野に入れた取り組みを行うことができた。今後、避難訓練をはじめ、様々な場面で連携を深めていけるようにしていきたい。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本実践では、生徒が主体的に活動できるような活動として、HUG を導入した。地域の実態に合わせて、実際の洪水時の避難場所や避難者数を設定した点が工夫した点といえる。

また、地理・理科・道徳による教科横断的な活動を導入した点も本実践の工夫した点であるといえる。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

【課題】地域や近隣の小中学校との連携をまだまだ深めることができていない点

⇒学校内で終わらず、地域に輪を広げるためのカリキュラム作成やネットワークづくりが急務である。

【今後に向けた方策】体験的学習の導入

学校名	千葉県立館山総合高等学校
担当教員名	筒井　智会

活動のテーマ	被災時に自分と他人のために行動できる人になろう
主な教科領域等	教科領域（　課題研究，学校家庭クラブ活動　）
活動に参加した児童生徒数	１・２・３学年（　４００人　）
活動に携わった教員数	１０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１００　人【保護者・地域住民】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ，人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年５月１７日　～　２０２０年１月１５日
想定した災害	地震

活動報告

１）活動の目的・ねらい

超高齢化・過疎化が進行し，三方を海に囲まれた房総地域において，災害時に率先して行動する資質を育て，他者と協働して最善策を導きだし，弱い立場の人たちに配慮ができる人材を育成する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

月	内　　容	人数	学ぶ	行動	普及
5	家庭クラブ週間　校内パウンドケーキ募金	100		○	○
5	里まち meatup　減災活動紹介，パウンドケーキ募金	5			○
6	北条海岸 BEACH マーケット　減災活動紹介，子ども防災巾着コーナー	100			○
6	ポスターセッション　減災活動発表	80			○
7	退職教員の会　　減災活動発表　ストレッチ講座	5			○
8	宮城防災ジュニアリーダー合宿参加	6	○	○	
8	ふくしま学宿（1 泊 2 日バス研修）	32	○	○	
9	台風１５号被災地区　支援活動（3 回実施）	30		○	
9	被災地支援　校内パウンドケーキ募金	100		○	○
9	校内カフェ～館総防災スタンプラリー～実施	100			○
10	DIG（避難想定ゲーム）講座　2・3 年→1 年	40	○	○	○
11	DIG（避難想定ゲーム）講座　2・3 年→PTA	40		○	○
11	千葉科学大学「災害時高校生にできること」講演会	32	○		
11	まちカフェ　減災活動紹介　ストレッチ　かまどベンチ紹介	100		○	○
12	全校集会　減災活動紹介	400			○
12	台風１５号被災地区　被災調査・支援活動（2 回実施）	10		○	
1	学習発表会　減災活動発表	150	○		○

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・階上中生の主体的に活動する姿に感銘を受け，減災や避難時の知識を学ぶのではなく，協働して正解のない答えを導きだす資質が大切であるとの思いからアクティブラーニングを意識的に取り入れた。また，SDGｓを授業に取り入れ，環境問題や弱者への配慮，誰一人取り残さない意識の醸成を図った。

・実際に被災地に赴き，その場でその時の状況を想像し想像することの重要性を感じ，台風 15 号被害地区に数回訪問し，その日の状況や被害の状況を伺い，対話を通して生徒が被災者の気持ちに寄り添う機会を作った。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

（ア）家政科で学んだことを減災活動に生かす試みとして，パウンドケーキを焼いて募金活動をしたり，台風による強風被害を受けた地区に赴き，ハンドマッサージをしたりしながら困りごとを伺い，パウンドケーキを差し上げる活動を実施した。

（イ）全校や地域に向けて普及活動を行った。

A）防災スタンプラリー（パッククッキング・防災クイズ・防災ダンス・新聞スリッパ・防災ゲーム・ストレッチなど）を土曜日に開催。幼児～高齢者まで多くの来校者があった。

B）DIG（避難想定ゲーム）講座を下級生やPTAに向けて開催した。

C）まちカフェという駅前の本校主催イベントで減災活動について紹介した。

D）全校集会にて減災活動紹介を紹介した

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり，どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・被災地で被害にあった方や復興に関わる方の苦労話を聴き当事者の想いをくみ取り，「何かやらなきゃ」と自分にできることを考え始める生徒が増えた。【物事に進んで取り組む力】

・生徒の中にはこの活動がきっかけとなり進路選択に積極的になった。【目的を設定し実行する力】

・ボランティア活動に積極的になり「見返りを求めず行動することは気持ちがいい」と気付いた生徒がいた。【ボランティア精神・他者への働きかけ力】

・これらの減災活動を各所で発表するにあたり，自主的にプレゼン資料を作成した。【主体性】

・その他の学習態度や生活態度が向上した。【規律性・ストレスコントロール】

・発表や質問に答えることで更に思考が深まり【熟考】，相手に伝えるスキルの必要性に気づいた。【発信力】

③教師や保護者，地域，関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・図らずも台風15号により本校がある館山が被災地となり，減災活動への関心が地域全体で高まった。生徒のボランティア精神が向上し，支援活動を意欲的に実践している。家政科生徒はパウンドケーキを作る機会が多いため，このパウンドケーキ支援活動は「私たちにできる支援」と自信をもって行動し，自己有用感が向上していると感じる。あきらめの気持ちでいっぱいの被災者にパウンドケーキを差し上げると，笑顔になり，感謝の言葉をいただき心の交流ができていると実感する。この活動とボランティア精神を一時的なものにせず，継続して行う努力が必要と感じる。

・本校ではこの支援活動や福島研修などで学んだことを発表する機会と地域連携に恵まれている。11月には「まちカフェ」で減災・支援活動について発表した。高校生が減災・支援活動を積極的に実践していることは，高齢・過疎化が進むこの地域で大きな心の支えになっていると感じた。また，消防団や市の社会安全課の協力が得られる関係ができているため，今後幅広い活動も考えられる。

5）工夫した点，実践の特徴・特筆すべき点

・「学びの足あと」と称した自作のワークシートで身についた力を認識する取組みを行った。

・階上中学校の避難所運営マニュアルを参考にし，生徒が本校における避難所運営マニュアル作成に取り組んだ。

・昨年度から防災関係の県外視察に行っている。そこで親交を深めた各地域の学校から励ましのお手紙や色紙と義援金をいただき，及川先生が説明していた「N助」を実感した。兵庫県や宮城県で館山の状況を発信し，街頭募金をしてくれた学校や先生方の存在に感謝と驚きである。「被災初心者」の私たちとしてはこの資金の有効に活用しなくてはと思案中である。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・減災活動・支援活動を実践している生徒は確実に生きる力が向上しているが，本校全体からみると一部の生徒に過ぎない。まずは学校全体でこれらの活動に取り組む体制を整え，生徒の資質向上に努めたい。

7）その他

〈活動変更説明〉台風１５号等の被害により，当初予定していた事業を上記のとおりに変更した。そのため助成金の使途内容も変更し，復旧状況，支援活動の様子を記録に残し，今後の減災活動において発信するために必要となるビデオカメラやタブレットを購入した。

学校名	東京都立浅草高等学校
担当教員名	中村　典弘

活動のテーマ	災害時帰宅支援ステーションの役割を担う都立学校における生徒の共助力の養成
主な教科領域等	教科領域（２年次必修「人間と社会」、３・４年次選択「人間と社会・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ体験」）
活動に参加した児童生徒数	＜必修＞２学年（　１６５人　）、＜選択＞３～４学年（　３７人　）
活動に携わった教員数	３５　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２５　人【地域住民・その他（　日本堤消防署および消防団　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１日　～　２０２０年３月３１日
想定する災害	地震・津波・台風・洪水・河川氾濫　・

活動報告

１）活動の目的・ねらい

都立学校は「災害時帰宅支援ステーション」としての役割を担うことになっている。都内でも有数の観光地である浅草に最も近い都立学校である本校は、東日本大震災の発生時には３００人を超える観光客を中心とした帰宅困難者が身を寄せた。また、午前部、午後部、夜間部から成る三部制の定時制高校である本校は、深夜から早朝を除いたあらゆる時間帯に大地震が発生しても、生徒が在校していることになる。

震災時に学校に居合わせた生徒は、生徒相互の支え合いだけでなく、場合によっては教員の監督、指示の下で、学校に避難している多数の帰宅困難者を支援する役割を担うことになる。災害発生時の自助と、体制が整ってからの公助との間をつなぐ、「災害時帰宅支援ステーション」における生徒による共助の力を育成することは、本校において必要性、喫緊性ともに高い課題であると考えている。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

＜３～４年次選択「人間と社会　ボランティア体験」、週２時間授業（前期のみ）、２展開＞

（７月）　・普通救命講習（９０分×２回）、
　　・防災に関するビデオ学習「東京マグニチュード 8.0」

（９月）　・NHK ティーチャーズ・ライブラリ収蔵ビデオ教材の視聴
　　「クローズアップ現代　子どもたちが綴（つづ）った大震災」
　　「ＮＨＫスペシャル防災力クライシス　そのとき被災者を誰が救うか」
　　「クローズアップ現代　首都直下　震度７の衝撃～どう命を守るか～」

＜２年次必修授業「人間と社会」、週１回授業（通年）、クラスごと１展開で計８展開＞

（１１月）　・NHK ティーチャーズ・ライブラリ収蔵ビデオ教材の視聴
　　「証言記録　東日本大震災　宮城県南三陸町～高台の学校を襲った津波～」
　　「クローズアップ現代　首都直下　震度７の衝撃～どう命を守るか～」

（１２月）　・「災害時帰宅マップ」の作成

（１～２月）・普通救命講習（４５分×４回）　＊教員も受講→「救命講習受講優良事業所」の認定（申請済）

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・教員そして生徒が、震災はいつでも起こるもの（階上中３年生のメッセージ）との意識を常に持ち、災害に居合わせた当事者として如何に考え、行動するかを考えさせることを、減災教育の中心に置くことになった。

・「ボランティア体験」…来年度の受講者が普通救命講習の既修者になるため、上級救命講習へ移行を準備中。
・「人間と社会」…今年度以降、２年次全生徒と教員（任意）が普通救命講習を受講できる体制を確立できた。
・助成金の活用によって、救命講習テキスト複数冊を学校の蔵書として整備し、教員の受講が可能となった。これに伴って、「修了者が従業員の３割超」という東京消防庁の条件を満たし、「救命講習受講優良事業所」としての認定を受けることになった。（現在、申請および受理済）

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

「人間と社会」は、「人間としての在り方生き方関する教科」として、全都立高校において必修科目とされている。本校では、平和教育として３年次の沖縄修学旅行で奉献する千羽鶴の作成を中心に展開されてきたが、今年度からは本来の趣旨に立ち返り、平和教育（年間５時間、以下同)、キャリア教育（４)、地域理解（３)、奉仕活動（２)、対人理解（２)、減災防災教育（８）といった体験学習を中心とした総合的な内容を扱うこととした。9 月研修会で得られた知見を担当教員間での共有を経て生徒に伝えたり、助成金による購入教材を充実させたりすることにより、実施時数や内容について、ほぼ全面改訂ともいえる大幅な改善を果たせた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

（ビデオ教材を視聴した感想として)「学校が震災現場となった場合に、どんなことが起こるのか。避難者としてだけではなく、避難所の高校の生徒として何をしたらいいのかを考えるきっかけとなった」「(津波で同僚を目前で亡くした教員に対して）助かったのだから、その人の分も懸命に生きるのが気持ちに添うことになる」「他人を踏み台にしない前提で、自分が助かるために最大限の努力をすることが大切」、(災害時帰宅マップを作成した感想として)「大きな川に架かる橋や、ガラス張りのビルなど、大きな地震後には通れなさそうな帰宅経路もありそう。何通りか考えておく必要があるのでは」「避難所や救護所になる途中の学校や病院の位置を知っておく必要がある」、(救命講習の感想として)「震災時だけでなく、急病に居合わせた時に役立てたい」。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・(既述）多数の教員も普通救命講習を修了し、学校として減災力を高められた。
・２年生８クラスに各４回ずつ救急隊員を派遣していただいた日本堤消防署との連携、交流、本校と生徒への理解が深まり、次年度に向けた授業改善や新規授業内容に向けて全面的な協力を得られることとなった。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

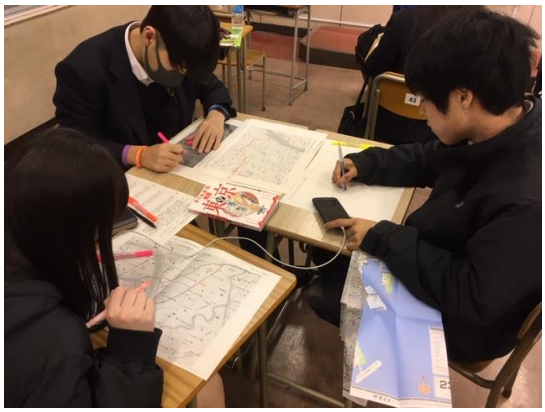
・生徒には体感が難しい震災の記憶については、NHK ティーチャーズ・ライブラリを中心とする良質なビデオ教材を活用することによって、仮想的、疑似的に追体験をさせることができた。
・「マップ」作成にあたっては情報科の協力を得てデータの打ち出しを行い、教科を超えた指導体制を組めた。
・救命講習の講習料金の実態は講習テキスト代であって、学校が蔵書すれば教員間で共有使用することにより、５年毎の教材の改定までは、公費予算を組まなくとも教員が生徒とともに救命講習を受講できるという助言を消防署から受け、変則的な校内研修として、教員が受講、修了できる体制を組むことができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・消防署との協議により、救命講習に加えて水害や震災に関する講話を実施する方向で準備中である。
・必修授業では普通救命、選択授業では上級救命を実施し、教員も受講できる方向で消防署と協議中である。
・年度途中でのプログラムへの参加と助成決定であったため、助成金で購入できた「避難所 HUG（避難所運営ゲーム)」等をフル活用できる時間的余裕がなかったが、次年度以降、十分に活用していくことにする。

７）写真、その他の資料

○防災ハザード／帰宅マップの作成



○普通救命講習　＊日本堤消防署および消防団との連携

＊応急手当奨励事業所としての認定

優良マーク

○「人間と社会」授業アンケート（８クラス中４クラスで一斉休校に入る前に実施できた。 **n=64** ）

		大いに そう思う	やや そう思う	あまり 思わない	全く 思わない
救命講習	積極的に学べたか	34%	41%	17%	8%
	生きる上で役立つ	37%	48%	8%	6%
伝統工芸	積極的に学べたか	38%	42%	12%	8%
	生きる上で役立つ	17%	33%	40%	10%
減災学習	積極的に学べたか	23%	44%	25%	8%
	生きる上で役立つ	34%	43%	15%	8%
進路学習	積極的に学べたか	19%	53%	18%	11%
	生きる上で役立つ	23%	47%	23%	7%
人間関係	積極的に学べたか	22%	47%	23%	8%
	生きる上で役立つ	24%	41%	22%	14%
平和学習	積極的に学べたか	31%	41%	20%	8%
	生きる上で役立つ	20%	36%	33%	11%
授業への 全般評価	授業への総合評価	31%	52%	11%	6%
	関心、意欲の喚起	29%	44%	17%	10%
	知識、技術の習得	34%	34%	25%	7%
	また受講したいか	26%	27%	32%	15%

学校名	横浜市立東高等学校
担当教員名	副校長　横田孝行、主幹教諭　須貝　聡

活動のテーマ	我ら東高共助隊～東の応援団は地域の応援団～
主な教科領域等	教科領域（　特別活動　）
活動に参加した児童生徒数	全学年（　６０人　）
活動に携わった教員数	８　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	２５０　人【保護者・地域住民・その他（　保育園園児・職員　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１２日　～　２０２０年３月２５日
想定する災害	地震・土砂

活動報告

１）活動の目的・ねらい

災害時において受け身ではなく「積極的かつ能動的に動かなければならない」という生徒の意識改革を推進する。自助のみならず共助の意識と行動力を身に付け、地域に頼られる存在になれるよう研修を重ねる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

4 月 12 日 校内防災訓練（火災想定避難訓練・消防署講演・搬送法体験）	火災を想定した避難訓練を実施。また、傷病者の搬送法を消防隊員より学んだ。消防署長からは、「阪神淡路大震災」に派遣された時の実体験を通じた教訓を聴き、多くのことを考えさせられた。
8 月 26～28 日 南三陸ボランティアツアー	生徒 13 名、教員 2 名が参加し、被災地の人との交流・ボランティアを行った。防災ワークショップでは、東日本大震災の教訓や私たちのするべきことを学んだ。
9 月 1 日 校内防災訓練（地震想定避難訓練・集団下校班別集会）	地震を想定した避難訓練を実施した。また、集団下校班別集会を行い、非常時に個人ができることを確認し、自助の意識を高めた。
9 月 29 日 拠点校防災訓練	拠点校の地域防災訓練に参加。近隣の小学校、中学校、そして地域住民の方と、非常時における役割の確認および防災訓練を行った。
12 月 2 日 保育園避難訓練	近隣の馬場保育園と連携し、園児の避難誘導を本校生徒が行った。
12 月 19 日 AED 講習会	希望者を募り、本校で AED 講習会を実施した。生徒 45 名、保護者 23 名、合計 68 名が参加し、心肺蘇生法および AED の講習を受けた。
12 月 20 日 校内防災訓練（土砂災害想定避難訓練）	土砂災害時における避難訓練を行った。本校の一部が土砂災害警戒区域に入っており、緊急時の対応をシミュレーションできた。
2 月 5 日 防災地図の作成	非常時に対応する地図の作成をした。集団下校ルートの確認と、その周辺の危険個所を把握することで、非常時におけるシミュレーションができた。
2 月 6 日 防災グッズ体験会	非常時における防災グッズの体験会を実施した。クラス代表が体験することで、非常時には各クラスのリーダーとして活躍することを期待する。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

ユネスコスクールの活動の一部として、減災教育を明確に位置付け、その中で「いつどこにいても」対応できるよう、生徒の行動変容を起こすことを意識に置いた。今後、校内の他の取り組みにおいても、階上中学校での「伝える力」の育成に倣い、生徒の学習を支援していきたい。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

３度実施した避難訓練において、回を追うごとに避難時間が短縮された。また、１回目の時には避難が移動にしか見えなかった集団であったが、３回目では真剣に避難訓練に取り組む姿勢となり、受け身であった生徒の意識に変化が感じられた。一つ一つ地道に行った減災教育の効果が実証されたように思われる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

もしもの時に、どう動くべきか、何をするべきか等、自らの非常時における行動をイメージすることができ、避難行動に有効な履物やバックを使用するように意識できるようになり、非常食をロッカーに保管するなど、自助能力が身についてきた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

生徒と同様、非常時には教師が率先して動くものとの固定観念があったが、生徒が自助能力を身に付けることにより、そのパワーを共助にも生かせるのだとの実感を持てた。一人でも多くの生徒が自助能力を身に付けることで、組織だった行動が可能となり、校内だけでなく地域へ貢献できる可能性を見いだせたことは大きな収穫であった。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

まずは自助能力を身に付けないと、共助もおぼつかないであろうと考え、様々な自助能力を高める体験に重点を置いた。特に、全21クラスの代表生徒にその機会を多く与え、細かい技術やポイントを習得してもらい、その上でクラスへの伝達をおこなった。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今年は風水害が多かったこともあり、防災に対する生徒の意識も比較的高かったように思われるが、それでもどこか他人事のように考えてしまう生徒の意識改革が最優先の課題であると感じた。そういった意味では、南三陸ボランティアツアーのような実習を多くの生徒に体験してもらうことで、その目的を達成できるのではないかとの手ごたえを感じることができた。今後、遠足や修学旅行のメニューの中に被災地の訪問を入れることや、被災された方の講演会等を実施することで、多くの生徒の心が、減災の方向に向いてくれることを期待したい。

７）その他（※特にあれば記述）

現在学校では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための臨時休業措置がとられている。先行き不透明な中、学校再開に向けての準備に気仙沼での学びが確実に活きてくると感じている。

学校名	大阪府立堺工科高等学校 定時制の課程
担当教員名	保田　光徳

活動のテーマ	地域減災・防災プロジェクト～東北支援を通じて～
主な教科領域等	教科領域（　堺学Ａ・堺学Ｂ・堺学Ｃ・総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	１～３学年（　１２０人　）
活動に携わった教員数	３０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	３００　人　【保護者・地域住民・その他（　伝統工芸士　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月２２日　～　２０２０年３月１３日
想定する災害	地震・津波・台風

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校は海の近くに位置し、海抜が 10m で地震の際の津波被害が考えられるので、地域と共に東北支援活動に取り組み、ボランティアに関わることにより、震災による津波等の被害について学び、地震・津波が来た時の対処の仕方や避難の方法についてなど様々な事を教えてもらい、その事を教訓として地域自治会で「防災・減災」についての講演を行ったり、有事の際に本校と地域のために役立てる。

生徒・保護者及び地域住民の方々には、被災した方々の立場に立って自然災害について考えてもらいたいので、「東北支援プロジェクト」を通じて様々な支援を行う必要がある。

また、本校生徒が製作した「バイオディーゼル発電機」（不要な天ぷら油や廃油で発電出来る機械）により、停電の際の明かりの確保・各種充電等、地域の防災活動に役立て、生徒作の「電気自動車」は避難場所への誘導の際の先導車として活用する。「ドローン」による「避難経路マップ」の作製も減災・防災教育にとって重要である。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

〇2019 年 4 月 20 日・21 日

・堺刃物まつり」において、「東日本大震災」のパネル展示及び本校オリジナルＤＶＤの放映をおこない、地域の方々に「地震・津波」に対する防災意識を高めてもらった。風化を防ぐ活動として、被災地支援用の「線香」の販売及び募金活動をおこない、被災地への「義援金」とした。

〇2019 年 6 月～

・「防災啓発グッズ」の製作に取り掛かる

〇2019 年 7 月～

・「バイオディーゼル発電機」の製作に取り掛かる

〇2019 年 7 月 7 日

・本校主催の「一万人のキャンドルナイト」をおこない、地域の電気を一斉に消して「停電」を体験してもらい、「減災・防災」について地域の方々と話し合った。

〇2019 年 7 月 23 日～26 日

・宮城県・岩手県を訪問し、本校生徒作の「包丁」・「線香」及び「義援金」の寄贈をおこない、被災地の方々と交流し、地震・津波についてのお話を聞かせて頂いた。宮城県農業高校・岩手県立大船渡東高等学校・岩手県立遠野緑峰高等学校と交流し、「防災・減災」についての意見交換をおこなった。

・各被災地において、これまでに寄贈した「包丁」の砥直しもおこなった。

〇2019 年 7 月 9 日～12 日

・九州北部豪雨被災地である福岡県朝倉市、熊本地震被災地である益城町・阿蘇神社・熊本城を訪問し、生徒作の「支援品」及び「義援金」を手渡し、「減災・防災」についての意見交換をおこなった。

○2019 年 7 月 17 日～19 日
・沖縄県石垣島八重山商工高等学校において、本校の「東北支援プロジェクト」についての発表をおこない、支援活動や防災活動について意見交換をおこなった。
○2019 年 7 月 29 日～30 日
・「風に立つライオン高校生ボランティア・アワード」全国大会において、「東日本大震災」の被災状況・復興状況及び支援活動についてのポスター発表をおこない、「防災」の大切さを理解してもらった。
○2019 年 8 月 23 日～25 日
・「環境教育賞」優秀賞を受賞し、北海道の「環境ハウス」において「バイオディーゼル発電機」と地域の防災活動についての発表をおこなった。
○2019 年 9 月～
・被災地支援用「線香」の製作に取り掛かる
○2019 年 9 月 25 日
・本校主催で「夜間防災訓練」をおこない、本校生徒と地域住民が「減災・防災」について、様々な体験を通して考察し、意見交換をおこなった。
○2019 年 10 月～
・被災地支援用「包丁」の製作に取り掛かる
○2019 年 10 月 19 日～20 日
・「堺まつり」において、「東日本大震災」のパネル展示及び本校オリジナルＤＶＤの放映をおこない、地域の方々に「地震・津波」に対する防災意識を高めてもらった。風化を防ぐ活動として、被災地支援用の「線香」の販売及び募金活動をおこない、被災地への「義援金」とした。
○2019 年 10 月 28 日～31 日
・北海道胆振東部地震の被災地である厚真町・安平町・むかわ町・札幌市・北広島市を訪問し、生徒作の「支援品」及び「義援金」を手渡し、「減災・防災」についての意見交換をおこなった。
○2019 年 11 月 9 日～10 日
・「線香まつり」において、「東日本大震災」のパネル展示及び本校オリジナルＤＶＤの放映をおこない、地域の方々に「地震・津波」に対する防災意識を高めてもらった。風化を防ぐ活動として、被災地支援用の「線香」の販売及び募金活動をおこない、被災地への「義援金」とした。
○2019 年 11 月 18 日～19 日
・気仙沼市立階上中学校を訪問し、生徒さんに「防災カルタ」の製作依頼をおこなった。本校生徒が製作した「防災啓発グッズ」とのコラボを予定している。
・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪問し、階上中学校と本校のコラボ「防災啓発グッズ」の配布方法や気仙沼市「岩井崎の塩」の活用についてなどの意見交換をおこなった。
○2019 年 12 月 15 日
・全国ユース環境活動発表大会において「防災とバイオディーゼル発電機」についての発表をおこなった。
○2020 年 1 月 21 日～24 日
・西日本豪雨の被災地である岡山県倉敷市・真備町、広島県を訪問し、生徒作の「支援品」及び「義援金」を手渡し、「減災・防災」についての意見交換をおこなう予定である。
○2020 年 2 月～
・階上中学校とのコラボ「防災啓発グッズ」の製作に取り掛かる。
○2020 年 2 月 9 日
・地域の「防災訓練」において、「東北支援プロジェクト」を通じて学んだことについての講演及び「バイオディーゼル発電機」の活用についての講演、本校オリジナルのＤＶＤ放映をおこなう。

○2020 年 2 月 17 日～
・階上中学校とのコラボ「防災啓発グッズ」の配布活動
○2020 年 3 月 3 日～5 日
・「東日本大震災」各被災地を訪問し、生徒作の「包丁」・「線香」・「防災啓発グッズ」及び「義援金」を手渡し、「減災・防災」についての意見交換をおこなう。
・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪問し、階上中学校と本校のコラボ「防災啓発グッズ」の配布方法について最終決定する。

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

気仙沼市立階上中学校の防災の取り組みに非常に感動し、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の館長佐藤克美氏のお話、そして及川幸彦先生の講演に心を打たれ、すぐに本校教員及び生徒に報告をおこなった。教員・生徒から特に「防災カルタ」と「防災クイズ」を本校及び地域で活用できればという声が上がり、地域との「夜間防災訓練」において「防災クイズ」のコーナーを設けた。また、「防災かるた」は階上中学校に依頼して生徒の自筆で作ってもらい、本校生徒が作った地域の地場産業品と共に「防災啓発グッズ」として、地域の防災意識を高めるために配布する予定である。また、「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」や「阪神淡路大震災記念人と防災未来センター」の来館者への配布も考えている。

昨年度までは、地域の地場産業である「包丁」・「線香」の製作だけだったのが、今年度は「防災啓発グッズ」として、他の地場産業品の製作にも取り組むことが出来て、被災地への寄贈だけではなく、近隣地域の方々へも配布する事となり、地域の防災意識を高めることが出来る。助成金の活用で「防災啓発グッズ」（伝統地場産業の蜻蛉玉ネックレス・香立て）の製作が可能になった。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

地域の消防署の協力で実施した「防災クイズ」は、本校生徒・教員、地域住民の方々が大いに参考になったと大好評で、今後、より充実した「防災クイズ」をおこなう予定で、そのために「減災・防災」についての広く深い知識が必要となり、これまで以上に真剣に取り組むことになった。

階上中学校生徒自筆の「防災カルタ」とのコラボ「防災啓発グッズ」を製作することにより、本校生徒・教員、地域住民の方々の防災意識が高められ、オリジナル「防災カルタ」の製作の計画も進んでいる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

「防災クイズ」と「防災カルタ」は、本校生徒にとって非常に興味深く、なおかつ入りやすい内容であるため、クイズやカルタから多くの防災に関する知識を得ることが出来て、多くの学びがあった。また、階上中学校生とのコラボ「防災啓発グッズ」製作の発案は本校生徒からであり、中学生に刺激を受けて、これまでに育んできた防災意識や「自助」・「共助」・「公助」の意識が一気に開花した感があり一回り成長したようだ。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

防災活動を通じて、学校と地域との連携が非常に密接になった。「防災訓練」についても別々にしていたが、合同で複数回（日中バージョンと夜間バージョン）実施することとなった。避難経路マップも学校と地域が協力して作成する予定である。

また、地域の伝統工芸士の方々も「防災」に対する意識が高まったようで、地場産業による「防災啓発グッズ」の製作に積極的に協力して頂けるようになった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

階上中学校の素晴らしい取り組みをいかに地域で広めていくか、そして気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館のために出来ることを学校・地域で話し合った。早速 11 月に階上中学校を訪問し、中学生自筆の「防災カルタ」の作製を依頼し、快諾して頂いた。気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館も訪問し、来館者に「防災カルタ」が入った「防災啓発グッズ」を配布する提案をした。

地域の地場産業によるコラボ「防災啓発グッズ」（防災カルタ入り）を製作することで、地場産業が盛り上がり、配布することにより、地域全体の防災意識が高められ、階上中学校の防災活動の紹介も出来て、まさにウィンウィンの活動であると考えている。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

学校と地域が連携することは、「減災・防災」活動をする上では必要不可欠であると痛感した。そのために、地域と近隣の小・中・高等学校が一体となって、警察や消防も巻き込んでの「防災訓練」や「減災・防災に関する講演会」などを実施する必要がある。次年度以降は、鉄道会社・バス会社にも協力してもらって、有事の際の避難方法や避難経路について話し合う必要がある。

次年度以降の実践に関しては、防災カルタ入り「防災啓発グッズ」の配布地域の範囲を広げ、各地の伝承館に置いてもらい、多くの人の防災意識を高めたいと考えている。

7）その他（※特にあれば記述）

この度は、本プログラムの２回にわたる研修のおかげで多くの学びがありました。また、助成金まで頂き、心より感謝しております。この有意義な経験を、今後の本校の減災活動に活かしていきたいと考えています。今後ともよろしくお願い致します。

ume.
sakura.
Go Japan!

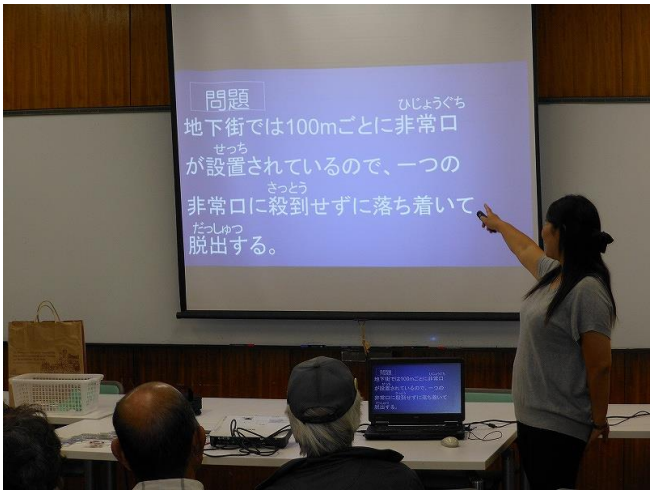
shindaiwa
iDG3100M
Diesel Engine Generator
INVERTER

shindaiwa
iDG3100M
INVERTER

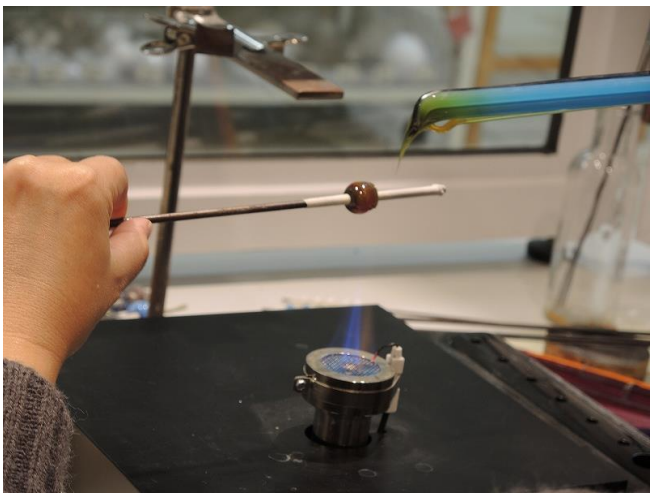
shindaiwa
iDG3100M
INVERTER

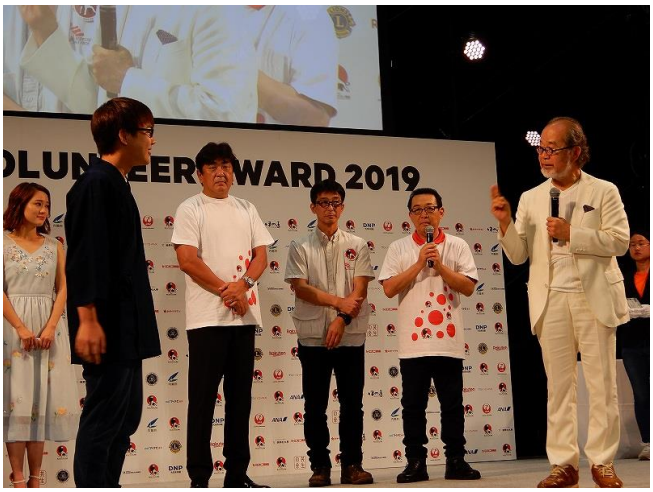
大仙校区防災訓練
命を救う手段
～東北支援活動を通じて～

震度
7


問題
地下街では100mごとに非常口
が設置されているので、一つの
非常口に殺到せずに落ち着いて
脱出する。

防災キャンペーン
防災キャンペーン
防災キャンペーン




WARD 2019

学校名	広島県立廿日市高等学校
担当教員名	峯本　英紀

活動のテーマ	総合的な学習（探究）における防災教育の推進及び避難訓練の改善
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）
活動に参加した児童生徒数	１～３学年（　８４１人　）
活動に携わった教員数	５８　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	１４　人【その他（　廿日市市職員，広島県職員，学校運営協議会委員，SDGs ワークショップ外部派遣講師　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月１日　～　２０２０年３月３１日
想定した災害	地震・津波・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　火災　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・総合的な学習(探究)の時間においては，横断的・総合的な学習や探究的な活動を通し，課題発見・課題解決に向けて主体的，創造的，協同的に取り組む資質・能力及び態度を育てる。また，学び方やものの考え方を身に付け，課題解決のための探究的な活動と自己の在り方生き方を関連させて取り組むことができるようにする。1 年生は地域の課題を設定し 2 年生は SDGs と関連付けて課題を設定する。その中で防災教育については減災・防災活動に対する意識を高め，地域の防災力を向上させるための課題解決に取り組む。その教育活動の成果を行政，地域関係者を招いた場で行政への提言を行う。

・避難訓練

人命を尊重し，災害時の被害を最小限にとどめることを目的とする。震源地が近く，津波到達までに時間的余裕がないことを想定し，予め定めたマニュアルに基づき緊急避難として校舎の最上階に避難する。点呼・指揮等の訓練を行い，指示・命令系統の課題を発見し，改善する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①総合的な学習（探究）の時間についての実践内容は，（ア）課題を自分ごとにする，（イ）課題発見・解決学習の過程を学ぶ，（ウ）その過程を実践してみる　という柱に沿って次の計画表のどおりに進められている。(図１)

1学期	2学期	3学期
「探究の過程を学ぼう」	「廿日市市(地域)について探究し，提言してみよう」	
・オリエンテーション ・プロジェクト学習の過程を学ぶ	課題(テーマ)を設定する ・情報収集・調査をする ・情報の整理分析をする ・まとめ，表現をする １２月　ポスター発表	・発表した内容を再構築する ・情報や資料を精選する ・個人レポートを作成する

図１

②避難訓練　11 月 6 日（水）　15：20～16：10　実施

・緊急地震速報の情報確認　→　校内非常伝達①（非常放送で教頭が行う）→　大津波警報発令の情報確認　→　防災本部設置（１号棟３階図書室）→　校内非常伝達②（非常放送で教頭が行う）→　生徒は各避難場所に集合。教職員は本部に集合，避難方針を確認する。→　正担任は各避難場所に行き，点呼・安全確認及び指示　→　学年主任は本部で待機し，正担任からの報告を受ける。→　学年主任は本部（教頭）に報告する。

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①２年生の総合的な学習の時間については今年度より SDGs の視点を取り入れて課題設定をした。SDGs の考え方を学ぶことにより，テーマ設定が多様化，具体化し課題解決に向けてより「自分ごと」としてとらえたアプローチができるようになった。1 年生も次年度の探究活動につなげるために 2 月に SDGs ワークショップを開き，カードゲームを行った。

②避難訓練については，津波による避難訓練のみを行った昨年度の反省を踏まえ，今年度は地震発生時の行動訓練の後に津波による避難訓練を行った。本校は敷地が広く，定時制を併設している，そのため非常災害時には確実で迅速な情報伝達が求められ，特に携帯電話等不通時の連絡手段や方法を検討しておくことは必須である。今後は助成金で購入したトランシーバを活用した連絡体制の構築を進める。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

避難訓練については，地震発生により机の下に入り身を守るという動作が入り，生徒はより集中して避難訓練に取り組んだ。来年度は大地震により想定される被害について考えさせて行動を取らせるなどの改善が考えられる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

総合的な学習（探究）における防災をテーマにした課題解決学習においては，「ただ，指定されたところに逃げればよい」という行動をとるのではなく，自分たちが地域の防災の問題点に気づき，解決方法を考え，自ら行動に起こして，地域の人や外国人，避難者に働きかけなければいけない存在になることが求められていることがわかったと記した生徒もいる。

SDGs ワークショップでは経済・環境・社会すべての分野が連鎖しているということを、カードゲームを通して学んだ。最初は経済活動を重視して自分のグループがお金を貯めることだけを目標にしていたが，徐々に全体の活動を見通して社会に還元できるカードの使い方をグループ同士で話し合いカードを交換できるようになった。(図２，図３）　３学期の生徒の個人レポートでは，水害からの避難についてのレポートを一例にあげると，自らマンホールや側溝の場所を調べ，マップを作り，効果的な発信方法や地域との連携を求める提言をしている。防災・減災の観点から活動を通して課題を解決し発見する力を身に付けている。(図４）

図２　SDGs ワークショップ

図３　SDGs ワークショップ

私の提言：安全に避難するためには避難経路にある危険な場所を理解すべきである

1 課題設定の理由

「災害」というのは、いつ、どのようにして自分の身に危険が及ぶのかは誰にも予測することはできません。そこで私たちにできることは事前に対策をしておくということです。もしものためにと避難場所と家族で話し合ったり、確認したりするなど対策をイヤっている人も多いのではないでしょうか。できれば、少しも避難場所まで安全にたどり着けるとは、限りません。だから今回、私は避難場所ではなく避難経路に注目しました。

2 現状と課題

課題として取り上げられるのは、避難場所や避難経路は確認していても、避難経路にある危険な場所は把握していない理解できていないという人が多いことです。このままでは避難場所まで安全にたどり着くことはできませんし、避難場所まで避難しようとしても避難する途中でケガをしたり、命を落としてしまうかもしれません。

3 解決策

ここで私が提案するのは「危険な場所を印したマップを作る」ということです。マップを作り、配布することで避難経路にある危険な場所を把握することができ避難途中にケガをする、命を落とすということを防げると思います。

4 具体的な提案

具体的な提案は実際に経路を歩き危険な場所を確認するということです。この時に、特に注意する必要があるのはマンホールと側溝です。なぜなら洪水が起きた時、地面は水浸しになります。そのため、マンホールや側溝の位置が確認しずらくなりケガをする可能性があるからです。

〈マンホールが危険な理由〉
・洪水の時、マンホールの蓋が外れ水が噴き出してしまうかもしれない。また、蓋が外れたマンホールに落ちてしまい溺れる可能性がある。

〈側溝が危険な理由〉
・洪水の時は側溝の水の流れも速く、万一側溝に落ちてしまった場合、流されて溺れる可能性がある。

方法
① 実際に地図をもって避難場所まで歩く
② マンホールや側溝の場所を地図に×印をする

そこで私は、実際に山陽女学園前駅から避難場所である廿日市高校まで歩き、マンホールと側溝の位置を調べてみました。

5 今後の課題

ですが以上のことを行う上でいくつかの課題が出てきます。
① 私たちだけでは、歩ける範囲、地図を作れる範囲が限られる。
② 配布場所、方法はどのようにするか。

6 今後の課題の対策

①への対策は「小中学校の授業などで町歩きをする」ということです。廿日市市内にある小中学校で授業の一環として廿日市市を歩き、危険な場所を見つけます。そうすることで広範囲の危険な場所を探すことができますし、小中学生の災害への危険意識がより高まると思います。

②への対策は「公民館や市役所など公共の施設に置く」ということです。色々な人の目に触れる場所に置いておけば興味を持ってマップを手にしてくれる人が増えると思います。
また公民館や市役所など公共の場所に足を運ぶことが少ないという人に対しては、回覧板にマップを入れてまわすなどして工夫すればマップを見てもらえる機会が増えると思います。

他にもたくさん課題があると思います。
この課題を解決するためには、事前の調査、そしてみなさんの協力が必要です。
一緒に私達の安全を守っていきましょう。

図４　生徒の個人レポート

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

総合的な学習（探究）の時間は 12 月 18 日(水)にポスターセッションを行い，廿日市市役所，広島県職員，学校運営協議委員が参観した。調査内容については，インターネット等で調べるだけでなく，アンケート，現地調査なども取り入れている。その結果を踏まえた考察を経て結論を導いているため，課題設定から解決までの構成がわかりやすく，視点のレベルの高さ，発表の巧みさについて好評価を得た。各グループのポスター発表の後，ふせんを活用して見学者から質問，評価をさせているが，より深い学びとなるように，質問力を高め，対話の場面が設定できるとよい，という助言をいただいた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

総合的な学習（探究）の時間のポスターセッションについては，「自分の考えを論理的に表現する力」，及び「社会をよりよくしていこうとする態度」について５段階の自己評価をさせる。昨年度は２月にポスターセッションを行い，自己評価を記入して終わっていたが，今年度は個人レポートを作成させた。その活動内容は上述の通り，９月に階上中学校で受けた研修と方向性が同じであるといえる。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

総合的な学習（探究）の時間については防災教育の分野に限らず，単年度で終わらせるには惜しい調査研究活動である。１・２年合同のポスターセッションを活かして，次年度の２年は今年度の調査研究を継続していくようなスタイルが構築できるとよい。

学校名	山口県立田布施農工高等学校
担当教員名	教諭　宗正　いぶき

活動のテーマ	地域の防災助っ人！防災訓練から防災食開発まで ～田布施町の安心・安全は『望幸隊』にお任せあれ！
主な教科領域等	教科領域（　課題研究、食品化学、農業と環境　）
活動に参加した児童生徒数	３学年（３５人）、２学年（７０人）、１学年（１４０人）、合計（２４５人）
活動に携わった教員数	４０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	５３０　人【保護者（20 人）・幼児（30 人）、中学生(150 人)、地域住民（350 人)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	２０１９年４月７日　～　２０２０年３月２７日
想定した災害	地震　・台風・河川氾濫・土砂　・

活動報告

１）活動の目的・ねらい

（１）若者も思わず参加したくなる、地域の防災訓練を企画・運営

（２）アレルギーに対応した防災食のメニュー開発

（３）防災意識を高める、情報発信

↑幸せを望めるような活動にしたいとの想いを込め「望幸隊」（ぼうさいたい）を結成

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

（１）地域の防災訓練を企画・運営

今年度、新たな試みとして、学校が所在している田布施町内にある中郷自治会と連携し、防災訓練の企画と運営に取り組んだ。生徒と自治会役員が５月から話合いを重ね、調理や応急処置、簡易な調理器具作りなど体験型の企画をした。(防災訓練は、９月に実施した。)

なお、自治会の要望として下記の内容が挙げられた。

・若者や子どもの参加を増やし、防災意識を高めて欲しい。
・小麦粉アレルギーのある子供もいるため、アレルギー対応した防災食メニューが良い。
・災害時だからこそ食べて心が満たせるようなメニューや、我々、高齢者がふだん作ったことがないようなレシピを教えて欲しい。
・味付けは各家庭異なるし、体調によって配慮しないといけないこともある。個々人で味付けや食感が自由に対応できるようなレシピにしてほしい。

そこで、生徒達はこれらの要望に答えられるようなレシピ開発に取り組んだ。調理工程に遊びを取り入れ、アレルギーにも対応できるよう小麦粉または米粉生地を選べるような、ペットボトルを用いたピザのレシピを開発した。

告知も生徒が携帯アプリを使ってポスターを作成し回覧板に掲載したところ、町民７５人のうち５４人もの参加申込があるなど大反響だった。

「ちびっ子隊長」バッジ
文芸部がデザイン

台風で、予定が１週間延期されたが、当日は、各家庭から調理で使用するカセットコンロや鍋などを持参するほか、畑から野菜を持ち寄るなど「本当の災害があったら、皆で助け合おう」と声をかけながら活動していた。西日本豪雨災害の経験から、被災している子供の心をケアしながら子供の自己肯定感を高められるようにと「ちびっ子隊長制度」も考案した。訓練時、実際に未就学児の子供に隊長バッジをつけて、調理部門のリーダーとして活躍してもらった。

地域と連携した活動記録

R１年６月：平生町曽根地域交流センターにて地元の野菜を使った防災食の料理教室を開催。（30 人参加） ８月：平生町の幼稚園にて、遊びながら作って防災を学べる防災食教室を実施。（20 人参加） １０月：周防大島町にて、防災食の研究発表を実施。 R２年２月：柳井市にて、子育てパパママ防災食作り講習会を実施予定。（80 人参加） 上記の他、各種講演会や発表会にて、活動紹介を実施した。（産業教育振興会、農業クラブ中国大会プロジェクト発表、農業アクション大賞、山口地域連携教育の集い、柳井市子育てネットワークやない他）

（２） アレルギーに対応した防災食のメニュー開発

ア　ペットボトルピザ…ペットボトルやＵ字工など廃材を利用し、体温で発酵させるピザの開発。

写真左　：生地をペットボトルに入れ発酵

写真中央：ペットボトルを持ちながら、発酵中の間に子供達と全力鬼ごっこ

写真右　：Ｕ字工での焼き上げ

イ　米粉うどん…小麦粉アレルギーに対応した麺を開発。

写真左　：参加者の好みに合わせて製麺

写真中央：本校の酒粕も加え、体が温まるような酒粕うどんに仕立てた

写真右　：地域住民への炊き出しを実施

ウ　缶詰リゾット…空き缶を利用したリゾットの開発。燃料は、消毒用エチルアルコールを使用。

写真左　：缶詰リゾット完成の様子

写真中央：保存食を用いて、味付けや米の固さなどを個々人で調整。

写真右　：手作り燃料で炊飯を実施。

（３）防災意識を高める、情報発信

ア　レシピ・防災に関する手順書の作成（対象年齢に合わせて作成）

対象年齢に合わせて、紙芝居～レシピまで作成した。実施の際には、主催者と何度も協議をした。レシピ開発の課題としては、試作品の研究費の捻出だった。今回のプログラム助成金や、地域の方からの食材提供などを受け試作をすることができた。また、スマホを積極的に活用し、生徒が活動を記録したり、作業手順を動画で紹介したりすることにより、より多くの方に活動に興味を持っていただけるようになった。

紙芝居には、スマホも活用
（台本の原稿や、音響として利用）

イ　各種講演会での情報発信

学校ＨＰ、防災や子育て・教育に関わる講演会に、生徒が出向き研究発表を行うことで、情報発信をすることができた。これにより、商品開発への協力や、訓練を支援して下さる団体などネットワークが広がった。

講習会のチラシ

毎回、多くの参加者

パネル発表も実施

３）①<u>９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと</u>

研修を受け、一番、印象的だったことは「東北の子どもたちの本気の減災意識」そして「他者を守りたい」という強い気持ちだった。自分たちが経験した辛い過去を、次世代のために糧となるよう相手の目線に合わせた減災プログラムは、とても感銘を受けた。この学びを活かし、自校では生徒や地域住民を交えて「地域の持続可能な減災活動」について、真剣に話し合い減災訓練を企画する実践に活かした。これにより、住民と生徒を交えた会議を行い、次世代を育てる仕組みや企画について討論の場を設け、若者がリーダーとなった新しい形の減災訓練を９月末・２月に実施することができた。

②<u>研修会を受けての自校の活動の変更・改善点</u>

これまで配布していたレシピを、対象年齢に合わせて作成し直した。また、訓練内容など口頭での確認事項を、再現できるようようマニュアルにまとめるなど改善を図った。住民の方や、他団体からの問い合わせで多かったことのひとつに「活動風景や調理工程を動画で撮影したデータを、自分たちの活動の時に活用させてほしい。」とのリクエストが多かった。当初、デジカメやスマホで撮影した動画を提供していたが、画質が悪かったり舞台での活動発表の撮影時には音声が十分に拾えなかったりと課題があった。この点については、今回のプログラム助成金を活用して購入したビデオカメラを活用して改善していきたい。

③<u>昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと</u>

今年度は、東日本での減災教育の内容を基にした活動内容になったため、被災地で実際に課題となった事柄を想定し、研究内容を改善することができた。我々は、その中でも「食」について研究している。助成金を活用することによって、アレルギーに対応した食品開発の試作数が増えたことにより、研究が充実した。対象者に合わせた食品開発に取り組めたことで、各方面の方が防災食へ興味を持ってくださり、講習会の回数も増加した。

また、助成金活用によって念願だったビデオカメラを購入することができた。現在、このカメラを活用して、防災食作り動画撮影や研究内容をまとめたものを作成し、各自治体にデータ提供していけるよう準備を進めている。このことによって、活動内容を幅広く普及することができると考える。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

大阪府立堺工科高等学校定時制の課程より寄贈

このプログラムによって、東北や全国各校の減災教育への取組など多くの情報を得ることによって、活動改善へ大きく役立った。また、プログラム参加校とのつながりもできた。中でも、大阪府立堺工科高等学校定時制の課程との交流は、生徒に活動の視点を広げるきっかけとなった。同校の主管教諭、保田光徳先生が東日本大震災後から教科「堺学」において被災地に生徒が作成した包丁を届ける活動をされており、今回のプログラムが縁で本校にも包丁を寄贈していただいた。本校の生徒は、この包丁を通して他校の活動に興味関心を高め、校内に限らず全国のネットワークをつなげて活動の輪を広げたいと視野が広がるきっかけとなった。また、生徒が主体的に地域と連携したことによって、地域住民の減災に対する興味関心・意識が高まり学校への問い合わせも増えた。減災教育活動の視点においては、活動した生徒の地域への興味関心、減災に対する意識の向上、進路先において活用していきたいなど将来につながる明確な目標へと変わっていくことができた。

②児童生徒にとって具体的に学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

地域社会の実態や要望に対応した、柔軟な思考能力を高めることができた。これまでは生徒主体の商品開発が行われていたが、このプログラムを活用することによって、地域住民・生産者・直売所など多様な立場の方と意見交換をしながら商品や防災訓練の内容を改善することができた。これによって多角的な視点と共に、地域貢献したいという明確な目的が生まれ、進路決定へと繋がっていった。中でも、対象者によって減災に対するニーズが大きく異なるという点については、当初、生徒が大きく悩み、苦悩していたが、相手の立場や体調、置かれている環境によって求められている事柄が違うという点に気づけたこと。また、地域と歩み寄って一緒に計画を立てること。不安を希望に変えていくために、自分たちには何ができるか考えること。このような力が、この１年を通して生徒が大きく身につけたと感じた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

生徒を中心に、学科や学校を越えた協力体制の構築が少しずつできてきた。また、町・学校運営協議会・自治会などもこの活動を応援してくださり、継続してほしいという声が出ている。関係機関からは、地域社会で活躍していける人材を増やすためにも、この活動は子どもに対し効果が期待できると声をかけていただき、来年度は行政と連携しながら子ども食堂を活用した活動にも取組みたいと考えている。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

生徒の自主性や使命感を高めるために、生徒主導の活動となるよう地域連携の際には、生徒を話し合いの場に必ず出席させ、直接、担当者と話し合いをすることで両者の意欲が高まった。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今年度、実践して地域から減災教育に対する要望を多く受け、活動の場が広がった。課題としては、組織としての体制を確立することである。来年度は、町の大規模な合同避難訓練が本校で実施される予定もり、町の拠点として減災に対する備えや受け入れが出来るよう、教員・生徒共に減災意識を高めていきたい。また、プログラム参加校のつながりも継続していきたい。本校が所在する田布施町は、イチジクが特産品でありドライイチジクを作って防災食を作れないだろうかと現在、考えている。これまでイチジクを輪切りにする際、形が崩れやすく変色しやすいという課題があったが、今回、大阪府立堺工科高等学校定時制から寄贈していただいた包丁を活用して、コラボした商品開発にも挑戦していきたい。

学校名	高知県立大方高等学校
担当教員名	教頭　上原　健

活動のテーマ	黒潮町の「犠牲者０」のために、高校生にできること
主な教科領域等	教科領域（　学校設定科目　地域学　）
活動に参加した児童生徒数	１～３学年（　８４人　）
活動に携わった教員数	２０　人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	８０　人　【地域住民・その他（　黒潮町役場職員　）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	２０１９年４月８日　～　２０２０年３月３１日
想定する災害	地震・津波

活動報告

１）活動の目的・ねらい

南海トラフ地震発生時に甚大な被害が想定される黒潮町の唯一の高等学校として非常時、平時ともに何ができるか、地域住民の防災意識の向上にいかに貢献するかを地域や行政機関とともに考えさせる。防災の活動の中でコミュニケーション力や課題解決力、プレゼン力といった社会性を身につけ、社会に貢献できる自信を持ち、自己肯定感や有用感の向上から学習意欲や進路決定意欲に結びつけたい。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

	【避難所運営に関する活動】	【避難路検証に関する活動】
４月～６月	・第１回　炊き出し訓練	・保小中高合同避難訓練＆交流会
７月～９月	・避難所運営マニュアル改訂案を町役場に提案 ・福祉避難所でのオリジナルＨＵＧ実践 ・全校生徒でオリジナルＨＵＧ実践	・第１回逃げトレ訓練 ・第１回逃げトレ訓練の住民への報告会 ・視覚障がい者の方との逃げトレ訓練 ・聴覚障がい者の方との逃げトレ訓練
10 月～12 月	・隣接市の中学校への出前授業(中学生・保護者の方とオリジナルＨＵＧ実践) ・夜間避難所運営訓練 ・高知市内の小学生への出前授業（避難所での健康管理について）	・第２回逃げトレ訓練 ・第２回逃げトレ訓練の住民への報告会 ・第３回逃げトレ訓練 ・黒潮町地区防災シンポジウムでの取組発表
１月～３月	・福祉避難所との連携避難所開設訓練 ・近隣の小学生への出前授業（作成した防災カルタを用いて）	・第３回逃げトレ訓練の住民への報告会

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

９月の研修において、備えの大切さと被災当事者の思いを活かす防災教育の取組が必要と感じ、学校行事や防災の活動を行う際に、「今ここで発災」したらという「if」を意識させる注意を生徒に投げかけた。併せて、「逃げる」を定着化するために地域の方と実証実験に基づく避難訓練を通して、被災当事者の方々が繰り返し言われる「てんでんこ」の思想の定着化を図った。また、これまで、「オリジナルＨＵＧ」中心のシミュレーションに基づく出前授業から、「防災カルタ」を作成しそれを活用した知的理解の促進に基づく出前授業

への転換を図った。また、外国人を意識した取組への発展など新たな他分野への取組につなげた。助成金については、カルタ作成や配布資料作成・防災だよりの印刷等の教材作成や広報活動に活用させていただいた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

避難所訓練においては、昨年度に引き続き『大方高校オリジナル HUG』（以下『オリジナル HUG』）を用いて数回校内での避難所運営訓練を実施した。校内では、それ以外に炊き出し訓練や黒潮町の夜間避難訓練を活用した避難者受入れ訓練を行い、避難者を受け入れる上での課題を確認した。また、黒潮町健康福祉課の訓練と連携し、要配慮者を本校の一般避難所から福祉避難所へ移送する訓練も実施した。

今年度の新しい取組として、近隣の福祉避難所に指定されている施設に出向き、要配慮者の避難所生活を考える『オリジナル HUG』（いわゆる『出前 HUG』）を実践した。また隣接市の中学校の要請を受けて、出前授業として生徒、教員、保護者、地域住民と『オリジナル HUG』を用いた避難所運営訓練を行った。

今年度のもう一つの取組の柱は『避難路検証』である。昨年度、授業で本校への避難が想定されている地区で行ったことから、今年度、他の３地区からの要請を受けて実践した。いずれも京都大学が開発した『逃げトレ』アプリを用いることで、避難に関する様々なパターンが検証でき、地区防災会議では検証結果を、時間の経過とともに避難者が移動する状況と津波到達が視覚的に分かる動画を用いて報告し、より早く避難できるようになるための提案も行った。

今年度の取組は、昨年度と比較して校外活動が増え、生徒と地域や行政機関と連携する機会が増加した。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

要配慮者の避難を考える活動が多かったことから、要配慮者の避難や避難生活を考え、非常時に高校生に何ができるか、平時から何ができるかを考え、黒潮町への避難所のハード面での提案やヘルプマークの周知、手話教室へ通うなど、自らが必要なことは何かを考え、行動することができるようになった。

また、地域や行政機関との連携が増え、コミュニケーション力やプレゼン力も向上傾向にあり、社会に役に立てるという自己効力感や有用感の向上が見られた。（県オリジナルアンケート結果より）

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

防災教育の企画、運営、推進は教員間の防災プロジェクトチームが中心となる仕組が定着し、黒潮町役場との連携した取組も増え、社会福祉協議会や福祉施設、NPO ともつながることができたが、プロジェクトチームのメンバーの見直しにより、さらに効果的な運営取組につなげることが課題として見えてきた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

取組を授業だけでなく防災委員に広げ、できるだけ多くの生徒の経験になるようにし、校内の活動から地域での活動を増やした。それにより、防災の取組や対応は当たり前の雰囲気が生徒の中に生まれている。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

教員と連携機関との打ち合わせの回数を確保し効果的な事前学習を行うこと。防災プロジェクトチームのメンバーを見直すこと。定期的な防災委員会の開催と早期の活動テーマを決定すること、などに取組みたい。

保小中高合同避難訓練

福祉避難所でのオリジナルＨＵＧ

夜間避難所運営訓練

逃げトレ訓練

小学校への出前授業

炊き出し訓練

福祉避難所開設訓練

夜間避難所運営訓練

高齢者疑似体験と逃げトレ訓練

小学校への出前授業